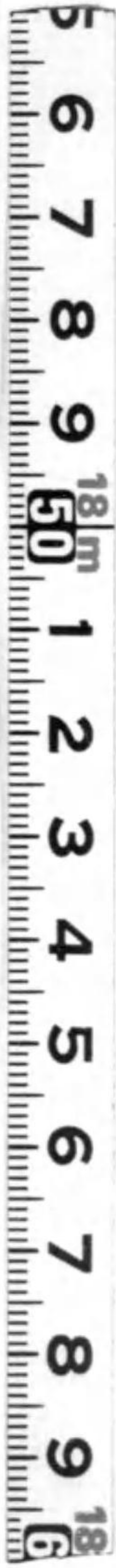


御木本幸吉

289-Mi 247ウ



289



始



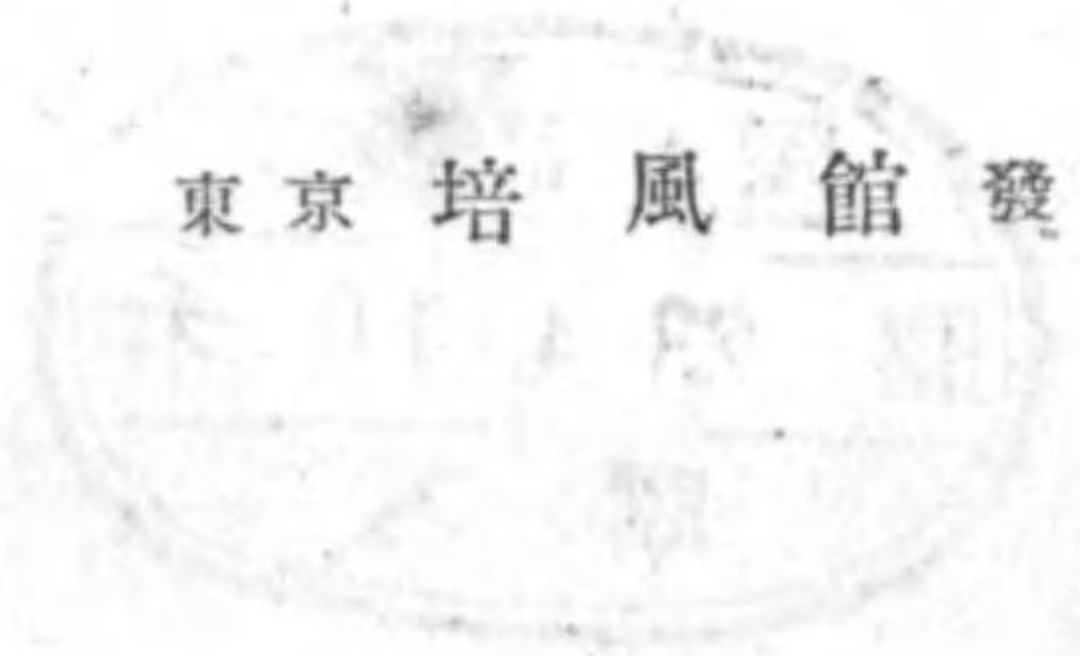
289  
M1 247

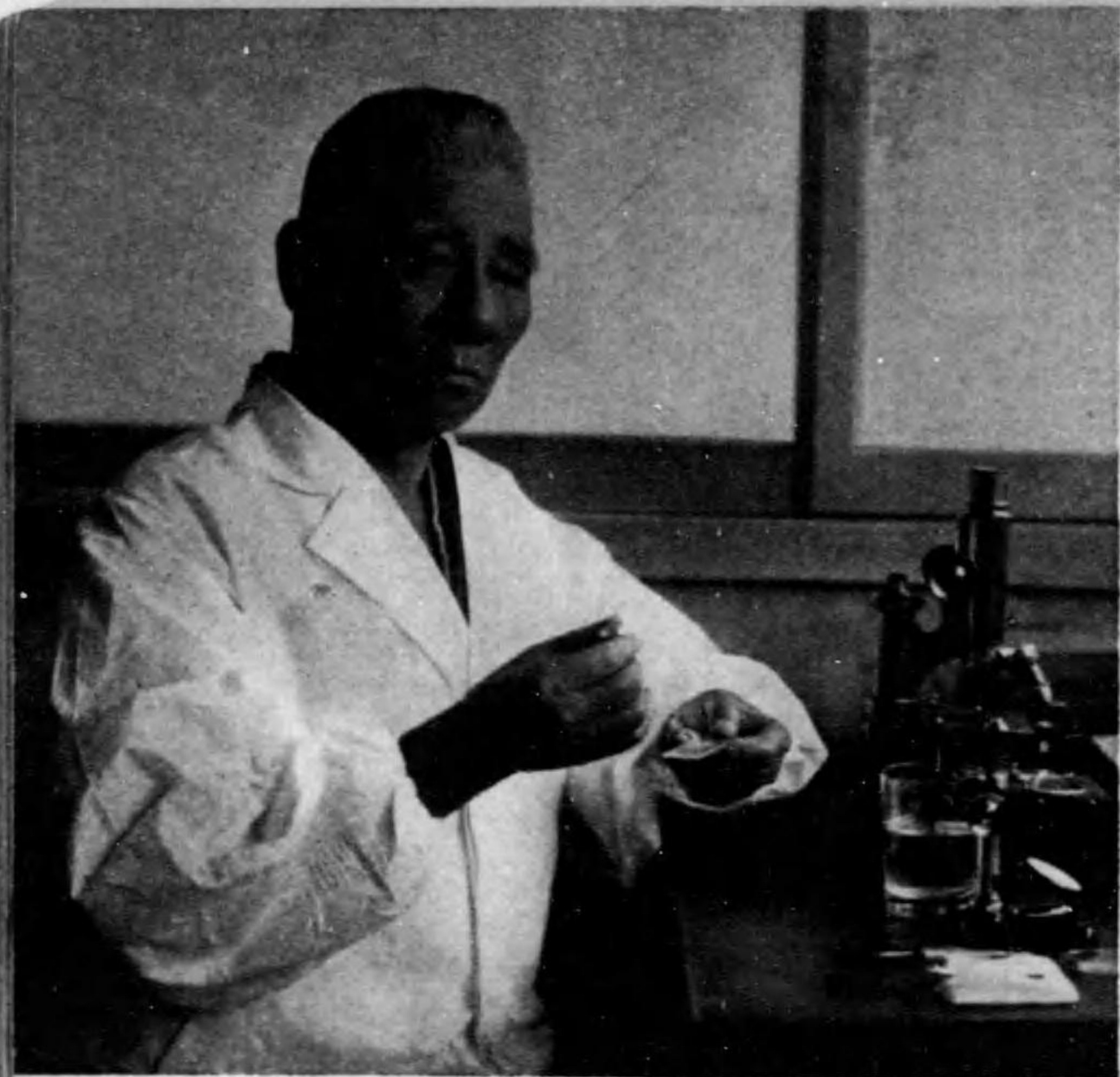
御 木 本 幸 吉



文學博士  
乙竹岩造著

東京培風館發行





多徳研究室における御木本幸吉



## 序言

一、これは今日、眞珠王として世界に知られている御木本幸吉の事歴の略述である。私は、かねてから幸吉の傳記を書いているのであるが、最近幸吉の事柄が國語讀本にのつてから、何らか、その参考になる資料がないかと、しきりに諸方からの問合せに接するのである。よつて主要な事柄を抜取つて一小冊子にまとめたのが、即ち本書である。

一、本書の用字は、地名・人名およびやむを得ない引用文の外は、全部、過般内閣・文部省で制定指示せられた常用漢字表によつたのである。記述の仕方についてもまた、大體において、同じく現代かなづかい表によることにした。

昭和二十三年一月二十五日幸吉滿九十歳の誕辰にあたりて

著者 しろす

目次

一	光つた良い兒の時代……………	一
二	青春を色どる奮闘生活……………	六
三	水産業者としての活躍……………	一三
四	養殖眞珠發明の工夫……………	二二
五	半圓眞珠の發明と愛妻の死……………	三六
六	多徳島御木本眞珠養殖場……………	四三
七	行在所御召の光榮と眞圓眞珠の發明……………	五七
八	世界的發明とたたえられる所以……………	六五
九	人目をさらつた博覽會の出品……………	八四
一〇	五箇所養殖場の新經營……………	九〇
一一	貿易品としての御木本パール……………	一〇〇
一二	豪快に終始した中國巡遊……………	一一〇

一三	要領のよかつた米歐視察……………	一一六
一四	養殖眞珠世界的争議の真相……………	一一九
一五	發明家としての御木本幸吉……………	一三八
一六	實業人としての御木本幸吉……………	一四八
一七	寄附行爲に特異な心境……………	一六六
一八	郷士の改進黨一貫の盡力……………	一七八
一九	廣き敬けん心と強き責任感……………	一九七
二〇	希有の壽康と非凡の攝生……………	二二五

### 一 光つた良い兒の時代



昭和二十二年三月文部省から出された國定教科書の國語第五學年上に、眞珠と題した記事がある。

それは「美しい眞珠、世界じゆうの人から愛される眞珠、これを、人工で作りだすことはできないものだろうか。」

一つぶの天然眞珠をのひらにのせて、大きなゆめをえがいていた、ひとりのわか者があつた。

と書き出し

このわか者こそ、のちに眞珠王として世界に知られた御木本幸吉であつた。

と述べている。このように世界中の人々から眞珠王とうたわれている御木本幸吉とは、イツタイどんな人であろうか。またかれは、どうしてそんな名高い人になつたのであろうか。その來歴を明らかにするのは極めて興味深いことである。

幸吉は安政五年即ち千八百五十年一月二十五日に志摩國鳥羽町に生れた。志摩は最近國立公園の

一となつた山海形勝の地であるが、鳥羽はその扇のかなめにも當る中心の町で、江戸時代から港として相當のにぎわいを見せていた。かれの父は晋吉カキキといつて、代々「あわ幸」という屋號でウドンの製造及び販賣を家業としていたが、元來發明の才能に富んだ人で、自ら一種の粉ひき機械を考案し、これを使つてウドン粉をひいたのである。それが認められて三重縣知事から賞金を授けられたが、この才能がその長男たる幸吉に傳つたとみえて、後年眞珠養殖の大發明をなすに至つたのである。幸吉も最初はこの粉ひき機械を使つて家業を手傳つていたのであつて、この機械は三十年ほど前まで御木本家に保存されていたが、木製の部分が次第に腐つてしまつて、石臼だけが今も残つてゐる。かれは幼名を吉松キマツといい、九人の弟妹の長兄として生れ、家庭はいとみにぎやかであつたが、生活がなかなか容易でなく、母もとの骨折りは一通りでなかつた。しかし吉松の幼時に大きな感化を與えたのは祖父の吉藏で、吉藏は世間から「後ろに眼のあるような人」といわれたほど賢明な人で、ウドン屋家業の傍ら野菜や燃料の賣買を營んで利益を得、あわ幸の家に藏を建てたのは吉藏さんだと評判された。この外隣家に住んでいた西村忠太夫という人からも、少からざる感化を受けたようである。幸吉自らも次の如く言つてゐる。

隣家に忠太夫という、古道具屋から鳥羽の町役まちやくになつた器量人が住んでいて、私を愛すること實子の如くで、常に商賣上の秘けつなどを教えこんでくれた。この忠太夫さんが聽かせてくれた

話の中で、今も思い起すのは次のことである。當時オモトの愛がんが非常に流行つたが、ある植木屋がミヤコノジョウという一はちのオモトを持つていた。それには赤い實がなつていたが、この植木屋が悪心を起し、實の一つを白にしてミヤコノジョウの變種と見せかけ、不當の利益を得ようと考えた。そして先ず竹を割つてその中の薄紙状のものを取出し、それで赤い實の一つを丹念に包みあげた。一見白の實まじりのオモトとなつたから、これを遠方に持つて行つて高價に賣りつけて法外の利益を得たそうである。しかし商人には信用が大切で、不正な品で相手を欺くが如きは禁物である。たとい利益を得ても、それはホンの一時で長續きはしない。度々雨に打たれると薄紙がはげて、白の實が赤にもどるは決つたこと。買つた人はその植木屋を恨んだに相違なく、植木屋も榮えずに一生を終つたといふのである。

この教訓の如きは幸吉が生がいの處生法を支配したように思われるが、これと同時に、負ざらゐの凝り性で、一度思い立つたことは仕遂げねばやまないのが、持つて生れた性格であつた。これを示す次の話がある。子供の多い中流以下の家庭では、八九歳になつた兒に乳兒を背負わせるのが當時わが國の慣習で、これを子守と稱えた。御木本家でもその例に漏れず、長男たる吉松は八九歳頃からは幼い弟や妹を背負わされたものである。そうした場合、普通の子供は二三分もたつと、おろしてくれと親にせがむが、吉松はそうしたことは決して言わず、親がおろしてくれまでよく辛

抱していたといわれる。またその凝り性を物語る次の事實もある。鳥羽の氏神たる賀多神社では毎年六月に大祭があつて、その催し物に能狂言があり、氏子を始め宇治山田邊からも有志の者が参加してこれを奉納する。吉松もこの催し物に加わるため子供の頃から狂言を習つたが、他の同好者が先輩や師匠について學ぶものも多かつた中に、かれはそうした便宜も持たぬのに、何とかして他の者を出し抜きたいとの念に燃えた。ちようど京都から野村又三郎という狂言の家元が鳥羽にきていと聞いたので、父に頼んで仕事の暇にこの狂言師の許に通い、一心不亂に練習をしたため、師匠もその藝熱心に感じて免許を興えた。そして大祭の當日衆人の前に演出された吉松の狂言の立派さは言うまでもなく、かくも藝事に熱心な若者の將來こそ見ものであらうとは、見物父兄達の驚歎の聲であつた。

熱誠な吉松の性格を示す次の事例もある。粉ひき機械の考案に餘りにも熱中した父晋吉に積年の疲労が出て、ついに病の床に就いたが、十歳を一つ二つ越したばかりの吉松は、健げにも母を助けて家業にいそしみ、かねて病父の看護に餘念もなかつたが、フト耳にしたのは、常安寺内の薬師堂に祈りをこめると大抵の病氣がなおるとのうわさで、これが親思いの吉松の小さな胸を打つた。父の病氣がなおるのなら、どんな苦勞もいとわないと固い決心を定めて直ぐ薬師堂に出かけ、毎月七日には必ずこの堂に夜ごもりを續けて、二個年間一回も缺かさなかつた。この堂に夜ごもりする者

には、お爺さんもあればお婆さんもあり、盲人不具者もあり、御詠歌や観音經などを唱えて徹夜するのである。吉松はいつも早くから行つて、こうしたお勤めの始まる前にお爺さんやお婆さんに、あんまをしてやるのが往々であつた。これがためにお經の文句も覚え、あんまも上手になつたといわれる。この孝行むすこの念力が届いたものか、父の病氣も一先ず快方に向つた。

このように光つた良い兒として育つて行つたが、成規の教育としては、栗原亮休という寺子屋師匠の家に通つて、読み書き算數の初歩を習つたに過ぎず、その學力は全くそれから後の獨學自修によつて得たものであつて、この點において幸吉は、かの發明王エジソンとよく似ている。



## 二 青春を色どる奮闘生活

父の病氣を看護するにつけても、ますます募ってきたものは、どうかこの貧苦を克服して、働きたいある仕事をしてみたいという一念であつた。幸吉は當時の心境をば次の如く告白している。

家業のウドン屋は相變らず手傳わされていたが、ツクズク考えたのは、元來ウドン屋はあまり好ましい商賣ではない。自分の家は四五代引續いてこれを營んでいても、身代があまり太らない。この上一杯八厘のウドンをいくら賣つたところで、とても金持になれない。何かもつと大きな利得のある商賣はないものかと、しきりに考えたのであつて、それは十二三歳の頃であつた。

しかし、ただ金持になりたいばかりではいけない。およそ仕事をするには目標がなければならぬから、自分も金持になるについては、當時鳥羽第一の金満家が廣野藤右衛門、第二番が阿部平吉、この二人を乗越すことはむずかしいとしても、一生の中には、せめて鳥羽で三番目の金持になつてみたいと考えた。

さて當時における社會の情勢は、明治維新の大政變にあつて世の中は全く變り、江戸時代二百四十年間傳つてきた職業の世襲固定が、封建制度の廢棄と共に一舉に打破られて、たれでもかれて

も、いかなる職業にも従事することができるようになつた。ことにどの地方でも心ある青年達は、この時勢に應じ、非常な勢で自立自營に立上つたのである。性來有爲で氣力に満ちた少年吉松が、烈々たる意氣込みを以て奮闘的實際生活の第一歩を踏み出したのも、當然のことであらう。それは明治四年四月かれが十四歳の時に父の許を得て、ウドン屋の傍ら始めた青物の行商であつた。青物商は祖父吉藏のしたことでもあつて、かれには全然當てのない仕事でもなかつたが、とにかく一生懸命で従事した。朝は暗いうちから寢床を飛び出して青物を仕入れ、それから鳥羽の町中を隅まで「青物は要りませんか。」と聲を張上げて賣つて歩くのである。ウドン屋は毎夜早くとも十二時頃まで店を開いている。その戸をしめるまで家業を手傳うのだから、さすがの吉松も、ウドン屋の遅寝と青物屋の早起との板ばさみに、睡眠不足をかこたざるを得なかつた。それに鳥羽の慣習として、冬の朝食には芋がゆ即ちさつま芋を入れたかゆをすする家庭が多かつたが、そのさつま芋を家ごとに賣つて歩くには、夜のまだ明けぬ中から出かけねばならなかつたから、つらかつた。それで冬は朝食をゆつくり食べている暇がないので、前夜うどんの店じまいの時、窯の下に多少灰火の残っているの中へ芋を投げこんでおくと、朝になつてほほ焼けている。それを出掛けに出出して懷中にねじ込み、行商の途々にかじるのであつた。ことに寒い朝には、この焼芋が懷爐の代用にもなり、焼芋のぬくもりのさめた頃には、よほど歩き回つて全身が汗ばむほどであつた。

月日は流れて明治の八年、吉松が十八歳となつた時の六月に、英國の軍艦シルバー號が鳥羽に入港して泊まつていた。その時かれは青物や鶏卵をこの船に賣りに行つたのが、外國人に商賣を手始めとなつたが、それは次の如き話を生んでいる。

私は外國の人と商賣するのは初めてだと喜んで、さつそくシルバー號へ鶏卵の賣込みをやつた。鶏卵を詰めた箱を脊負つて、はしけから乗込もうとすると、番兵が立つていて乗艦を許さない。せつかくの賣込み計畫も水のあわにならうという場合、フト一つの乗艦策が浮かんだ。自分は幼い頃から足藝が大好きで、これには少々自信があるのを幸に、外國人でも日本の足藝は判らるう。これを見せて番兵の同情を得ようと思ひ、バカバカしいことではあるが、自分の乗つてきたはしけの船板や船具やあり合せの物で、足藝をして見せたところ、番兵は面白いと思つたのみえ、手まねで乗つてもよいと示したので、私は平素の道樂が思わぬところで役に立つ、藝は身を助けるとはこれだと喜んで、鶏卵箱を脊負つて乗艦して買つてもらい、なお番兵の後について艦内を進んで行つた。番兵が艦長らしき士官に何か報告すると、まもなく士官連が多勢そこへ集まつてきてズラリ並んだ。するとかの番兵が、先刻はしけでやつた足藝を今一度して見せよと身振りで促すので、私は軍艦の色々な道具を材料に使つて、種々の足藝をして見せた。すると艦長らしい人を始め士官連大いに喜び、面白い日本人だ、今日から當艦に自由に出入してよろしいと

あつて、それから同艦へ日用品の一手賣込みをすることになつた。

翌年しかし青物商を断然やめてしまつた。この薄利な商賣では、かれの抱く望を達し得べくもなかつたからである。それに代つて始められたのが穀物商であり、そしてその業務に精を出したが、いかに繁昌しても狭い鳥羽の町では、取引の範圍が限られていて、大きい商賣はできない。商人たる以上は外國人とも交易をして、あつばれ豪商になつてみたいとの志が、うつぼつとして青春の血潮に湧き始めた。シルバー號に鶏卵や雜貨を賣込んだ體驗も、かれの胸中に自信の糸を引いたに相違ない。しかしそれには廣く世間を知らねばならないし、世間を知るに最もよい途は見學旅行であるが、それに先立つものは費用であるから、これを積立てることに餘念がなかつた。

明治十一年の二月に父が隠居して吉松が世帯主となり、その名を改め、あわ幸代々の通稱幸さんを名乗つて、幸吉と呼ぶことにした。かくて世帯主となつた幸吉が、ますます精を出して働いたのは、一家の柱石となつた責任からでもあつたが、またうつぼつたる大望の抑へがたきものがあつたからである。それにつけても、かれが絶えずかこつていたのは、鳥羽の地は狭いということ、どうしても東京や大阪へ出てみたいという希望が強くなるばかりであつたが、やがてつかむべき機会がきた。この年の三月に同じ町の森岡利右衛門という人が名古屋を経て東京に行くことを聞いたかれは、この人と一緒なら父も安心して許すであろうと考えて、父に東京行きの希望を申し出した。

かねてから、この子の將來には見どころがあると思つていた父は同意し、路用にせよとて不如意の中から十五圓の金を與えたのである。父の好意と共にこれをおし頂き、それに十五歳の時から青物の行商や穀類の賣買で得た零細な錢をためておいた貯金が、積もり積もつて二十圓になつていたのである、合計三十五圓の金を持つて、最初の東京見學旅行へと出發したのである。

汽車のまだ通じていなかった時代のことであるから、長の道中をモモヒキ・キャハン・ワラジ掛けといふ出立で、振り分け荷物を肩に掛け、徒歩と渡船と人力車とで泊りを重ね、昔から音に名高い東海道五十三次の大部分を踏上げたわけである。當時の日記が今もなお御木本家に保存されていて、この年若き旅行者の行程や見聞を如實にほうふつさせるが、これによると、横濱で外國人相手の商賣が活潑に行われている有様は、田舎出のかれにいとど物珍らしかつたのみならず、功名心に燃え盛つていた幸吉には、強い感興と注意とをひいた隨一のものであつた。ことに中國商人がナマコ・キンコ・アワビ等の海産物を盛んに賣買しているのを見ては、深く思いを郷國志摩の海産物の上にはせて、その販路を考え、中にも俗にケシと稱する小さな眞珠が、眼藥の原料として取引され、さらに大きく形の整つた良質の眞珠に至つては、法外な値段で賣られているのを見て、世の中にこんな面白い商賣もあるものかと一驚を喫せざるを得なかつたのである。東京にはやや長く滞在し、それからさらに觀光の旅を日光にまで延ばし、今市の二宮神社に参り、自分もまた二宮尊徳の如く

に國利民福を進める事業をしたいものだ、若い心に深く誓つたものであつた。

旅行も歸路には、さしたる話のないのが普通であるが、幸吉の第一回東京旅行の歸路は、そうではなくつて異彩を放つている。というのは、箱根路にかかつて一つのでき事が起り、かれが圖らずも人命救助の健げな美談を産み出したからである。それは、静岡縣の四人の茶商が横濱での取引を済ませて歸縣するのと道連れになり、とある茶店で支度をなし、共に三島をさして箱根路を下つた。その中の三人はドンドン先に行つてしまい、巨體の持主で石川素十郎という人と幸吉と二人は、少し後れて坂路を下つて行つた。ト笹原とかいう邊で、この石川が突然倒れたのである。幸吉は驚き他の三人を呼んだけれど、三人はズツト先に行つていて、呼び聲も届かない。そこを通りかかつて一人の旅人もあつたけれど、掛り合ひを恐れてか急いで行つてしまふ。しかし幸吉には、かねて用心のため持合せていた寶丹があつたので、直ぐ取出して先ずその一片を病人の口に押し込んだが入らない。よつて他の一片を自分の口に入れ、だ液を混ぜ合せて、さらに石川の口に移してやり、それから病人の胸先を押しもんだり、色々介抱してやつたところ、幸にも息を吹きかえして眼を見開く。そこへ前きに進んでいた人達も引返し驅けつけてき、共々力を合せてかごを雇つてきて、それに載せて三島の宇の丸館へと運びこんだが、やがて全く快復したのである。

宇の丸館の向いは静岡新聞の賣店であつたが、石川が自分の助けられた一件をば、その店員に物

語つたところから、この話が翌日の静岡新聞に掲げられ、人命救助少年美談として伝えられ、伊勢新聞にも轉載せられた。伊勢新聞の記事によつて鳥羽の人々がこれを知り、父の耳にも入つたので、東京から歸つてくる幸吉を待ちうけたものは、實にこのうわさと賞賛の聲とであり、白面の青年がゆくりなくも、公共の記録たる新聞紙によつて、にしきを故郷に飾ることとなつた。

この旅行によつて得るところ甚だ多かつた幸吉は、翌十二年に、さらに西の方大阪・神戸に赴いて商業を視察し、前年東遊見學の結果と照し合せて、内外交易の一般の状況を察知することができた。水産養殖等に關するかれの素養と抱負とは、こうした間に漸次養われて行つたのである。

### 三 水産業者としての活躍

幸吉が水産業者としての活躍は今や始まろうとしている。わが國における水産養殖の途は古くからも多少行われたけれども、大いに發達したのは近時のことに屬する。明治十五年一月に日本水産會が創立せられて、小松宮彰仁親王その總裁に仰がれ、翌十六年に始めて水産博覽會が東京に開催せられた。海國日本の民として最も海岸線に富んだ志摩に生れ、獵船漁舟の出入絶えざる鳥羽の港町に育つた幸吉が、京濱や阪神への旅行見學にも照らして熟考した結果、水産業こそ自分の行く手であると思ひ定めたのは、明治十三年の春で、時にその年二十三歳であつた。

この年の二月初めて全國に町村會が設けられ、幸吉は選ばれて鳥羽の町會議員となつた。これぞかれが公職に携わつた最初で、實に全町會議員中の最年少者であつた。以來多年勤続したのであるが、町會議員としてのかれの活動振りを語るものは、堀さらえの仕事であつた。鳥羽の大里町・横町・および岩崎に沿うて一つの入江があつて、土地ではこれを堀と呼んでいる。沿岸の住民商店はこの堀のお陰で、荷物の揚げ卸しや交通に利便が多かつたばかりか、毎年秋から冬にかけてイワシ漁の季節には、遠くは三河・尾張から、近くは伊勢・志摩のイワシ船が、日に幾十隻となくこの堀

に入つて泊るのが常例で、その船員達が附近の店には大切な顧客であつた。それがいつ頃からか、土砂のために堀がだんだん淺くなつて、船の出入にも支障をきたし、堀沿いの町々では交通運輸に不便を被むつたのみならず、イワシ船も出入が不自由となつたため、他方の河岸に行くようになつた。これに氣づいたかれは、何とかしなければならぬと考へて堀を改修するを決意し、附近の商店に説いて回つたのであるが、その事柄には、いかにもと賛成する人達であつても、イザ應分の支出となると、容易に話がまとまらない。この有様を見て取つた幸吉は、これにはどうしても、輿論を喚起さねばならぬと考へ、もよりの空家を借受け、連夜演説會を開いて大いにその必要を絶叫したのである。しきりに演説をやつたので、中には「またあわ幸の堀を改修する演説か」と冷笑する者もあつたけれど、熱誠ほとばしるかれの辯舌は次第に人々の理會を集めて、堀を改修するは遂に決行せられ、かくて堀は以前にもまして多く利用せられ、一般の便益は大いに加わつた。

商賣としては、幸吉が特に海産物に着眼したことが、ようやく世間に認められてきた。當時の志摩郡長河田俊藏は、勸業郡長とあだ名されたほど産業に熱心な人であつたが、かれと計つて志摩國産品評會を開設し、幸吉はその審査員となつて盡力し、同時にこれによつて、水産に関する知識や原料の仕入・賣先等について得るところがあつた。

明治十四年十月に、舊鳥羽藩の士族久米楠造の長女うめと結婚した。うめは嚴肅な家庭の教育を

受け、鳥羽小學校の高等科を卒業したが、その學校の校長は御木本家の遠縁の人であつたので、父晋吉の依頼を受け、幸吉の配偶者として、うめを推してくれたのである。うめは時に十八歳、明敏で快活で、ことに堅忍不拔の點に至つては、男性も遠く及ばぬ氣性の持主であつた。そして夫婦仲もむつまじく、家業にもよく勤めたので、父母も非常に喜んでゐた。長男の結婚に安心と満足とを見た父晋吉は、翌年になつて、鳥羽における家業を全部新夫妻に任せ、自分は伊勢の山田に別居したが、まもなく背に、ようを發したので、鳥羽に歸つて療養に手を盡したけれども全治せず、翌十六年七月に五十四歳を以て亡くなつたのである。

父の不幸にあつて、さすがの幸吉も落膽やるせなく、暫くは仕事も手に著かぬ有様であつたが、さらに奮發して志摩の海産物に積極的の改良を加えて、その販路を擴張しようと思へ、色々計畫を回らした。まず志摩産の天草を精製して寒天を造ろうと思ひ、四日市の井島茂作、大阪の島藤兵衛等と謀つて、これが調査に従つたが、何分にも原料が貧弱で、盛大な發展を期し難いと判つたので、着手を見合せた。また乾アワビに改良を加えようと思ひ、片田村の大石半藏、志島村の小川小太郎等と共同で始めたが、これまた原料が乏しくて採算がとれなかつたので、中止した。寒天といふ、乾アワビといふ、中國向きの輸出品として需要の多いものであつたが、いかにせん資源が乏しくて、斷念せざるを得なかつたのである。しかし燃ゆるが如き幸吉の事業熱と勇猛心とは、こんな

ことで衰えるはずがなかつた。

かかる營利的の企圖ではなく、漁村のために自己の利害を顧みずして畫策した、義きよ的奮闘談がある。青年御本本の面目を躍如たらせているから掲げる。それは明治十八年のことである。當時なお鳥羽町に隣接せる村落であつた小濱や、町とは對岸の浦村等では、毎年冬季になるとボラの群が押寄せてきて、その豊漁に漁民は大いにうるおうのであつて、幾百を數える漁船が一夜の中に捕るボラが、何萬といふ數に達して巨利を博した。これは毎年の例であるが、この十八年の冬には、珍らしくもボラの大群が浦村の濱に押寄せて、一夜に八十萬匹の漁獲があつた。全くこれまでに無い大漁である。この中六十萬匹は伊勢・尾張・三河等の買回り船に賣拂つて、ヤツト始末がついたが、残り二十萬匹の處分に困つた。常客の買回り船も、拾値同様でなければ見込がないから、引取れないという。これは拾値を目當てにわざと待つてゐるのである。そうでなければ肥料にするより外はないとのこと。何分今日と違つて運送の方法が極めて不十分なため、濱邊にボラの山が築かれて二日三日たつても、さばきがつかない。冬とはいえ痛みも現れてこようという評判である。

床屋に斬髪に行つていた幸吉が、聴くともなしに聴いたのは、この評判である。

そりや詰まらぬ話だ。肥料にすれば一匹せいぜい五六毛だろう。何とか外に販路がないわけでもあるまい。一つ私がやつてみよう。

床屋の天井をながめながら、こう考えたかれは、斬髪が済むや否や、その足で郡役所へと駆けこんだ。そして河田郡長に會ひ、何等かの方法で處理してやる途はないかと申し出たが、たとい一村のためとはいえ、郡役所で積極的に乗り出すわけには行かないという。困つたと思ひながらフト氣付いたのは、先年上京した時に見た日本橋の魚河岸の光景である。あそこへ持つて行けば相當な値段で賣れるに相違ない。浦村の人達が自分に一任するなら、一つ獨力で、さばきをつけてやろうと考へて、直ぐ浦村へと出掛けた。かねて懇意の村老角田吉六に面會して、その旨を告げた。角田老人も大いに喜び、村の重だつた人達を集めて協議し、時の氏神とばかり幸吉に一任した。しかも拾値を待つてゐる買回り船もあることを見て取つた幸吉は、自分が汽船を借受けて取りにくるまでは、一匹も他に賣らないように固く約束して、直ぐに汽船借受けのため夜寒をおかし、二人引きの人力車を飛ばせて松坂に赴いた。松坂には勢海丸という汽船を持つた會社があり、その社長も船長も知人であつたから、汽船の賃貸を頼み、自分もこれに乗込んで浦村へ回航した。

しかし勢海丸は僅か百二十トンの小汽船に過ぎない。二十萬匹のボラを積込んで東京まで安全に運送するのは、ほとんど不可能のことであつた。最初松坂へ出向く時には、積めるだけ勢海丸に積み込み、残りは漁船に載せ、勢海丸に引かせて四日市まで運び、そこでさらに郵船會社の大きな汽船に積換えて、東京に送る積りであると、村人達にも言明しておいたが、しかし幸吉の心中には、別

に期するところがあつたのである。さて汽船が浦村に回航されて、ドンドンとボラが積込まれるのを見ると、それまで捨値を待つていた買回り船があわて出した。そして値段を付けて村民に交渉を始めた。が村方では、處分は御木本さんに一任して東京へ持つて行くのだから、一匹も賣れないという。これを見た幸吉は「そう強氣に出るのは、どうかと思う。私の東京に持つて行くのは、こちらで賣れないで肥料にするという分である。こちらで相當の値段で賣却できるものなら、それに越したことはあるまい。」と説いたから、村方も遂に承諾して、二十萬匹中、十二萬匹は一匹一錢八厘で賣拂い、残り八萬匹だけを勢海丸に積込んだ。これだけは將來の販路擴張のためにも、是非東京に送つてほしいという村方の希望もあり、勢海丸はかくて喜ぶ村民に見送られて、威勢よく浦村の濱を出帆した。

それは大豊漁があつてから四日目の午後二時頃で、幸吉の外に總代二三人も同船した。出帆のまぎわになつて空模様があやしくなつてきたが、おくれては魚が腐るおそれがあるので、おし切つて船出した。その昔江戸のふいご祭を當てこんでミカンを満載し、荒浪さか巻く遠州なだに、千石船をおし切つた紀の國屋文左衛門を想見しつつ、甲板にあぐらをかいて獨りほお笑むかれであつた。

しかし天は幸ばかりを興えなかつた。伊豆の下田邊まではもつていた空模様が、相模なだから暴風雨となり、勢海丸は北に進み得ないばかりか、てんぶくさえ氣づかわれるほどであつた。やむを

得ず下田にもどつて心配の一夜を明かし、翌日も難航を續けながらヤット横濱に着いたので、甲板にあつたボラ四千匹を一匹六錢で賣り、残りは五大力といふ運送船に積換えて、直ぐ東京へ回送の手配をなし、自分らは汽車で東京に先着して日本橋の魚問屋に交渉をした。ところが七日目の朝になつても五大力はやつてこない。逆風のため船足がはかどらなかつたのである。ヤットその晩に着いたは着いたが、手はずが狂つて市場のまに合わなかつたばかりか、魚の痛みがだいぶ目立つてきたため、安價で手ばなすことにした。諸費を支拂うと、たいした利益は得られなかつたが、肥料にするよりはよく、今様紀文の夢は破れたけれど、あれだけ多數のボラを處分してくれたのは、かれの盡力によるのだと、浦村の人達は長くかれを徳とし、これより毎年ボラ漁の季節には必ず村から幸吉にボラの贈物をしていた。

正月の飾エビとして伊勢エビを東京に送ることも、幸吉の始めたもので、かのボラの賣込から日本橋の魚市場と心安くなつたからである。これより先津市の水沼外衛（みづぬま げゑ）という人が炭酸水を製造して賣出したので、幸吉はこれと特約を結んで鳥羽方面における一手販賣を引受けたが、一向さげなかつたから失敗に歸した。この頃琉球産の泡盛酒を大阪に運んできて賣つている商人があつたが、幸吉は、これを東海方面にも賣りひろめようと考へ、琉球の古賀辰四郎と結んで名古屋に特約店をおき、販賣につとめてすこぶる利益を収めたのであるが、泡盛酒も内地の清酒同様に課税せられる

に至つて、高價について採算がとれなくなつたのでやめた。

かくの如く、海産物の賣買に携わりながら、その改良に心がけ、またこれが資本を得るため、色色の新しい仕事にも關係する等、相當多角的に活躍を續けたが、またその一生の仕事たる眞珠養殖の事業に落着くに至らなかつた。それまでには色々の面に仕事を求めて、足はさかんに遍歴を試み、手はしきりに摸索をなさざるを得なかつたのであつて、これこそ古來多くの事業家が適所を見出すまでに取つた道行きと、全くその軌を一にしている。かかる遍歴摸索の時代において、色々の仕事に移つて歩いている夫に、いつも激勵と慰安とを與えて、後顧の憂なからしめた妻うめの内助の功は、眞に大きなものであつた。

しかも、かれに取つてはまり役たる仕事は、琉球の泡盛酒でもなければ、津市の炭酸水でもなく、その絶えず携わつた志摩の海産物の内に、その對象が存してしたのであつて、眞珠の取引がそれであり、その眞珠の取引は海産物商の副業として、昔から行われていたのである。それは量においては極めて小さな領域を占めるに過ぎなかつたけれども、その値は割合に高いものであつた。幸吉は廣く海産物の賣買に従事しながら、特に眞珠の取引にもつとも深い關心をもち、しかもその關心は、年と共に業と共にいよいよ集中せられて、眞珠の鑑定及び評價等については、かれに肩を並べる者はなく、業界の信用、郷黨の寄頼は、舉つてかれ一人に歸するに至つたのである。

明治二十年七月に英照皇太后の御用命で、宮内書記官櫻井能監から、幸吉にあて眞珠の注文があつた。よつてかれは眞珠員を精選し、これを携えて上京して納入の手續をした。これ宮内省から眞珠買上の御命を拜した最初であつて、時に幸吉は三十歳、うめは二十四歳であつたが、この御用命は夫婦を非常に深く感激せしめ、これより一層奮勵、眞珠の研究に一家の全力を傾注するに至つた。それ以來かれは皇室の御用ときけば、餘事はさておき奉仕にいそしみ、決して變らなかつたのも、この感激に基づくのである。



#### 四 養殖眞珠發明の工夫

眞珠の産地は、わが國でも極めて狭い海域に限られているのであつて、志摩の英虞灣、肥前の大村灣、能登の七尾灣等がそれであるが、中にも志摩の海域は、その生産高の豊富と品質の優秀とを以て知られ、昔から伊勢眞珠の名でその聲價をほし、いまにしては、しかし明治維新以來、その高價なのに眼を着けた人々は競つてこれを取り、しかも保護増殖の途は一向講ぜられなかつたので、その産額は年々減少するばかりであつた。それでも明治十二三年頃には年額一萬圓は下らなかつたが、濫獲の風はますます甚だしく、同二十年頃には、年額僅に二三千圓に過ぎない有様となり、このままにしておけば恐らく數年を出でずして、この特産物は絶滅のうき目を見るであろう、何らかこれに對する回復保護の策を施さなければならぬと考えられた。他方眞珠の需要はどうかと、いと、世の進歩に伴い生活の向上に應じて、装身裝飾の品として眞珠の價値は、ようやく高まるうとし、全世界を通じてこの形勢が現れてきたから、わが國の海外貿易品として眞珠こそは、極めて有望なものとなるであらう。しかし元來眞珠は、數千個の眞珠貝の中から僅に一二個しか見出されないものである。將來ますます加わる需要に應ぜんには、どうしても増殖を計るより途がない。

どうかして多數の眞珠を收穫したいものだとの一念が、これより一瞬だに幸吉の念頭を去らないものとなり、あたかも持病の如くに、かれの心にこびり着いて、切つても切れないものとなつた。

明治二十一年六月全國水産品評會が東京橋本挽町の厚生館で開催せられた。幸吉は、かねてから改良に努力していたイリコ及び眞珠を出品して二等賞を勝ち得た。これ、かれが品評會博覽會等に出品して受賞した最初である。この品評會の際かれは、日本水産會幹事長柳猶悦に面會し、かねて抱いていた眞珠貝濫獲に對する防止の策を述べ、その生産地たる英虞灣の現場について實況を觀察せられんことを請うたところ、猶悦はかれの篤志に感動して即座にこれを快諾し、翌月志摩に來て英虞灣を巡視し、かつ大いに幸吉を激勵するところがあり、幸吉もまた知己を得たるを喜び、いよいよ眞珠貝の培養を試行せんとするの決意を固めた。しかしこれを行うには、この海灣において相當に廣い水域を要する。よつて沿岸各村を歴訪して、海面の借用方を交渉したのであるが、培養場として海面を貸すことは、漁業に支障をきたすといつて承知しない所が多かつたが、幸に神明村の如く、かれの希望を容れてくれた所もあつたので、かれは勇躍して直にその計畫の實施に着手した。實に明治二十一年九月十一日のことである。但しこの時にあつては、ただ眞珠貝即ちアコヤ貝を澤山培養することを目ざしたもので、後に考えたような養殖眞珠放養の考案は、まだ無かつたのである。

しかし眞珠は、アコヤ貝やアワビ貝やその他の貝の中にできるのであるが、それがイツタイ、どうしてできるのか。ただ偶然といつてしまえば、それまでであるが、偶然にも何等かの因由がなければならぬ。それが判らないものであろうか、どうであろうか。これが絶えず幸吉の脳裏にいきまきした深い疑問であつた。また貝の中に眞珠のできることは正に事實であるが、いやしくも、できるものである以上は、人間の力で、これを造れぬはずがなからう。何とかして、これを造りたいものであるという考が、さながら天啓の如くに、かれの胸の奥にひらめいた。しかも多年眞珠を取扱つた経験によると、アワビ貝に生ずる眞珠は、大きいけれど形がいがんでいて、光もにぶいし、アコヤ貝から出る眞珠は、小さいが形が整つていて、中には八方ころがしといつて、正圓なのがあり、色澤も美しいのが多い。してみると、眞珠の品質はその母貝の性質による。これは貝その物について、とくと實驗し調査しなければならない。これと同時に元來眞珠生成の理法は、動物學とか水産學とかにおいて、學理として研究せらるべき大切な問題であるが、世界の學問は、いかにこれを説明しているか、その方面の學者に聴くのが早道であるとの考もまた、次第に高まつてきた。

おりしも明治二十三年四月から、第三回内國勸業博覽會が東京の上野公園内で開かれた。幸吉は卒先これに協賛し、ことに眞珠貝の培養増殖に腐心している時であつたから、まず眞珠・眞珠貝・眞珠入り物品等眞珠に関するものを主とし、これにアワビ・イリコ等をも若干加えて出品し、また

別に生きた眞珠貝をば博覽會附設の水族館に放養し、併せて觀覽に供したのである。當時水産動物の面におけるわが國學界の權威者は、東京大學教授理學博士箕作佳吉であつたが、こんどの博覽會でも、水産に関する面の審査官は、同博士と理學士岸上謙吉の兩氏であつた。箕作博士は、幸吉の出品した眞珠及び眞珠貝について色々吟味を加え、かれの質問に對して次の如く説明した。

眞珠は、貝の中に入つた異物が吐出されずして貝中に留まり、これを核心として貝から分泌する眞珠質がそれに卷着き卷着き幾年もかかつて、できるものである。現にこれを分割してみると、眞珠質でない微粒がある。

眞珠の成立に關するこうした説明は、なおも幸吉の研究心を刺激し、その年の七月に博覽會の閉會式が終るや、出品の跡始末は他の人に委託し、自分は直ぐ神奈川県三崎町にある東京大學附屬臨海實驗所に赴き、おりからそこに出張中の箕作博士について、専ら眞珠の研究に従事したのである。博士はかれが持つて行つた大小種々の眞珠をば、自ら割つたり砕いたりして、或は顯微鏡下に照らし、或は化學的實驗を施し、そして眞珠の構造や成分について説示せられた。幸吉はここに滞留すること一週間、その間にかねての意見たる、眞珠は自然にも生成せられるものである以上は、人爲でできぬはずはないと思うが、いかにと質問し、かつ諸外國で何等かの形で、これを試みた人はないかと尋ねた。すると博士は

理屈からいえば、もし人が貝を殺さぬように心掛けながら、貝の内部に微粒を入れ、幾年も幾年も海中に放置しておき、幸にそれが吐出されずに済んだら、眞珠ができるはずである。がそれは理屈であつて実際にはまだできない。今より約九十年前にドイツのヘスリングという學者が、河水に貝を活けてこれを試みたけれども、ついに不成功に終つたのであるし、英・佛・米等諸國では、まだ試みた人さえもない。かくて眞珠は天然にできるもの、人爲ではできないとなつてゐる。しかし折角の思い着きだから、やつてみるのもよからう。

と言はれたが、どういふ風にやるべきかについては、博士自身にも、考案とはなかつたのである。しかし幸吉は

たれもやつたことのない仕事こそ、やりがいのある仕事だ。世界の何人も成功しなかつたような事業を成し遂げるのが、日本の新事業家のはえある使命じやあるまいか。もし自分の研究によつて、眞珠の人工養殖の方法が見出されるなら、それこそ正に世界的發明である。どんな困難が起ろうと構わない。一身をとめてやつてみよう。必ずやり遂げてみせる。

との考が胸の奥から湧き上つてきて、何物をも溶かさずにおかない情熱となつて、ほとばしつた。そこでかれは臨海實驗所を辭して直ぐ歸國の途につき、そして鳥羽の家に旅装を解くや否や、先ずその決意を妻うめに打明けた。もちろん他には口外しなかつたのである。うめは外出勝ちな夫の留

守を守り、加弱い身を以て家政一切を引受け、その心勞はなみ大抵のことではなかつた。にも拘らず、今また夫から、海のものとも山のものとも目あてのつかぬ仕事に着手しようとの相談である。しかも、うめは委細を聽いて夫の固い決心を知り、それを止めないばかりか、次の如き言葉を以て夫を勵ました。

これまで、たれも成功しなかつたような仕事なら、困難なのは必定でしょうが、是非ともやつてみようという、それほど固い御決心なら、やれなくなるところまで、やつてみようじやありませんか。世のため人のためになる事なら、世界の人に先がけて、やつてみるのも本懐です。成功するかしないかは運にもよります。運は天に任せておいて、思う存分やつて御覽なさい。家事は元より内助者の務です。一切引受けました。どうしても、やり通そうではありませんか。

これを聽いている中に、思はず涙をさえ催した幸吉は

これまで十年も苦勞ばかり掛けたその上、今後数年どんな困苦に出遭うかも知れないのに、よ

くぞ言つてくれた。うれしい、有難い。私も決死の覺悟で突進するぞ。

と今更ながら盡きぬ妻への感謝の念を新にして、大きく胸を一つ拍いたのである。いよいよ決心を定めた上は一日たりとも、ぐずぐずしておるべきでない。その翌日神明浦に行つて養殖場の經營に着手した。神明村には前に一言した如く、一部海面租借の約束が済んでいたか

ら、養殖の場所は定まつているが、養殖の方法に至つては、全く試行錯誤法の外には一步も出ない。元來眞珠は、實に數千個の眞珠貝の中に僅か一二粒を見出し得るに過ぎないのだから、もし數十個の貝の中から一二粒を見出し得るようになったとしても、それは眞珠の産額を百倍に高めたわけである。しかし、どうしたら眞珠貝の中に必ず眞珠を産ますことが、できるかの實際の事由がまだ確かでない。箕作博士等は貝の中に入つた異物が、吐出されずして長く貝内に留まり、それに眞珠質が卷着けば、眞珠になると説明するけれど、それは眞珠を砕いて顯微鏡下に調べた成分から、おして考えた一般の理論に外ならないのであつて、どんな異物が貝内に入るのか。どうした場合に、それが吐出されずに貝内に留まるのか。またどんな工合に、眞珠質が分泌されて卷着くのか。そうした事由の何れもが、まだ明かにはなつていない。かえつて學者の間には、眞珠のできるのは、外から入りくる異物によるのでなく、貝の中に生ずる病的現象で、いわば、ガンのようなものが生じ、それを包むために眞珠質が分泌されるのだとの説さえある。この説からすれば、先ず眞珠質の分泌を盛んにする刺激を與える工夫が、最も大切なことになつてくる。こうした諸るの事由をつきとめるためには、あらゆる試みがなされねばならず、それには、もちろん澤山の眞珠貝が要るのであるから、とにかく多くの眞珠貝を培養することが、どのみち不可欠の事柄であつた。

幸吉は神明村の村長三橋覺藏と計り、大字かして小字千鳥島と、大字柳の崎小字外柳中瀬と二個

所の海面を選定し、人を雇つて數百間もある太いシユロナワを造らせ、これに一定の間隔をおいて石・瓦・クイ等を結びつけ、そして海中に沈めておき、眞珠貝の稚貝をこれに附着させる工夫をしたのである。その實施せられた設計圖は今も御木本家に残つてゐる。つきに個々の眞珠貝について、その貝がらを痛めないように注意しつつ、貝を開いて異物をその中にさし入れることにした。異物としては、最初は南京玉や萬古燒の原料たる陶土を用いる等種々のことを試みたが、やがては貝がらを粒狀に刻んで使うことにした。とにかく、こうした固形物をさし入れた後、再び海中に沈めておくのである。かかる處置をしている時にフト思い起したのは、幼少の頃西村忠太夫老から聽かされた植木屋のオモトの話であつた。そして

不正な植木屋は一時の利益に眼がくらんで、竹の薄紙で赤い實を包んで、白と見せかけて人を欺いたが、自分はごまかしは大きらい。天に代つて核心たる微粒物を貝に入れてやるだけで、あとは眞珠貝をして眞珠質を卷着けさせる。植木屋は竹の薄紙で赤を白にばかしたのだが、私は眞珠質で眞珠を造らせる。そしてそれができるまで待とう。決して不義の利益を得ようとはしな

う。

との誓を心の底に打立てた。この誓を立てると精神が自然と引立つてきて、何だか勇氣百倍の感じである。よつて培養の海面をさらに辨天島附近にまで押擴め、また別に、英虞灣の沿岸諸村で買集めた

眞珠貝をば、自ら擔いで數里の山路を鳥羽まで運び、ここでも實驗を開始した。ただし、ここでは地形と周圍の關係や海の深さ等の點で、貝を海底に放置するわけに行かないので、これを竹かごに入れて、今の眞珠が島附近の海中に沈めておくことにした。

このように實驗は神明と鳥羽と、場所を變えて二個所で行つたのである。實驗といへば、一定の裝置に一定の所作を施しておいて、そして毎日もしくは一兩日の間隔をおいて觀察を加えて、その變化を吟味するものと考えられ易いけれど、海の底で貝の中に起る變化に對する實驗は、決してそう簡單には行かない。それは、少くとも數個月を経て後、沈めておいた貝を引上げ、それを開いて調べてみるのであるが、その度ごとに多くの貝を殺さねばならぬのである。それはよいとしても、さて調べてみると、大抵はさし入れておいた異物は吐出されてしまつて、跡をも留めない。まれに留まつている場合でも、それは依然たる異物で、何等の變化も起つていない。そこでさらに工夫を凝らして仕方を變え、これを再び三たびして、うむことを知らなかつたが、かかる間に明治二十三年も暮れて二十四年となり、その間、くる日もくる日も、こうした實驗操作に費されたが、良好な結果は神明の方にも鳥羽の方にも、望まらるべくも見えなかつた。

明治二十五年七月に東大教授理學博士佐々木忠次郎が英虞灣に來り、幸吉の養殖せる眞珠貝について種々の検査を試みたが、それは眞珠貝の生育と海水の深淺、土質の硬軟、潮流の如何、水溫の

高低等との關係について、示唆するところ多く、養殖上少からざる參考を得た。かくて眞珠貝培養の上には若干進歩を見ることができたが、眞珠を産ませる方の研究に關しては、何等成績の見るべきものがなかつた。しかも幸吉は、なお考慮を積み、また學說に照らして、幾度か方法を變えて實驗を重ねたけれども、一向好轉の徴候は表れない。

ア、やはり望みが無いのではあるまいか。

さすが耐忍不屈のかれにも、こうした不安が兆し出した。がすぐまた次の瞬間には、自分で自分の危惧の念をもみ消すのであつた。

できるまで待とうと心に固く誓つた自分ではないか。一敗二敗はおろか、三敗四敗も覺悟の前である。七轉八起という言葉もある。なんのこれしきの事で、くたばる私じやないはずだ。

何物をも打碎く鐵石心、それは失敗の度ごとに鍛えられて根強さを増して行つた。しかも天はなおもかれに試練を加えた。それは試練と名づけられもしようが、しかし餘りにも無慈悲な試練であつた。それは何かといへば、この時に始まつて以後しばしば養殖場を見舞つた赤潮の慘害これである。赤潮とは、水溫や雨量やその他種々の關係により海水に微生物が生じ、非常な勢を以て繁殖し、これがために、そこら一面に茶褐色または赤色を呈するから、この名があるのであつて、その猛烈な所ほどその色は濃い。これが發生すると魚介類は著しき損害を受け、眞珠貝の如きは死んで

しまうのである。ことに赤潮は陸地に深く入込んだ灣内に多く發生するもので、風向によつてそれが外洋に吹流されてしまわない限り、その害を免れることができない。ところで眞珠貝の養殖は深く入込んだ灣内でなければならず、しかも眞珠貝は赤潮には最も弱いものであるから、この赤潮こそ眞珠貝にとつて單なる苦が手というだけでなく、實に宿命的に兩立し難き敵なのである。

この赤潮が明治二十六年十一月の半ば頃、突如として辨天島附近に發生し、そのため神明浦と辨天島附近とに培養中の眞珠貝はほとんど全滅してしまつた。あしかけ四年間全精神と全財産とを注ぎ盡した勞苦も仕事も、一日にして海底のもくすどと化し去つたのである。これこそ文字通り致命的の打撃である。青年時代以來ウドン屋の傍ら海産物の改良に泡盛酒の仲買にと、種々の企業によつて漸次殖やしてきた財産は、全部ここにつき込んだのみならず、他の萬事はうちやりの姿で、精力のあらん限り、資金の續かん限りを盡していた幸吉が、今この惨事に遇つたのだから、失望と落膽とが正に言語に絶したのは當然である。氣力を奮い起して立直ろうとしても、先立つものは資金であるが、これまでありとあらゆる手段を講じて辛うじて集め得た後の今さら、どこに金策があるう。養殖事業の前途にまだ一條の光明だに認められない今日、その上今次の災で全くの絶望状態に墮ち込んだかれに、親族や朋友でさへ相談に耳を貸そうとはしない。イナ親族はおおむね口を極めてこの事業の放棄を忠告するのであり、中には、君は好きなことに突進するのだから、倒れても本

望だろが、妻や子供の前途をどうする積りかと詰め寄る者もあり、そう言われると、かれも斷腸の思いに耐えなかつたのである。

幸吉自身にしてみれば、元來が私利私慾のために企てた仕事でもなければ、單なる道樂でも決してない。及ばずながら産業を進め國益を増そうの一念から、前人未到の領域に突進したのであつて、困難辛苦は元より覺悟の前である。況んや世界の人に先がけて、これまでできなかつた事を成し遂げようとするのであるから、成か然らずんば死というのが、そのつき詰めた心境であつて、心身さえ丈夫である限り、少しも怖れるところもなければ悲しむところもない。總てを失つて裸一貫になつてみると、存外に超人的の血氣がほとばしりでてくるのを覺えた。右に轉んでも左に轉んでも、この身一つが本であり力であつて、たとい成功が覺束なくとも、産業の進展に一步の寄與をなすならば、倒れても遺憾は無いと思つと、性來の負けじ魂は、いよいよその眞面目を發揮してきた。それは焼野原の若草が再びもえ出て、前にも増して威勢よく繁茂するのと同じである。果てしなき野原のまん中に獨り突立つた自分とでも形容すべき、今のかれの心境において、そのどん底から盛り上がった生き生きした活力、言うに言われぬ強さと粘りとを持つた勢力は、ただ日本の産業に新たな一翼を加えようという念力であつた。天然以外には絶えて生じない美しい眞珠をば人工で造り、それを全世界の需要に供して國の光を海外に輝きたいという、その一念のみであつたのであ

る。

この搖ぎなき一念に驅られて再起の計畫に雄々しく立上がつたかれも、鳥羽ではその計畫を行うのに手も足も出なかつた。というのは同情を寄せる者がほとんど無く、かえつて「御木木夫婦は眞珠狂だ。」といふ冷笑が到るところにかれを待つていたからである。かくてかれは鳥羽の友人角利助と謀つて、コンブその他の海産物の改良をなすべく北海道に赴き、或は四日市の親友川村又助の相談に應じて萬古燒の進展を計り、或は同じく四日市の友人行方庄助（まつかた）を奨めて、シグレハマグリの改良に努めしめ、さらに養老・四日市その他における鐵道事業にも關係するなど、席の暖まる暇さえないほどであつた。

奮闘力の塊りともいうべき幸吉にも、思案に餘つて腕を組む時であつたが、そうした時に眞に力強い支援を與へたものは、妻うめの男まさりの激勵であつた。うめは夫の性格と力量とをば信じていた上に、その企てている仕事のいかに困難であるかをもよく理會して居り、目下の東奔西走も一に復興の資金を得るための盡力であることをば知つて、満腔の至誠を獻けて夫に協力したのである。さればこそ夫の留守を引受けて、か弱き女性の身一つに老母につかえ、多勢の子女を養育し、男女五人の雇人をば手足の如くに使つて、ウドン屋と穀屋と兩業の、その原料の仕入れに、その製品の賣さばきに、全力をこめて家計を立て、ことに幸吉がなした負債の整理から、債權者との交渉か

ら、進んではさらに要する事業資金の調達に至るまで、およそ人間の力の限りを盡したのである。

この實狀をしのぶに足る物語がある。それは幸吉が北海道に旅行して、十二月に入つた時のことである。一日その旅館に、うめから手紙がきたのであるが、それを讀んで行くと、母及び子供達の無事が述べてあつた末に、歳の暮には歸宅しないでほしい、そうでないと借金の斷りが、はかどらぬからと書いてあつたのには、さすがのかれも熱涙のこぼれるのを禁じ得なかつたといわれる。世に内助の功という言葉があるが、うめにはこの形容では當らない。うめの場合は全く内外の両面にわたる積極非凡の焦心勞思で、それがあつたからである。しかし天はこうした非凡の努力を無爲に終らせはしない。眞珠狂とまで笑われた御木木夫婦の焦心勞思は、やがてスバラシク報いられたのである。

## 五 半圓眞珠の發明と愛妻の死

愛は死よりも強いというが、妻の愛を後盾にして再び奮い起つた男の意氣は、裸一貫とはいえずに天を衝くの勢があつた。かれは

御木本は大山師だ。

という世間一部の聲を耳にしないでなかつたが

大山師じゃない、大海師だ。

と幸吉の負けじ魂が心の底で叫んだ。そして

今に見ている。

と力強く附け加えた。神明浦の貝は全滅してしまつても鳥羽の貝は残っている。これが最後の決戦場であり、文字通り背水の陣である。

ナーニ行ける所まで行き盡すばかりだ。最後までガン張るんだ。途中で後退なんて、この自分にはできるものか。

こんな考に浸りつつ幸吉は、鳥羽にいる間は、一筋の望をかけた眞珠が島の竹かごを見て巡るの

が、その日課であつた。春まだ浅き三月の頃、さし昇る朝日を身一杯に浴びながら、引上げたかごの中から取出した貝を、こくめいに一つ一つ調べて行く時には、海から吹付ける風の寒さも感じない。多年の苦勞の凝つた物よと思えば、日頃心身の疲れも忘れることができる。ダガ一通り調べ上げた後、永い間の期待の裏切られているのが判ると、その時の失望もまた一入である。そしてくる日も、くる日も、この失望の連続であつてみれば、ここもまた神明浦と同じ運命をたどるのではないかとさえ思われた。時にうめと二人で出掛けることもあり、また子供等を連れて行くこともあつた。夏の頃には、かれらに海水浴をさせたのである。

明治二十六年七月十一日のことである。ここ數日來の晴天続きで、照りつける光のいかにも熱い日であつたが、たもともちぎれるかと思つてばかり強く吹きつける海風を身に受けながら、眞珠が島の浪打際にしゃがんで、貝の吟味に餘念のない中年男女の二人があつた。いうまでもなく御木本夫婦で、今日は久しく上げなかつた部分の幾かごかを調べるので、何となく希望を新にして検査に取掛つたのであるが、その内にうめが開いた貝の中に、日の光を受けてピカリ光つたものがある。これぞ正さしく待ちに待つた半圓の眞珠ではないか。しかもそう光つたものが二つと、その外にまだ十分に光らないが鈍色になつたものが三つと、合せて五つの半圓眞珠が多く、貝の中から見出されたのである。



オ、できたぞ。

こう叫んで互に見合せた二人の顔は、歡喜と驚異とで涙にぬれている。天にも昇る心地とでもいうのか、どこをどう渡つたのか歩いたのかさえ覚えず、家に飛んで歸つて先ずその眞珠のできている貝を神だなに供えて、感謝の誠意を獻けて今後の加護を祈り、それより幸吉はその眞珠の検査に取掛かり、うめは心祝の赤飯をたくべく支度にかかった。

この時半圓眞珠のできていた貝は五個に過ぎず、そのできばえも色々であつたが、しかしこの手法を以てすれば人工的に眞珠が得られる見込が、ここに始めて立つたのである。いわば暗黒の中に一道の光明がさし初めた瞬間なのである。これに力を得た幸吉は、この養殖の事業を大規模に實行すべく、猛然として立上がつた。うめが、その相談相手であつたのは言うまでもない。しかも大規模にこれを行わんには適當な場所を要するが、その場所を得ることが並大抵の勞苦ではなかつた。まず眞珠貝は至つて弱い貝で、ことに寒氣に遭えば死に易いから、冬期最も暖い海を選ばなければならぬ。それに潮流の緩急、海底の深淺、土質の硬軟、飼料の有無、採取の難易等をも十分に考慮に入れる必要がある。前に養殖を開始して赤潮のために失敗した辦天島邊では、場所が小さくてこの要請を充たすに足らない。そこで自ら英虞灣内各所の浦々島々を視巡つて調査を加えた結果、ついに田德島を中心とする附近一帯の海域を最適地と認めるに至つたのである。田德島は、神明村

の本部から海上一里餘に位する周回十八丁の無人島であつたが、ここを根據地として附近一帯の海面を借用して養殖場となすことに定め、數萬個の眞珠貝を英虞灣・的矢灣等の沿岸諸地から買い集め、これに手術を施して放養した。そして幸吉は絶えずこと鳥羽との間を往來して、これを管理したのであつて、實に明治二十六年十月のことである。この島は後に曾禰農商務大臣が來遊した節、御木本の事業が附近民衆に徳を及ぼすこと多きを以て、多德島と書くべしとなし、以後そう書くことになつたのである。

しかしながら養殖眞珠は、最初加工放養してから採取するまでに、滿四個年の歳月を経なければならぬ。その間常に眞珠貝の發育と海中四圍の情況とに深甚の注意を拂いつつ、待つていなければならぬのである。もちろん幸吉は久しき以前から、絶えず天然眞珠の取引に従事し、これを獲得するために澤山の眞珠貝を培養することを怠らなかつたのであり、これと同時に、眞珠以外諸他の海産物の改善増殖にも力を加え、他方これら海産物を内外國の博覽會に出品することにも努めた。明治二十六年四月から米國シカゴ市で開催せられたコロンブス記念世界博覽會には、かれは眞珠貝の子貝から母貝になるまでの發育順序を示した標本アルコホールづけの瓶十七個と、天然眞珠若干とを出品したのである。

半圓眞珠の發明以後、英虞灣頭多德島を中心とする養殖事業の經營は順調に進行し、これならば

一生身命を傾注して従事するに足るとの見込も十分に立つたが、その安定を期するには、專賣特許権を得ておく必要があるから、二十七年十一月農商務省へ養殖眞珠即ち半圓眞珠の專賣特許を出願したのである。ところが同省では、特許法の實施以來まだ生物に特許を與えた例がないから、單に理由書だけでは足りない、他に原品をも差出してもらいたいとのことであつた。よつて幸吉は加工した眞珠貝を提出して、その成立を説明したので、特許局も理會したが、調査に時日を要し、出願後十五個月を経過した明治二十九年一月二十七日に至つて、初めて登録せられて專賣特許を得たのである。これぞ、かれの事業が獨創の名に値するものとして、初めて公に認證せられたものである。ここにおいてかれは、いよいよ己が一生の事業として、養殖眞珠の産出に全力を込める方針を樹立し、翌二月に傳來の家業たりし、うどん屋を始めとし、海産物穀類等の販賣をも一切やめ、多徳島を以て養殖事業經營の本部と定め、親族及びその家族をここに移住させ、一族を以てそれぞれの方面を擔當させることにした。

かかる際に、全く思いがけなき大不幸が幸吉及びその家族を見舞つた。それは愛妻うめの病死である。結婚以來家庭は平和そのもので、風波一つ起したことがなく、ことに子供の養育教育には極めて熱心で、細かいところまでよく氣をくばり、よい妻だ、よい母だとの評判は大里町から全鳥羽町にひびき渡つていたうめが、僅か四五日の病氣で亡くなつたのであるから、それこそ一家こと

とく打のめされたような大不幸であつた。その病氣も最初は寢なければならぬほどの容體でもなく生命に關するなどは夢にも思われず、ただ田舎ではよく判らないので診察を受けるために、京都の府立病院へ行つたのである。そして診察を受けたところ、卵巢水しゆであるから、早く腹部を切開して治療した方がよからうとの診断であつた。當時幸吉は養老鐵道の用事で岐阜縣の大垣に滞在していたが、明治二十九年の四月二十日のことである。思いがけなき京都から電報が入つて

二二ヒハラキルクメタツゴツクナラキテ

というのである。愛妻の大手術である。直ぐ京都に駆けつけてみると、日頃の様子と、ほとんど違ふところが無いのでまず安心し、醫局について聴くと、手術をすれば大丈夫だろうとのことであつたから、かれはもちろん醫師も、生命に關するとは思ひも及ばなかつた。ところが不幸なるかな、手術後腹膜炎を起して経過がわるい。電報によつて鳥羽から近親者も集まつたが、経過は悪化するばかりで、どうにも仕方がない。危篤に迫つた時、幸吉がうめの手を固く握ると、うめは

眞珠もできたし、子供も五人。思い残すことはありません。注射には及びません。念佛を唱えて極樂浄土へ参ります。

といつて立派に合掌して目を閉じた。幸吉は直ぐ口をうめの耳に着け

後の事は引受けた、心配するな。今後は眞珠貝を連れ合と思つて、必ず眞圓眞珠を生ませて見

せるぞ。

と叫んだ。その聲が通つたと見え、うめは満足そうに微笑を浮べて最後の息を引取つた。時に四月二十四日の朝であつた。その臨終の立派であつたことは、今も近親者の思出話の一つで、かれらには決して忘れられない記念となつてゐる。立會つた病院長猪子才之助も「注射を止めて自ら合掌し念佛を唱えて靜に瞑目した患者は、この病院でも初めてのことだ。」と語つた。思うに半圓眞珠の成功は、夫人の努力がその功の半ばを占めてゐる。しかもその養殖の豊かな收穫の秋をも待たず、三十三歳の春を以て櫻花と共に散つて行つたのである。由來日本の女性は、夫のため子のために、甘んじて己が心身を消耗し盡し、そして満足して死んで行くのが、その高貴性であつて、うめの如きは正にその典型である。がしかしこれは、將來は變えられなければならぬであらう。

## 六 多徳島御木本眞珠養殖場

うめを失つてから後の幸吉は、うめの素志たる子供の教養に努め、また多徳島における養殖場の經營に力を盡した。それが、うめの献身に報いる何よりの手向けだと信じたからである。親戚や友人は、子供は多いし事業は忙しいし、後妻を迎えねば、とうていこの難局を切抜けて行けまいと心配して、しきりに再婚を勧めてくれたけれど、亡き妻の並々ならぬ勞苦をしのぶと、後妻を迎える氣にはなれず、どうしても妻の臨終に誓つた言葉の通り、今後の生がいを事業に活きようとの覺悟を固守して變らなかつた。そして鳥羽では、大里町を引上げて錦町に士族屋敷を買求め、そこに老母もと五人の子供と共に住み、この鳥羽の住宅と多徳の養殖場とを掛持ちし、鳥羽では子供の教育、多徳では眞珠の養殖と、二重の活動に全力を盡した。

鳥羽にある時は、毎朝早く子供等を起し、皆を連れてまず日和山に上る。そして天氣のよい日はその頂上で海からさし昇る朝日を拜し、「日の出の光を兩手に受けて吸え」と自ら手本を示して一種の迎日深呼吸をさせる。それから、ふもとにある氏神賀多神社に參つて歸宅するのが毎朝の日課であつた。夏は五人の子供をば、眞珠が島或はえご松の濱へ連れて行つて海水浴をさせ、冬でも一の

瀧という所えつらら取りに連れて行つて、耐寒散歩をさせるなど、ひたすら身體の鍛錬に努めた。そして夜分には教訓になる話をして聴かせて、かれらの修養に役立たせたのであつて、これは昔から賢母のとつた家庭教育の方法であるが、うめ死後の幸吉は、たしかにうめの仕事をも自分で擔當したのである。

事實かれは、うめの精神に導かれて二人前の仕事にまい進していた。やむを得ずして旅に出る時には、必ずうめのイハイに對して、留守中における子供の加護を頼み、歸つてくると、また直ぐに佛壇の前に端坐して、旅中の経過を逐一報告する。時には、うめのイハイを兩手に握りしめて語るのであつて、それは、あたかも生ける人に物言う如くであり、感極まつてイハイをなめるに至ることもしばしばであり、そのため遂にイハイの漆がはけてしまつたのであり、そのイハイは今も現に佛壇に祭られてある。日曜日や夏冬の休暇等には、子供を連れて多徳に行つたが、多徳へは陸路六里途中に五知のとうげがあつて、子供の足には相當の難行であつたが、子供らにはそれぞれワラジまたはゾウリをはかせ、自ら幼い者の手を引いて大抵徒歩で行きまし、雨天の日だけは半路を川舟または人力車によらせた。

この頃の幸吉は、寝ても覺めても、ただもう早く養殖眞珠を賣出して一かどの紳商となり、五人の子供を立派にしてやろうとの一念に燃えていた。鳥羽多徳間六里の路は、子供の足には一日仕事で途中磯部の川梅という支度所が晝食の場所であつた。そこに小丸辨當というのがあつて上下の二等に分れ、下等の方には、焼豆腐・ゴボウ・コンニャク等の菜がついて値が六錢、上等の方には、それにカマボコ・ハンペンの一片が加わつて八錢であつた。養殖場開始の頃は、將來見込のほども判らぬから、晝食は必ず下等の小丸辨當であつたが、一三年をへて經營も進み、前途も大丈夫となつてからは、上等の辨當を食べさせた。久しく待望していた上等八錢の小丸辨當が、あてがわれた時のうれしさは今も忘れられないとは、子供らの思出話である。

多徳における幸吉の生活も、また全く汗と涙にじむ奮闘であつた。最初はその設備も三軒の家屋に過ぎないし、海にも毎年四月に、僅か五萬の眞珠貝を放養するだけであつた。それに元來無人島であつたのも恐らくそのためであろう、淡水に乏しく飲料水を得るに困難であつた。低い處では井戸を掘つても、出てくるものは鹽水ばかり、やむを得ず、小高い山の中央部まで三面に切込み、そこに井戸を掘つて辛うじて飲料水を得ることができた。またこの島には樹木が少いので、シユロとクスノキとを五百本ずつ、他の地方から持つてきて植え込んだ。こうした施設にも資金が要るばかりだが、養殖した眞珠貝が物になるのは四年の後である。しかも年々新しい貝を放養しなければ後が續かない。その眞珠貝の買集めにも先立つものは金である。こういうわけで、この四個年こそは眞に奮闘苦闘以外の何物でもなかつた。けれども數年前の試験時代とは違つて、輝かしい成果を

四年の後には期待できる、それまでのしのぎであるから、石にかじり付いてもガン張らなければならぬとの決心が、絶えずかれの血管に脈打つていて、日常の生活を、まことに勇敢なものたらしめた。

この頃には、世にも珍らしい幸吉の事業が漸く社會に認められかけていたから、近親者の間からも「とにかく見込のある仕事だから他に合力者を求めたら。」との忠告もあつたけれども、ここで他人の合力を仰いで、獨力必達を誓つた亡妻に合わす顔もないとして、少しもそうした助言に取合わなかつたのである。他方にはまた前代未聞といふべきかれの事業に對して衷心から賛意を表し、ことに困苦と戦い、一再ならず失敗を重ねても屈せず、奮闘している幸吉の有様を傳聞して深く傾倒し、何とかして大成させたいとの好意から、相謀つてこれを援助しようとする有志の人士も現れた。岐阜縣選出の多額納税議員早川周造は秋田縣選出の同議員最上廣胖と謀り、かかる事業にこそ政府は大いに補助をなすべきであるとし、同意の人々を集めて農商務大臣に陳情し、相當の補助金を與えるよう盡力しよう、もしできなければ自分等同志六七名が毎年三千圓ずつ五個年間補助しようではないかなど、よりよりに相談していた。幸吉はこれを知り、兩氏の好意には深く感謝したが、自立自營の精神は少しも揺るがず、厚く謝意を表しながら「奮闘は私の面目だから。」と述べて、その申出を辞退した。

多徳島は前にも言つた通り、元來無人島であつたから、御木本眞珠養殖場の經營は、全く最初からの移住開墾なのである。幸吉が非常の決心を以て一族を率いてここに渡り住み、着々としてその經營に従事した所以であつて、亡妻うめの實弟久米楠太郎夫婦、幸吉の實弟御木本松助夫婦、同森非常藏夫婦等の同胞縁者を始め、桑原乙吉・須藤卯吉等あわ幸時代から御木本家に出入していた人が、これに加わつて中堅を組織したのである。いずれも働き盛りの青壯年男女で、幸吉の新事業と生死を共にしようと誓ひ合つた面々であり、なかなしく最年長者たる久米楠太郎が、幸吉の命を受けて監督の任に當つた。なお大工・左官等を含んだ青年場員五六名を加えて、總勢僅に二十名が全島の住民であり、しかも一島を擧つて、一意將來の發展を希う精進勤勞の理想的共同生活團體であつたのである。この外に、島外沿岸の村落から通勤する海女が二十餘名あつた。海女とは潜水によつて魚介をとる女子で、志摩海村の名物として、素ぼくな生活の古い歴史を、その背後に負つてゐるものである。

明治三十一年の二月に第一回の採取を行つた。即ち同二十八年の四月に初めてこの島の養殖場に加工放養した眞珠貝が、取揚げられたのであるが、果せるかな期待が裏切られなかつた。前途が輝かしくなつたような氣がしたのは幸吉一人ではなく、歡呼の聲が全場員の胸から湧き上がったのも道理である。よつて收穫した中から、見るに足るべき半圓眞珠三個を選び、農相曾禰荒助を経て明

治天皇に献上した。ついで明治三十三年四月に第二回の採取を行つたところ、その成績は第一回に比べてなお一段の進歩を示したので、その中の最も見事なものせば、樞密顧問官末松謙澄の手を経て皇后及び皇太子に献上した。

かくの如く一意専心眞珠養殖の完成を目ざして鋭進している時、その行く手を阻む何物もなかつた。資金の不足も世人の誤解も、幸吉にあつては何等意に介するに足らなかつたが、ただ一つ恐ろしいものがあつた。それは他ではなく實に宿敵赤潮の來襲である。思えば明治二十五年十一月にはこの赤潮のために全財産總精力を傾けて實驗していた眞珠貝をば、一舉に全滅に歸せしめたのであつて、世にこれほど苦がい體驗はない。世間では、一瞬にして眞珠貝を全滅させる赤潮のあるのを知りながら、養殖事業を敢行している御木本こそ、向う見ずの冒険家だと非難する者もあつた。事實幸吉もまた赤潮を怖れないのではない。イナかれほど赤潮の怖るべきを知り盡している者は他に無かるう。さればこそ、これに對する處置は決して怠らなかつたのであるが、いかんせん、これは豫防のできない事象であつて、残念ながら、その來るべきものが遂に來たのである。それは明治三十三年九月二十三日のことで、多徳島附近一帯は、むざんにも猛烈な赤潮の襲うところとなつた。當時幸吉は宇治山田の旅館にいたので、この報をきくや急ぎ多徳島に向つた。着いてみると赤潮は養殖場に押寄せて、見渡す限り一面に血の海で、場員のろうばい一方でない。幸吉は握り固めたこ

ぶしで一つ胸を打つや「かごを出せ。」と叫んだ。それは豫ねてから眞珠貝五六十個ずつを入れ得る竹かごで、およそ一千個ほど造つて倉庫に藏めてあつた、それを取らせたのである。同時に一方には、直に農商務省水産局に打電して救援を求め、他方には英虞灣内の海女三百人を集めた。これも豫ねてから、イザという場合には一片の合圖で、どこからでも養殖場にこぎつけてくるよう約束があつたのである。海女が到着するや否や直ぐ海中に飛込んで、放養してある眞珠貝をかき集め、かの竹かごに盛らせたが、海は三四尋、海女は潜水の専門家、みるみるどの竹かごも貝で一杯になる。それを舟で運んで十尋内外の深海に移した。というのは、赤潮の流層は大抵二三尋のもので、十尋以上の深底には届かないことを、幸吉は知つていたからである。最初の日には當年採取するはずになつていた貝を揚げ、翌日は次年採取の分、翌々日は次々年の分と、引續き全員大ワラワになつて、さながら戦場の如き騒ぎの中に移植に努めたが、こうした指揮は皆幸吉自らが陣頭に立つてこれをなすのである。天は自ら助ける者を助けるという格言の如く、翌二十五日から雨交りの東北風が起つて次第に強烈となり、そのため、さすがの赤潮も漸次外洋に向つて吹流され、二十七日にはほとんど跡をも留めないほどになつた。一同そ生の思いで歡聲を揚げたのもそのはずで、養殖中の眞珠貝は全部助かつたからである。この騒ぎは幸吉にはクツキョウの試練であつた。というのは深い所へ移したため助かつたことに基づいて、以後は從來よりも深い所、即ち五六尋の海底に貝

を置くことにしたからである。

この多徳島御木本眞珠養殖場、それは鳥羽から田舎道六里で鶴方に至り、そこから海上さらに三里という全く不便な地に横わる、その養殖場の上に、この年の暮、圖らずも異常の榮光が輝いた。それは日本水産會總裁小松宮彰仁親王御臨場の恩命これである。御木本は養殖場開始の翌年、宮よ「養眞珠」との染筆をば、宮の寫眞と共に頂き、これを居室に掲げ、仰いで經營にいそしんでいたのが、明治三十三年は養殖場創立十周年に當るので、宮邸に參上して、できた養殖眞珠を献上したところ、宮はお喜びになり、染筆はしてやつても、その文字を事實に現すのは容易のことであるまいと思つていたが、僅か十年の間に見事に成功したのは満足である。そのうち機をみて、養殖場を訪ねようと仰せられた。日本赤十字社の總裁でいらせられた宮は、この年の十二月二十日宇治山田市における日本赤十字社病院の開院式に御臨席になつたので、その翌二十一日を以て、同市から多徳島に成らせられることとなつた。

宇治山田と多徳島との間は陸路六里、中途に逢坂山の險があるので、人力車で片道に四時間はかかる。かくては車上の御疲勞も、いかばかりかと恐縮した幸吉は考えた末、とくに屈強な車夫を相當多數選擇しておいて、驛傳の方法を用いて一行を送つた。かれは先ず自ら一本の指揮棒を取り、號令を以て萬事を指圖したのであつて、その風姿眞にさつそうたるものであつた。はじめ車夫を整

列させて、各自に二足ずつのワラジを與え、まず「ワラジ」と號令して一齊にその一足をはかせて足許を整えさせ、次に「一同小便」と號令する。それが済むと、「出發」と叫んで自ら最先端の人力車に飛乗ると、他の車が一列を造つて直ぐこれに續くのであつて、一臺の車に前引き二人後押し一人計三人ずつで、進行中は決して列を離れることを許さない。一定の場所に至ると「三分間休憩」と號令して、また一齊にワラジをはきかえさせる。かくの如くにして、道中の所要時間を半減することを得た。前日は稀有の大雷雨であつたので、明日の天氣が懸念されたが、一夜明けると珍らしき好晴となり、夜來の豪雨に洗い清められた英虞灣の風色は、一入の淨さを加えて、波靜かなること、さながら春の海の如くであつた。宮には田中赤十字社理事・古莊三重縣知事等を従え、御木本の先導で場内をくまなく御巡覽あり、清水赤十字社幹事を以て

御木本始めここに集る人々は、眞珠の養殖に従事すること十餘年、一日の如くに力を盡した結果、國産の一として海外に輸出するに至つたのは、實に國家のためにもなり、また國民の模範とすべきことで、將來ますます有望な事業とお認め遊ばされ、深く満足に思召される。今後いよいよ勵精して、事業を擴張するように希望遊ばされる。

との令旨を下された。十年の昔この事業を創めた時には、かくも、ゆうあくなお賞めを頂こうとはたれか考え得たであろう。これを思うて幸吉は感激一杯で、奉答の言葉も一時は出なかつた。翌二

十二日宮を送つて名古屋に至り、御旅館で赤十字社幹部・沖愛知縣知事等と共に侍食の榮に浴した時、宮より

御木本は、あんな景色のよい處で、金もうけをするとは果報者じや。

とのお言葉があり、御歸京後さらに「人爲を以て天工を助く」との御染筆を彫刻せしめられた大銀杯を賜つたのである。

翌三十五年四月小松宮には、天皇御名代としてロンドンにおける英國王たい冠式に参列あらせられた際多くの御木本眞珠をお買上になつてパリで加工させ、それを英國の宮廷を始め貴族大官等への御贈與品に充てられたのである。

こうした感激に浸つた幸吉は、ますます奮發して力を養殖場の發展擴張に致したのである。しかしこの事業は、自然と戦いながら自然の力を導く仕事であり、それに陸上とは違つて海中での操作であるため、慮置がなかなか困難であり、事業の擴張せられるに従つて、支障もまた加わるばかりであつた。その一つは海底におけるミルモの繁茂である。元來眞珠貝の養殖には、若干海藻の生存するような場所が良いのであるが、しかしそれが餘りにも多く繁茂すると、貝を壓迫してその發育を妨げ、中には死ぬる貝も多くなり、とうてい良い眞珠を得ることができない。それで常に海藻の模様には注意し、潜水器を入れてミルモを刈取つたり、場合によつては貝を他の海床に移す必要があ

り、これがためには廣大な海域を要するのである。その二はタコの害である。タコは年によつては非常に多く生ずるものであるが、かれらは餌を求めて灣内を横行し、はしなくも澤山養殖してある眞珠貝に好個の飼料も見出すや、競つてその魔足を延ばして眞珠貝に吸着き、貝を破つてその肉を食ひ盡すのであるが、三尋も四尋もある海の底で營まれる生存競争であるから、タコを捕獲するより外にこれを防ぐ手はないのである。タコを捕る方法は色々あるが、廣い海のことであるから人手を要することが多く、無数のタコを捕獲するのは容易のことでない。その三は、一定の海底に澤山の眞珠貝を放養するのであるから、何といつても飼料の不足から、かれら自體の衰弱を來たし、その症状としては、貝がらの表面に脱皮が現れ、そうした貝は眞珠質を分泌する力が衰え、やがて死への轉機をとるに至る。これもまた養殖そのことから生ずる避け難き故障で、養殖事業を盛大に行へば行うほど、この障害も大きくなつてくる。その四は長期にわたる時化・暴風雨、ことに寒潮の害である。英虞灣で寒潮というのは、海水の溫度が攝氏八度以下に降つた場合をさすのであつて、その生起は、おおむね晩冬から初春にかけての頃であるが、幸に毎年起るものではないけれども、冷却の原因が複雑であるばかりか、一旦生起すればほとんど不可抗力で、これを豫防または除去する方法がまだ見出されない。

しかし何といつても禍の急激にきて、かつ猛烈なものは、やはり赤潮で、ことに明治三十八年一



月に多徳島を襲つたものの如きは、それこそ幸吉の養殖事業に對する眞に致命的の大打撃であつた。それは一月十日頃から英虞灣内諸所に同時に現れたのであつて、三十三年度のに比べてやや稀薄なものであつたが、灣内に留まつて散らざること月餘に及んだためか、先年の騒ぎ以來やや深い所に置いてあつたに拘らず、二月初頃から貝が續々と死に初め、三月に入つては神明・鶴方兩浦の貝は、ほとんど全滅の慘狀を呈するに至つた。とりあえず應急の手段を講ずると共に、他方には農商務省技師西川理學士の來援を求めて、原因や被害情況や對策等を研究した。そして潜水夫や多數の海女を雇つて死貝はもろん死にかかつた貝を引揚げて、その害毒が他の健康な貝にうつらないように努めたが、三月の初頃になつて、これまでまだ見たことの無いほど濃い赤潮が現れ、こんどは少しも減退しそうな風はない。しかも二月三日死貝を發見し出してから既に一個月になるのに灣内の潮は悪化するばかりである。赤潮については、これまで數度の體驗を持つてゐる幸吉も、さすがに驚かさざるを得なかつた。というのは、もうこうなつては、貝をば赤潮の無いズツト遠方へ移すより外に救う手は無いのだが、何分極寒の時で水溫が非常に低く、海女も長く水中に働くことができないため、移植が極めて困難だからである。しからはどう處置せられたか。後日かれが新聞記者の來訪を受けた時、破顔一笑して語つたところが、實に次の如くであつた。

イヤあの時ぐらい驚いたことは無かつた。もしそのまま、うつちやつておいた日には、何十萬

という貝が皆死んでしまうのだから、どうかして安全な處へ移して避難させねばならない。せめて幾分でもよいから助けなければ、貝と共に自分も死んでしまうのだ。そこで何んでも非常の場合には非常の方法で即應しなければならぬと決心した。しかし、こうなれば先立つものは金だ。何も恐れることはない。今は日露戦争の最中で、國が火花を散らして戦つてゐるが、自分は赤潮を向うに回して生産の競争をしているので、その武器は金の延べ棒だと信ずるから、直ぐ新に海女を二百名雇い入れ、潜水器もできるだけ多く用意した。そして次の如く命令した。ただ今から海女の給金は五割増、労働時間は三割減、薪は三倍炊いてやれ、もし薪が足らなければ、どこらの山でも構わないからドシドシ切つてこい。何か言つたら直ぐ値段をきいて、黙つてその値段よりなお二割増にして拂つてこい。こう命令して即時實行したので場員が皆必死になつて働いてくれた。そのため金庫の中は空になつたが、養殖貝の五分の一だけは立派に助けることができ、結局致命的損失はしないで済んだ。

この時のことだが、養殖場の支配人が非常に心配して、そんなに一時に費用を使つては善後策に困るだろうと僕に忠告したものだ。しかし僕には僕だけの確信があるから、決して心配するなと言つて安心させたが、實は僕ほど赤潮の恐ろしさを知つてゐる者がなくらい赤潮を恐れていたから、以前からだれにも知らさずチビリチビリと備荒貯蓄をしておいた、その金がたまつてい

たから、それを直ぐ出したので、借金もせずこの赤潮相手の苦戦も辛うじて切抜けることができたわけだ。これは僕自身も窃に得意としているところである。

判断が良くつて早いということは、かれの性格の一つで、そのために絶望的の難局にも、一條の活路を見出し得たのであるが、それにしても、活路を活路たらせるだけの準備が極秘裏にしてあつた點にも、またかれの非凡性を看取し得るのである。

## 七 行在所御召の光榮と眞圓眞珠の發明

明治三十八年十一月、明治天皇は伊勢神宮に平和克復の御報告あらせらるべく、十五日に宇治山田に御着あり、翌十六日は外宮に、十七日は内宮に御參拜あらせられたが、その十七日に幸吉は、辱くも行在所に召されたのである。この日實業に熱心なかどにより、眞珠養殖業者として鳥羽の御木本幸吉、殖林業者として尾鷲の土井八郎兵衛、排水事業者として桑名の諸戸清六の三人を召出され、破格を以て拜謁仰せ付けられる御都合であつたが、還幸の時日切迫のため、田中宮内大臣御旨を承つて御召の三人に伝え、かつその事業の實況をお尋ねになつたのである。その時幸吉は同大臣を経て、眞珠養殖事業の概要を言上し、なお眞珠の製作法・養殖海面圖・眞珠貝採取の情況並びに特許明細書等を捧呈したが、特にゆうあくな聖旨を拜して深く感激し

かならず眞圓眞珠産出の成功を期しております。

と同大臣まで誓言して退下したのである。

この日御召の光榮を受けた土井・諸戸の兩氏は、富豪として全國にもその名の響いている縣下實業界の長老であつた。しかるに身を一介のウドン屋に起して年齢も四十八に過ぎざる幸吉が、これ

らの先輩と共にこの光榮に浴したのは、前代未聞のことといつても過言でない。しかも土井は殖林について約三分間、諸戸は耕地整理について約七分間、そして御木本は實に十七分間にわたつて、眞珠の養殖について言上したのである。元來幸吉は、その身に奉ずること極めて薄く、常に綿服をまとい、まだ絹布をきたことがない。圖らずも御召を拜して參上するには禮装が必要である。時の三重縣知事有松英義からフロックコートを着用すべく傳えられたが、かれはそれを持つていない。知事も當惑してその筋の内意を伺つたところ、羽織・ハカマでも苦しからずとのことであつた。そこで丸に珠の字の紋を染め抜いた黒木綿服に、同じく黒の羽織・ハカマという出立で伺候したのであつた。

行在所を退下した幸吉は直に鳥羽に歸り、宅にも入らず、その姿そのまま濟生寺の墓所に到り先祖代々及びうめの靈前に、この光榮を報告した。墓前にぬかずかれの兩眼には感激の熱涙が浮かんでゐた。ここに幸吉の直情を示す一話がある。かれが寺内の墓所に參つたのを見た濟生寺の住職は、かれの跡を追うように來訪して祝詞を述べ

この度の御光榮は全くあみだ様のお陰です。

と附言した。するとかれは

イヤ今日の光榮は眞珠貝のお陰であつて、あみだ様のお陰でない。眞珠貝には感謝するが、あ

みだ様には感謝しない。あみだ様の御りやくは、隣室の老母にお贈かせ下さい。

と言ひ放つた。老母もとは佛教の信者で、熱心な求道者であつたのである。

今も述べた如く幸吉は、この度行在所に參上の節宮内大臣を経て、かならず眞圓眞珠産出の成功を期しますと誓言したのであるが、それには、かれ自身の心中すでに深い確信があつたからである。多徳島養殖場の經營は、御木本眞珠養殖事業の一進展ではあつたけれど、かれの目的は、こうした進展にあつたのではなく、幸吉にとつては、半圓眞珠はその企圖の前奏曲に過ぎない。そのねらいは、どこまでも眞圓眞珠の創造産出にあつたのであり、養殖場は、これが實驗の場として擴充せられたものである。さればこそ、かれの年中行事は、眞圓眞珠の研究に終始されていた。けれども、この人爲を以て天工を助ける神秘のカギは、容易に握らるべくもなく、創意工夫の天分に恵まれていた幸吉にも、その焦心勞思は眞に筆舌の及ぶところではなかつた。しかもその焦勞はついに報いられて、この神秘のカギを、たぐりよせる端緒が、ゆくりなくもつかまれたのである。

前節で述べた明治三十八年度の赤潮の慘害こそは、眞珠養殖事業に對する抜本的の打撃であつて實に養殖眞珠貝一百万個中の八十五萬個までを殺ろしてしまつたのであるから、さすが強氣の幸吉にも、失望落膽の念は隠しがたく、よその見る眼も氣の毒であつた。かれは日々實驗所に閉じこもつて、死んだ貝をば次から次へと開いていたのである。ところが、その澤山の貝の残がいの中から

見よ天然眞珠と少しも違わない球状の眞珠が、五個までも現れ出たではないか。半ばは喜び半ばは危みながら、これに刀を當てて切割つて吟味してみると、その眞珠の核心たる微粒物は、まさしく最初半圓眞珠を得る企圖を以て、貝がらと外とう膜との間にさし入れておいた物に違いないのである。しかるに、どうしたかげんか、それが肉の中に入り込み、眞珠質に普ねく巻かれ巻かれて、ついに眞圓眞珠を形成したものに外ならないと考えられた。

そこで更にその眞圓眞珠のできている場所を、とくと調べてみると、五つが五つとも肉柱のすぐ傍らであることが判つた。これまでは、核をば貝がらと外とう膜との間に入れたが、貝がらからは眞珠質を分泌せず、眞珠質は肉の方からのみ分泌するから、その方のみ眞珠質が巻き重なつて、半圓眞珠となつたのである。核を肉の中の肉柱の傍らに入れてやれば、眞圓眞珠ができるはずだ、これが判つた。八十五萬の貝の全滅は惜しい極みであるが、核の入れ場所をば五つの眞珠が教えてくれたのは、有難いことである。しかしながら核を肉の中にさし入れることは、實はこれまでも、しばしば試みたことであるが、いつもそれが吐出されてしまつて、留まらなかつたのである。今後、もまた恐らくそうであろう。いま五つの眞珠は眞圓眞珠のできる場所を教えてはくれたけれども、それができるまで、核をその場所即ち肉柱の傍らに留めておける方法は、教えてくれない。これを確かめなければならない。けれども眞圓眞珠發明の糸口だけは手にしたわけであるから、この糸口を

切れぬようにして巧みにたぐり寄せることこそ肝要である。いま一息だ。工夫に工夫を凝らして、幸にも確實に眞圓眞珠を産ませる方途を握りさえすれば、これぞ禍を轉じて福となすもの、八十五萬の貝の死は大死でないのみか、青年時代以來の夢が現實となるのだと、喜び勇んで更に精根を傾けて、核をば肉柱の傍らに保留して、これに眞珠質を全面的に卷かせる方法を研究し、翌三十九年三月に至つてそれが完成したのであつて、實に幸吉四十九歳の時である。よつてその事由を具してその筋に特許權を出願し、翌々明治四十一年二月十一日附を以て登録せられて特許權を得た。これが特許番號一三六七三眞珠素質被着法というものであつて、明治二十三年以來十有八個年にわたる苦心工夫が、ここに實を結んだのである。

この方法によつて完全な圓形の眞珠を得るには、核をば眞珠貝の内面に觸れしめることなく、却つて核の全面をば肉内に包擁させることが必要である。しかも濫りに貝肉の中に核をさし込めば、貝その物を殺すに至る虞があり、さればといつて、容易にさし入れ得る場所は、また容易に排出される缺點をもつている。その上良好な眞珠の生育に適する箇所は、貝肉中の或部分だけに限られていて、それは貝柱に接近せる一定の場所であることが明かにされた。そこで核をば眞珠素質分泌細胞組織の皮膜で包んだまま、他の母貝の皮膜を傷けて、その下層貝柱に近き部分に、これを外科的植皮術様に壓着し、しかる後その母貝をば海中に放養することにしたのであつて、特許番號一三六

七三眞珠素質被着法の神髓は實にここにあるのである。

しかしながら、この法によつて核の全部を貝肉内に包擁させるようにすると、それは一部を貝の内面に接觸させた場合、即ち半圓眞珠を造らせた場合に比して、その眞珠の生成がどうしても遅いのである。普通、眞珠貝の壽命は八年内外であるが、その中前の四個年は貝そのものの生長に必要な時期であつて、この期間には何等の加工をも施すことができないから、眞珠の養殖に役立て得るのは、その後の四個年であり、半圓眞珠の場合だと、この期間における養殖によつて、所要の大きさの眞珠を得ることができるのであるけれども、眞圓眞珠だと、四個年の養殖だけでは何ほどの大きさにも成りかねる。言換えれば、眞圓眞珠を産出させるには、半圓眞珠の場合に比して、更らに壽命の長い眞珠貝を要することになるのであつて、この點が、幸吉の第二に突當つた難關であつた。

そこで更らに研究を進めて、眞珠貝の壽命を延長させる方法の探求にとりかかつた。そして先ず若い貝と老いた貝とを比較して、老衰の原因を調査した結果、七八年を過ぎた老貝は、貝の表皮層が著しく破損し、そこから海水の浸入を受けて、生活機能の減退をきたすことを發見したのである。そこで試みに、破損せる貝の表皮に或種の塗料を施し、人爲的に貝の自己防衛の力を回復させる途を講じたところ、成績が良好で、普通八個年の壽命を九個年・十個年にまで延長し得るの好結果を得た。

これが、眞圓眞珠養殖の實際の成功に光明を投じた事柄であつたのである。

これにも増して重要な意義と價值とをもつてゐるものは、眞珠貝子虫附着法というものの發明である。養殖の事が段々盛んに行われて、これに要する母貝の需要がますます増加したが、さて母貝そのものは必要に應じて、いくらでも得られるかという点、決してそうは行かない。却つて事實はその需要に反比例して、母貝そのものの自然繁殖が減少する傾向が顯著となつてきた。その上、赤潮やミルモやタコマだが、かれらの生存を脅かすことも明かとなつた。こうした形勢だと、養殖の事業が盛んとなればなるほど、その資源たる眞珠貝が缺乏してきて、遂には養殖事業が不可能となるということに、ならざるを得ないであろう。これはゆゆしき大事であるから、幸吉は苦慮に苦慮を重ねて、眞珠貝子虫附着法を發明案出するに至つたのであつて、それは稚貝と稱して眞珠貝の極めて小さなもの、隨つてほとんど無數にそれが發生した時分に、一定の器具を用いてこれに附着させ、それをイケカゴに入れて保護飼育する方法である。

元來眞珠の養殖に最もよい母貝たる眞珠貝、即ちアコヤ貝は、無盡蔵なものでないばかりか、その産地が甚だ制限せられている。即ちその産地は全國の中でも、志摩の英虞灣、肥前の大村灣、能登の七尾灣及び土佐の浦戸灣に限られてい、それらも長い間の濫獲の結果次第に減少し、最近では英虞灣以外の諸地には、目ぼしい産出を見難いほどの情況に立至つていたのであり、英虞灣でも、

また何等か保護飼養の途を講じなければ、缺乏を來すに相違ないと思われたのである。しかるに幸吉のこの發明によつて、眞珠母貝の無限の獲得が期待せられ、眞珠養殖のために、たといかに多くの母貝が要求せられても、十分にこれを充たすことができるようになったのである。かくて眞圓眞珠の完成と眞珠貝子虫の無盡藏な飼育と、兩方をにらみ合せて調節活用する時は、絶えず全世界の要望を満足させて、ほとんど過不及なからせることができるのみならず、眞珠養殖事業は、この點において養蠶業と同じく、わが日本の特異な産業となり、その前途は洋々として測り知るべからざるものがあるであらう。

## 八 世界的發明とたたえられる所以

人工による眞圓眞珠の産出こそ、世界的發明家たる榮冠を、わが御木本幸吉の頭上にもたらしたものであるが、しかし眞珠の天然産出に人力を加えて、これを左右せんとする計畫は、全然かれの獨創に出たもので昔からまるで想いつかれなかつたことかという、必ずしもそうではないのであつて色々考えつかれたり、實地に試みられたりしたことは、存外古くから世界の各處に起つたことであるが、これまで決して成功しなかつたものである。それが立派に完成したのが、實にわが御木本幸吉の非凡の努力に因るのであつて、かれの發明が偉大な世界的發明とたたえられる所以は、正にここにあるのである。

試みに眞珠に關する人力加工の沿革を調べてみると、それは實に東洋に起り、また西洋にも起つている。西洋では、千七百四五十年の頃有名なスエーデンの博物學者リンネが眞珠生成の理を研究し、また從來支那で行われた人工法をも看破して、眞珠を製造する方法を發明し、これを國王及び國會に賣ろうとしたが、その事が成らなかつたと言われ、或は政府がその功を嘉みして千八百ドルの賞金を與え、やがて爵位をも授けたとの説もあるが、その眞相が一向審かでない。西洋事物紀原

には、眞珠の假造はフランス人シヤツキンが創めたものだと言われているが、これは、今日のいわゆる人造眞珠即ち模造眞珠の最初である。シヤツキンはパリの玉匠であるが、一日河魚が水中を泳ぎ回つて美しい色彩を放つているのを見て、フト思いつき、河魚のウロコを集め乾して粉末となし、これをガラスで造つた小さな玉の内面に塗りつけ、白ロウを詰めて眞珠を模造したのであつて、千六百八十年のことである。この模造眞珠は外見上、東洋産眞珠の優等なもの、ほとんど區別できぬほどであり、その製法も秘傳とされ事實となつていたが、千七百六十年に至り、パリ大學の博物學教授ルーモアに看破せられて、この人工眞珠の光彩を發する物質が、魚のウロコの銀色を呈するものと同一であることが發表せられたのである。更にその後千八百五十八年になつて、ドイツの博物學者ヘスリングが、淡水産の貝類について眞珠を人工的に生成させようと試みたが、遂に失敗に歸したのは前に述べた通りであり、米國ではこうした企てをした人すらまだ無い。かくて歐米諸國では、眞珠の養殖は、人力の及ばないところとなつていたのである。

東洋では事情はやや異なつていて、比較的早くから生貝に人工を加えて、眞珠に似た物を造る術を行つていた。即ち針金の先に貝片などをつけて、これを生貝の中にさし込み、僅に一個年以内に眞珠に似た物を造らせるのであつて、千八百六十七年パリの萬國博覽會に、シヤムから佛像眞珠の附着したカラス貝を出品したところ、縦覽人はその精巧なのに驚いたそうである。これは鉛で佛像

を逸り、これを貝と膜との間にに入れて造つたもので、シヤム王は、この佛像眞珠が歐洲人に賞讃を博したのを聞いて、更に職工に命じて同じようなキリストの像を造らせ、フランスの皇后ユーヅンに贈呈したので、皇后はこれを禮拜堂に安置させたといふことである。

こうした物はシヤムや支那やインドだけでなく、稀れにはわが國にも傳つてきている。明治三十九年十二月に東京淺草公園珍世界に陳列された顯佛貝或は釋尊出現貝と稱する物の如きも、その一である。これは古くから越後の某舊家に所藏されたものだとか、或は天然の一大奇貝で、學術上の参考品だとか唱えられ、いかにも不思議な物のようにいわれたけれども、實は上述の如き加工品に過ぎない。淺草公園で見せたものは八個の佛體が現されているが、明治四十二年に臺灣の蠻界で見出されたものは、十一體の佛像を現していた。何れもカラス貝の貝の内面に五厘ぐらい隆起していて、顔面・手足等も明瞭に顯されている。こうした物は、わが國でも恐らくまだ外にもあるであらう。

支那において、この程度の眞珠人造法の盛んに行われているのは、福州邊である。この地方では毎年四五月の頃多くの貝を水中から引上げ、兒童を使つて小さな竹ペラを貝の口にさし込ませ、そして粘土・骨片または金屬等で造つた種々の小さな物體を、その口からさし入れ、同時に魚のウロコの粉末を水に溶かせたものを、貝の大小に應じて三さじ乃至五さじずつ注入した後、前の竹ペラ

を抜取つて貝を再び水中に入れ、一個ずつ互に離して水底に排列し、水流を良くしておよそ十個月の後に引上げ、貝を開いて人造眞珠を採るのである。その人造眞珠は、どんなことに使われるかという、女兒の頭髮の裝飾、兒童のキンチャクの緒玉等に用いられるのであるから、高級のがん具に過ぎないのであつて、眞の裝身具にはなり得ない。

こうした物でなく、本當の眞珠が、天然に人力を加えることによつて、できないものだろうか。それができたら、濫獲のため段々著しくなつて行く天然眞珠の減少を償い、無限に高まり來たる眞珠愛用の世界的要求を充たすことが、できるであろう。ことに、それが古來一再ならず考えられたり試みられたりしながらも、まだ成功を見得ない世にも大きななぞであり、西洋では、それこそ眞珠のその如くに、全く美しい夢に過ぎず、人力では解決不可能の課題であるとして、見切りをつけられており、東洋では、そのいわゆる眞珠人造法は、寶僧の好餌たる顯佛像や兒童のがん具を造り出すより以上には、進み難い現状に止まつている。正にこれ難事中の至難事には相違ないが、しかし、こうした難事にぶつつかるのも一生の痛快事である。これ獨り日本の新事業たるのみならず實に世界の新事業だからである。その上、眞珠は東洋及び南洋の所産であつて、歐米にはほとんど産しないものであり、ことに到る處灣や島に富んだわが國こそは、その天恵を利用して、この新事業を試みるのに適好の場面であるから、ここに全力を傾けて努めに努めたのである。そして青年の

頃から絶えざる取引によつて、わが國における天然眞珠の産額が年を追うて減少する事實を知り、これから推して全世界の天然眞珠もまた、頻年遞減の一途をたどるであろうと想定して誤らなかつたこともまた、この不拔不屈の努力家に對して恵まれた、天與の創意であつたのである。

この關係を知らんがためには、イタタイ世界の眞珠は、どんな工合に漁獲されているか、それに對して日本人はどんな關係にあるか、またその産額は増加か減少か、いづれの傾向にあるか等について、これを明かにしなければならぬ。今も一言した通り、世界における眞珠の産地は、主として東洋及び南洋であつて、西洋には無い。即ち東洋では、セイロン島とインド大陸との間にあるマナー灣、それから西に進んでベルシャ灣・紅海、また南洋ではオーストラリアのトールレス海峡、西オーストラリアの沿岸、及び木曜島等が、日本以外の主な産地であり、メキシコのカリホルニヤ灣からも若干出るといわれるが、全然問題にならない。この外淡水では支那の揚子江・黒龍江、米國のミシシッピ河等も擧げられるが、しかし淡水産の眞珠は、質においても量においても遙に劣るので、ほとんど言うに足らない。

マナー灣における眞珠漁獲の歴史は非常に古いもので、紀元前數世紀の頃からタミール人が眞珠の採取を定業としたと言ひ傳えられている。英國人がセイロン島を占據するに及んで、すぐれた海洋生物學者を本國から招いて、眞珠貝の發育繁殖に有害なカイメン・サンゴ・魚族及び潮流・海底



の関係等を調査させたところ、荒波や潮流の影響を甚だしく受けない砂底に、貝卵を移植させることが必要であること、及び岩石の多い處では、貝が亂雑に繁殖し過ぎて飼料が足らなくなるため、貝の發育が不十分であるばかりか、死するものも少なくないこと等が判つたのである。そこでインド總督は自らこの眞珠漁獲の事を管理し、一定の方法を立てて何年目かに政府の力で移植を行い、しかる後、年度を定めてこれが採取を行うことにした。

マナー灣の北方にアダムス・ブリツジと呼ばれる一群の島々がある。その邊の海は熱帶的特徴を帯んだ清澄な濃紺青色の入江で、そこに幾多の小島が点在し、フカヤサメが思いのままに泳ぎ回つている。岸邊に近き一帯は沙漠同様の砂地で、處々に中空高くまで生い繁つたヤシの葉が、潮風を受けて物淋しい音を立てている。その背景をなして遙か向うに黒幕のように見えるのは、ジャングル即ち晝なお暗き密林で、猛獸の住家である。この邊は平時は全く無人の境で、ただ眞珠貝採取の季節だけは總督府の出張所を始めとして、裁判所・刑務所・郵便局・病院・市場等から巨大な貯水場や悪疫預防の衛生施設、さては竹を柱にヤシの葉で屋根をふいた小屋までが、幾千となく新に設けられて、セイロン人・インド人・ベルシヤ人及び遠來の歐米人等合せて五萬人もの多勢が入込み眞珠貝水揚取引の大市場がここに現出する。

採取の時期は二・三・四月の候、出漁の船は五六百隻、いづれも轉覆を防ぐため、船側から突出

した半圓形の丸太の先にカツブシ形のケタをつけた、昔から傳來のままの船である。それに指揮者一名・潜水夫十名・及び助手十名が乗込むのであつて、潜水夫はタミール人・マラバー人・ムール人・アラビヤ人・ベルシヤ人等で、歐米人は危険を感じて潜水しない。潜水の方法は民族によつて多少違ふ。マラバー人は不完全ながら潜水具を着け、十斤から五十斤の重石を結び付けた綱を持つて水中を下るし、タミール人・ムール人は永く海底に留まるため早く水を潜るし、アラビヤ人は軽い石または鉛を身につけて、自然に水壓に耐えるように徐降する。水深は三尋から十尋、海底に留まる時間は八十秒から百二十秒である。潜水夫が船にはい上ると水を吐き、時としては鼻や耳から出血することさえあるが、かれらは、これを多幸の象徴として喜ぶ奇習がある。船は日出前に離陸して二十マイルから三十マイルの沖合に出で、それぞれ旗印の立つた處に留まつて、正午頃まで潜水夫が出没活躍する。水の音や潜水夫の苦しげな息使い、作業する助手の異様な掛聲、魔法使の唱えるまじない・祈り等が、船側を打つ波の響きと相混じて、一種悲痛な哀調を傳える。

歐米人が危険視する潜水も、幼時から海中を仕事場と考へているタミール人やアラビヤ人には存外平氣であるが、しかしフカヤサメの來襲は、かれらもこれを怖れる。ただ迷信深きかれらは魔法使の祈り・まじないに頼つて、その禍を免れようとするのであつて、かれらは出漁前及び潜水の際にも、魔法使の祈りを受けなければ決して仕事に着手しない。時々フカヤサメに遭うが、熟練せる

かれらは巧みにこれを避け、危害の身に及ぼうとする瞬間でも、かれらの迷信的信仰がしばしば効果を奏して、よく安全を得るのは、むしろ不思議と思われるほどである。もつとも一匹のサメでもフカでも、その襲来が忽ち全船に伝えられると、その日は断じて仕事をしない。またたとい虚報だとしても、それが判つても、一度かれらに恐怖の念が兆したら、いかなる慰安も説得も何の効果もなく、休業しなければ承知しない。これがため政府は多大の損失を被むることがあるので、事故喧報者は厳罰に處せられる習慣法がある。かくて潜水夫の勇氣を鼓舞し安心して働かせるには、祈り・まじないが必須不可欠の方途であるから、多數の魔法使が常備されている。魔法使は出漁から歸航まで海岸に立つて、天を仰いだり地に伏したりして祈りをこめ、或は異様な身振りをなしてまじないを唱え、そして潜水夫の安全を祈る。また他の魔法使は海邊の小屋に閉じこもり、銀製の雌雄二匹の魚を浮かべた水盤の前に裸體のまま伏して、終日祈りを続ける。そしてもし、その一匹の魚が他をかむようなことがあれば、サメ・フカ來襲の豫報だとして直に警報を發する。この外漁船に分乗していて潜水の度毎に祈りをする魔法使もある。

採取された眞珠貝は、一旦政府の倉庫に入れてこれを三分し、その一を潜水夫の日常として與え残り二は政府の収入となる。潜水夫は自分の分け前の六分の一を助手に與えるが、別に一日の勞賃として貝二十個を受ける。政府の収入として格納せられる貝は、一日平均二萬個に達するが、これ

は千個ずつを單位として競賣に附せられ、肉を腐敗させて洗い去り、その中から眞珠を取出すのである。ここに集まつてくる人達は、商人はもちろん役人から人夫に至るまで、投機的氣分に動かされていぬ者はなく、資金に應じて多少の眞珠貝を買入れ、萬一のきようこうを試みる。或る時一人の人夫が、僅か五セントで買った一個の貝の中から極めて優秀な眞珠を見出し、一躍成金になつた事實もある。總督府の収入は相當の額に達するが、潜水の仕事に至つては、まじない・祈りを方便とし、迷信を鼓舞して危険を冒させているのである。

アダムス・ブリッジと相對する眞珠貝採取の中心地にネゴシボがある。これは大正十五年の春幸吉が自ら視察した處であるが、ここに行つてみると、海岸から十マイルから十五マイル隔てた海中に、岩礁から成立つた瀬があつて、水深僅に十尺から三四十尺に過ぎない。そこに澤山の眞珠貝が岩礁に附着して住んでいるのを、潜水によつて採集するのであつて、潜水の方法はアダムス・ブリッジにおけると違わず、瀬であるため水深が浅いだけに便利であるが、ここは貿易風の盛んに吹く處であるから、それが強烈に吹きすさぶと、巻起される荒波のために眞珠貝が洗い去られてしまつて、ほとんど跡を留めないようになることもあつて、非常に不安定であるといわれている。

ペンガル灣のマライ半島に近く、南北にわたつた群島にマーグイ島があり、これも有名な眞珠貝の漁獲場であるが、マナー灣やセイロン島と違つて、潜水器を使つて行われる。採取の時期は雨季

の関係上、大抵九月から翌年五月にわたり、その撲様は、まず約一ヶ月間の食料と人員とを積込んだ木造帆船で、マーグイ港を出帆し、一二晝夜で目的地に達する。この邊の海は大潮と小潮とが約一週間ずつで交代するのであつて、小潮の一週間は海水が澄んでいるから水中でもよく視えるが、大潮の一週間は海水混濁して仕事ができない。それで小潮の間は引續き潜水するが、大潮の間は沖合に假泊して水の澄むのを待つてゐる。かくて一ヶ月に二回の小潮十四日間に仕事をして一應引上げるのが常例となつてゐる。ここはセイロン島とは違つて、二十五尋から三十尋の水底に潜水して作業するのであるから、その作業は相當に困難で、潜水夫の外に、綱を持つて潜水夫の行動を助ける助手一人、潜水器に通ずる通風器を運轉する者五人、その他の仕事に當る者一二人を要する。海底は大岩巨石が重なり合ひ、色々の海藻がその間に繁茂し、大小の魚族が泳ぎ回つてゐる。その間を縫つてチョウ貝を採拾するのであつて、この邊には眞珠貝はほとんど無く、大抵チョウ貝ばかりである。以前は、ここで働いてゐる潜水夫の約七割は日本人で、中には十隻内外の船をも有して組織的に採拾の事業を營んでゐる日本人もあつた。

しかし潜水による眞珠貝漁獲の比較的最も盛んに行われるのは南太平洋の水域で、なかんづくトレス海峡・木曜島・アラフラ海に面したポート・ダーウィン、及びオーストラリア西海岸のブルームの如きは、何れもその中心地である。まず木曜島について語ると、この島に住居する者約三千

人で全部眞珠採取とその他の漁業とに従事してゐる。その中には二十五種の民族が集まつていて、人種學的研究に好箇の處だとさえいわれる。もつとも眞珠採取事業の經營者は皆英國人で、採取船は百隻を越えているが、これに使われてゐる者は、以前は約七八百人を算した日本人を主とし、他にはマライ人等で、支那人はほとんど居ない。けだし、ここには二十五種もの民族が集まつてゐるけれど、眞珠採取に最も巧みなのは日本人で、深く潜水し得る者もまた日本人であるところから、日本人が非常に歓迎せられたのである。採取の方法は、前に述べたマーグイ群島のそれと全然同様である。次にポート・ダーウィンの水域における採取の有様も大體これと同じく、この邊の氣候はわが國とは正反對で、毎年十二月から翌年二月までが最も酷熱の頃であり、それに降雨・風向等の關係もあつて、採取はこの時期を最盛時として行われる。またオーストラリア西海岸ではブルームが中心で、方法も前二者と同じだが、ここのは潜水服に電燈の装置があつて、サメやフカを追ふことができる。貝は水深九十フィート内外の岩石に附着してゐる。もつと深い處には、より多く着いてゐるけれど、潜水夫の活動が自由でないため、收穫が少い。

以上述べた木曜島・ポート・ダーウィン・ブルーム等を一括して、全オーストラリアにおいて眞珠の賣買に携わつてゐる商人が三四十名、採取に従事する人が約五千人、採取船約五百隻で、採取高は三四十年前に年額二百五十萬ドル乃至三百萬ドルといわれ、これに對して課せられる税金が年

額十萬ドルを下らなかつた。もつとも世界經濟界の情勢によつて、絶えず變動は免れないのである。そして採取従業員の約七割乃至それ以上が日本人であつたことは、直前にも一言したところであつて、歐米人は危険を恐れて潜水しないのに反し、日本人はすいぶん深く潜水し、その上貝類採取の技巧と、暗礁多く潮流險惡な海上を航行する手腕とを持つてゐるから、最も歓迎せられた。しかしながら危険もはなはだ多いのであつて、しかも潜水服を用いて行われるこの危険は、前に擧げたマナー灣・セイロン島等における單なる深潜によるものとはすこぶるその種類を異にする。マナー灣やセイロン島では、危険の對象が主としてサメやフカであるのに反し、オーストラリヤや木曜島では水壓それ自體なのである。ここでは潜水服を着けた人が六七尋の水底まで下るのに約六分を要し、水底での仕事が約五分、それから再び水面に上るまでに約三十分を要する。しかもその水面に出る時が最も難かしいのであつて、急に上るようなことがあると、水壓の關係で生命を失う虞さえある。採取中の不祥事は、ここではほとんど無いのであるが、常に水中深處で働く關係から、水壓のため一種強烈な痛風の如き症狀を呈して、手足共にまひして不隨となり、ついに不歸の客となる者がすこぶる多く、大正十年に至る約三十年間にその従事邦人中四百數十人の死者を出している。現に木曜島やポート・ダーウインやブルーム等の街上で、こうした病氣にかかつてゐる人の痛ましい姿を一再ならず見受けるのである。

しからは、かかる眞珠貝漁獲の収益はどうかと見ると、天然眞珠は多くの貝の中から極めて稀れに発見せられるに過ぎない。しかも澤山の貝を深い深い海の底から採取するのであつて、すいぶん多額の出費を要するのだから、必ずしも非常に有利な仕事とは言われない。莫大な資本を投じて極めて大規模にでも行えばとにかく、そうでない限り大體において、まず收支相償う程度に過ぎないのである。ただ時あつてか意外の優珠を得るといふきょうが、そこにあるのである。かの有名な世界の名眞珠「南の十字」の如きは、このオーストラリヤ西海岸のしかも比較的淺い海中から、発見されたものである。これは全く破天荒のことであるが、しかし大抵毎月一二度は、三四十年前の時價で五千ドルから一萬五千ドルぐらゐの良い珠が見出されるのであり、明治四十年の如きは一個八萬ドルの優珠が獲られた。これなどは極めて稀れな場合であるけれども、實際それが關係者を誘う好餌となつてゐる。

そはとにかく、ここに注目せらるべきは、こんな工合にして採取せられる天然眞珠の世界における産額が、漸次に減退の傾向を示していることこれである。それは取り過ぎるためか、或は貝の産額それ自身が減るのか判らないけれども、とにかく眞珠の獲得額が段々と少くなつてきているのは近來の事實である。

幸吉は調査の結果この事實に着眼したのである。天然眞珠の産額は漸次に減退の一路をたどつて

いる。しかも世界における眞珠の好尚需要は年々歳々増加し普及するばかりであつて、ほとんど底止するところを知らない。ひるがえつて、わが手許を視ると、自分の養殖方法によつて十分にかつ確實に眞珠を産出することができるのであり、またその資源は自分の眞珠貝子虫附着法によつて、全く文字通り無盡藏たらせることができるのである。およそ地球上の眞珠産地をみるに、おぼむね赤道またはそれに近い處であつて、酷熱の下に二三十尋またはそれ以上の深い深い海底を探り、あるいは巨岩大石に附着せる貝を、急潮激浪のために洗い去られない前に集め、あるいは命的に、サメやフカと闘つて、ぎょうこうを求め、前にも述べた通りインドにおける眞珠貝の漁獲の如きは、魔法使の祈りやまじないを方便に、人の迷信を刺激して生命の危険を冒させる、誠に痛ましき人間虐待であり、またアラフラ海やオーストラリヤ沿岸におけるそれは、わが同胞の勇敢性と忍耐力との犠牲において、行われてゐる難行苦業であり、しかも往々にして水壓のために不治の病にかかるのは、これまた一種の悲劇といわねばならない。しかるに御木本眞珠養殖場の實況をみると、海は浅く波は静に、氣候温暖で風光明媚な水域において、無数の眞珠貝が安全な移動式タンボの中に並べられてタコやミルモから完全に衛られて、自然のままに飼育せられている。従つてその採取の如きも、さながら、われらが押入れの中から物を取すが如くであつて、便利といおうか容易といおうか全く自由自在であり、しかも、それが女性の纖手によつて、いとも器用に取運ばれて行く

のである。何たる甚だしき相違であらう。即ち幸吉の出現こそは、眞珠漁獲に對して全く産業革命的變化をもたらしたものであり、のみならず、それは實に一種の人間虐待をば、耕作栽培の如き平和産業にまで持來たしたものであり、人道上から見ても特筆せらるべき意義をもつていたのである。いわんや従來の有様では、眞珠の産額が年々歳々漸減の一路をたどるのみで、これを償う途としては無かつたのに對して、幸吉の研究と發明とは、ここにも前人未到の境地を發見し、まことに人工を以てよく天工を補い助け、しかもその産み出すところのものは眞に寶珠の無盡藏であつて、そこに不漁とか不作とかは無いのである。かくてこそ確實に全世界の需要を充足することができるのであつて、産業上からみても、正に大書せらるべき進展といわねばならない。いうまでもなく装身の需要は人間欲望の一面であり、眞珠の好尚は交際社會にのみ止まるものならば、眞珠養殖の事業は狭い範圍の特殊産業たるに過ぎぬかも知れない。けれども装身の具としての眞珠の要求は、今やいずれの階層にも擴充されて、廣く社會の一般に普及されようとしている。これに天然眞珠と異ならざる美珠を澤山に供給して、一方には減退し行く天然眞珠の産額を償い、同時に普く全世界の一般的需要を充たして、あらゆる人達に満足を與えんとすれば、この發明こそ、世界的なる名に値するものでなくして何であらう。

ここに附記しておくべきは、幸吉がこの發明を以て堂々と世界に打つて出て、地球上の専門家の

公正な審判に訴えたことである。そしてこの発明が内地において、その意義と価値とがまだ十分に認められない前に、早くもすでに外國人から驚異的注視を受け、多徳島には海外からの視察者や研究家が訪ずれ、内地の言論界がまだ筆を加えないうちに、外國の有名な新聞や雑誌に養殖真珠の記事が大々的に報道せられたのである。たとえば既に明治三十七年十月九日に、アメリカのニューヨーク・ヘラルドには「日本における真珠養殖方法」と題して、左の如き記事が掲げられた。

全世界の寶石業者を驚かし、交際社會の服装及び流行に一大影響を及ぼすような一つの珍らしい方法が、最近日本において發明せられた。人工で真珠を養殖する方法即ちこれである。この發明が始めて米國に報道せられるや、全合衆國の眞珠商は大いに驚いた。この方法にして廣く世間に傳わるならば、天然の眞珠は終にその價值を失ひ、ひいては寶石業者に大打撃を與えるであろうと恐れたのである。しかし眞珠の養殖法は一つの秘術であるばかりか、これが實行は甚だ困難であつて決して廣く世間に傳わるべきものでないことが明かとなつて、米國の寶石業者は漸く安心したのである。

この眞珠養殖法によつて、日本が昨年中に産出した眞珠の数は實に二萬四千個の多きに上つてゐる。かくも多量の眞珠が人工によつて産出せられるようになる、眞珠というものの價值が段段と低落して行くであろうと、おそれる者がある。けれども現時歐米における眞珠の需要は年々非常に増加しつつあるに拘らず、天然眞珠は年々減少しつつある。現に三年前にはミシシッピ河から年額一百万ドルの眞珠を産していたのに、今年の如きは僅に三十萬ドルも出ないだらうと云ふことである。その他眞珠の産出を以て有名なベルシャ灣・東インドシナ・日本等においても天然の眞珠は年を追うて減産し來り、ために眞珠の價格はますます高價に傾いてきてゐる。それ故に御木本氏の發明によつて、眞珠の産額が多少増加しこそすれ、今日の價格を低減するようなことは決してあるまい。

御木本氏がこの養殖法を發明實行したのは、今より十四年前即ち千八百九十年である。かれに先だつて眞珠の養殖を試みたのは中國人であつたようである。中國人は數世紀前つとに眞珠の養殖に着眼し、以來實行してきたようであるが、その産するところのものは品質極めて劣等であつて、天然の眞珠と比較すべくもない。しかるに御木本氏の方法に至つては、はるかに中國人に超越し、その産出する眞珠は、光澤・品質少しも天然の眞珠と異なるところがない。

御木本氏は、日本の南海岸なる多徳島及び英虞灣に五十萬エーカーの眞珠養殖場を有し、二百餘人の人夫を使役して、その發明した方法を實施している。米國第一の眞珠商モーリス・フロワは右の發明を聞き、特に眞珠採取鑑定熟練者を日本に派遣して御木本養殖場を視察させた。しかし御木本氏の方法は秘密にして何人も知ることができず、フロワ氏の派遣者も何等學ぶと

ころなくして歸つてきたということである。フローワー氏の談によれば、養殖真珠は近時漸く歐米の市場に現れてきたが、その需要は漸次に増加するであろう。ただ養殖真珠の一缺點は、その粒が小形で、かつその圓形の完全でないことである。歐洲寶石市場の中心ともいふべきパリ・ロンドンにおいても、養殖真珠は次第に顧客を得るに至つた。もつとも養殖真珠は人工的であるとの偏見が、今でもなお流行社會に行われていて、上流社會では、まだ十分にその價值を認めていないけれども、フローワー氏の信ずるところによれば、年を経るに従つて養殖真珠の需要は次第に増加するであろう。同氏はまたいうのに、米國では日本における如き真珠養殖法を實施することは、とうてい不可能であろう。米國で唯一の真珠産出地たるミシシッピ河の淡水では、海水と同一の作用を真珠貝に施すことができないであろう。

日本における真珠養殖の最好季節は、夏の初から秋の終に至る間である。御木木氏の養殖場に使役せられている人夫は多くは婦人で、その平均賃銀は一日二十五錢乃至二十二錢五厘である。もつとも特に熟練した潜水婦は一日三十五錢を得、その労働時間は朝の七時に始まり夕の五時に終り、その間二時間ごと三十分乃至一時間の休憩がある。日曜日に休業はしないが、毎月一日と十五日とが休日と定められている。

これは今より四十四年前のこととて、半圓真珠が發明せられ多徳島養殖場が開設せられてから十年

後頃の情況であり、眞圓眞珠がまだできない前のことであるのに、いち早く米國に傳えられて、寶石商達に少からざる刺激を與えたのである。しかもそれが、またかれ自身に反映して一段の希望と緊張とを帶來したのも、想像に難くはない。

## 九 人目をさらつた博覽會の出品

商賣にはその商品の性質を知らせる必要があり、ことに、これまで絶えて無かつた眞珠店というものを新たに始めたに於いておやである。これまで眞珠は貴い寶玉として取扱はれたものではあるが、これを專業とした商店は日本にも中國にもまた西洋にも無く、幸吉の銀座の店が、世界における最初のものなのである。これは意味深いことであるが、それだけにまた、その存在を主張するまでに骨の折れたことも論を待たない。しかもその存在を主張するに當つて、かれは商業家の常用手段たる廣告によることなく、實に人々の直観目撃に訴えたのであつて、即ち博覽會・共進會・展覽會等を善用して、あらゆる人々の觀覽に供した。眞珠は單なる日用品ではなく、人類の美的趣味を満足させる寶玉であり、これを用いて造つた物品も實用品といわんよりは、むしろ高尚な藝術品である以上、單なる廣告によらずして特に一般公衆の直観目撃に訴えたかれの行き方には、さすがに眼の高いものがあつた。

したがつて、そうした所への出品陳列には、腕によりをかけ、非常な意氣込みでやつたものである。御木本眞珠店が元數寄屋町の横丁からヤット銀座の大通りに出た明治三十六年のことである。

が、大阪で第五回内國勸業博覽會が開催されたので、幸吉は眞珠及び眞珠製品を出品した。その出品は本館と水族館と兩所に別けて陳列されて、等しく内外人の注目と好評とを集め、新聞紙上でもしきりに推賞され、幸吉自らも出品人であると同時に品評員にも擧げられたのである。しかるに突如ここに一事件が持上がった。六月廿八日の夜のこと會場に賊が入つて、貴金屬・寶玉類が盜難にかかつた。御木本の出品も本館の出品全部、價格にして四千八百圓のものが盜まれたのである。當時博覽會の盜難事件として新聞紙上にやかましく傳えられたもので、盜難にかかつた店は已むを得ず、何れも窓掛をおろして閉じてしまつたのであつた。この日幸吉は、津市にあつて電報を手にして驚いたが、しかし盜難にかかつたからといつて、陳列箱を空にしておくのは觀覽者に對して氣の毒であり、店としても不面目であると考え、急に用意を整えた結果、災後三日で再び前同様の出品をすることができた。その機敏なやり方は著しく世人の同情と興味とを喚起したのか、賣約數は舊に倍するの盛況を呈した。幸吉はまた新聞紙に廣告をなし、盜まれた品を見出してくれたら、どんな品でも一品につき百圓の謝禮を呈すると告げたのである。ところが、その盜人は大工で、やがて警察の手で捕えられたので、被害品は全部もどつた。そこで謝禮は、一括してこれを警察關係の公益方面に寄附したのである。この事もまた世に傳えられて、御木本眞珠店の名は忽ち關西にも知られるに至つた。後日かれは當時を追憶して次の如く語つてゐる。



あの博覧會の騒ぎも、僅かの盜難にかかつたことが却つて評判を取る元となつた。謝金の廣告等に金はかかつたけれども、品物は全部返つてきて、それが皆賣れたから、結局少しの損もしないで非常な廣告をしたようなもの。あれから後というものは、僕の眞珠を盗んでは罰が當るなどという者ができて、今じやたれ一人盜む者もない。實にこんな愉快なことはない。

昔からも「禍福はあざなえるなわの如し。」などというが、禍を轉じて福となすことも、人生處世の要事であることを示す一適例をここに見る。

二年を越えて明治三十九年九月一日から今の日比谷公園の地に催された五二共進會にも、同年十月八日から横濱長住町に開かれた日本水産會創立二十五周年記念共進會にも、眞珠及び眞珠製品の出品をした。すでに大阪の博覧會で多大の經驗を得ていたから、店員達も陳列の方法に慣れていてその出品は大いに好評を博したのである。五二共進會に出品したピンク色大眞珠一個は、大阪の藤田傳三郎の買取るところとなつたが、當時としては珍らしく高價の品として大評判となつたし、水産會記念共進會では出品が名譽賞を受け、同時に開かれた水産大會において、幸吉は水産功勞者として表彰された。

翌四十年四月一日から東京上野公園に開設された東京勸業博覧會こそ、幸吉が得意の敏腕を揮うに恰好の壇場であつた。ここでは第二號館中央大通り四つ角の眞中に、特に高さ一丈餘の陳列塔を

造り、その中に一際すぐれた意匠の下に、眞珠及び眞珠製品が飾られてある。その陳列は一週間ごとに取り換えられるのであつて、最初の週には黒塗の盆に富士山及び富士川の風景が描き出され、その河岸の岩石に擬して大小の眞珠が置かれてある。次の週には盆石が一變して東京不忍池畔の春景色となり、その次の週には更に變つて芝浦の潮干狩となつている。この週からは、そこに國立博物館所藏の物に摸作した眞珠の唐團扇が陳列されて、金色さん然あたりを拂い、來觀都人士をアツと言はせたものである。これに使われた眞珠の數は合計八百五粒で、その中天然眞珠五百十五粒、養殖眞珠二百九十粒である。團扇の輪廓を圍んだ眞珠は特に金色のものをを用い、最上部にちりばめた三個のうち眞中の一個は稀代の逸品で直徑五分大、俗に八方ころがしと呼ぶ正圓體のもので、琉球の宮古島で採れたものであり、特殊の銀色光を放ち、幸吉すら三十年來見たことのない優珠である。この團扇が陳列されるや、たちまち博覧會場中第一の呼び物となつて、全都に異常の評判を起した。こうした貴重品であつたから場内における保管については、特に考慮が拂われたのであつて即ちこの陳列塔下の土間を掘つて地中に金庫を埋め、そのふたは上方に向けて、床上から開閉し得るようにし、毎日閉館後は出品をここに藏めて、盜難を避けることにした。この法は、外國の博物館等で貴重品の取扱に關して行われているところであるが、先年大阪における盜難に苦い經驗をもつたかれは、これを用いたのであつて、わが國ではこの舉を以て最初とする。

越えて四十二年四月一日から、上野公園竹之臺に第一回日本發明品博覽會が開設せられた。實にわが國における特殊博覽會の最初であつて、幸吉が力を込めて協賛したところであり、ここに陳列したかれの出品は、全く人目をさらつたものであつた。その陳列臺は高さ二十尺、内部の直径十八尺の六角體をなし、總ガラスで造られ、しかも、それに出入口が付けてあつて、入つて内面から觀て回ることができし、出て外から回つて觀ることもできるようにしたのは、確に陳列上の一新機軸であつた。そしてそのワクは全部眞珠で包被し、陳列品は養殖眞珠を用いて造つた品物を主とした。床下地中に金庫をすえたことは前回と同様で、以後はこれを常例とした。

翌四十三年三月十六日から名古屋市中開かれた共進會は、地方的な小規模なものでなく、實は全國的かつ大規模なものであつたが、ここに陳列した御木本の出品もまた非常の好評を博したものであつた。

これらは國內に開催せられた博覽會・共進會等への出品陳列についてであるが、同時に幸吉は海外諸國におけるそうした所への出品陳列にも、極めて力を込めたものである。この頃は世界各地において博覽會が盛んに行われた時代であつて、萬國博覽會・世界博覽會が毎年どこかで開催されていた。明治三十七年には米國のセント・ルイにあり、翌三十八年にはベルギーのリエージュにあり、別に米國ポートランドにもあり、同四十年には米國のシアトルにもイタリヤのミラノにもあり、同

四十一年にはロシヤのモスクワに萬國裝飾美術工藝展覽會があり、翌四十二年にはまた米國シアトルにアラスカ・ユーコン太平洋大博覽會があり、その翌四十三年には英國ロンドンに日英博覽會があつたが、これら博覽會等の開催せられることに、政府はそこへの出品を勧誘したが、そうした勧誘を受けるごとに、幸吉は未だかつて辭退したことがなく、常に相當の費用と努力とを惜まらずして必ず出品陳列をなし、しかも、いづれの場合にも優秀な成績を示して人目をさらつたのであるが、これについては後節に至つてなほ述べるであらう。

## 一〇 五箇所養殖場の新經營

眞圓眞珠の産出方法は精密な作業であつて、その手續もやや複雑であり、その上、これに附帯した眞珠子虫附着法や眞珠貝塗料使用法など、かなり周到な注意を以て實驗研究を加えねばならぬ事柄も段々多くなつてきて、従前の多徳島だけでは、狭さを感じて十分の運営ができない。しばしば海面の埋立等をなして、擴張を計つたけれども追付かない、どうしても他に適當な場所を物色して別に眞珠養殖場を經營しなければならぬことになつて、調査を進めたのである。幸吉はかつて農商務省の命を受けて、眞珠貝を廣島縣嚴島の海岸に移植したこともあれば、富山縣廳の依頼によつて志摩エビを越中の海岸に移植したこともあり、また海産物取引の關係で全國津々浦々はあらかた知つていたのであるが、さし當り多徳島から海路交通し得る範圍にこれを求めて、伊勢國度會郡の五箇所灣を選び、ここに第二の御木本眞珠養殖場を新たに經營することとし、明治四十一年七月から着手して十二月に一應落成したのである。その地積約三百八十町歩であるが、附近一帯の海面百八十七萬坪を漁業組合から借入れて、そこに眞珠母貝五十萬個を英虞灣から持つてきて飼養し、ここでは専ら眞圓眞珠の産出を計ることにした。

この五箇所の灣たる、規模は相當に廣大で、水深も適當で、形勝の一區であるが、しかし英虞灣の如き古來眞珠貝の産地ではない。果してこれがその養殖に適良の水域たり得るかどうかは元より未知數である。ただ南を受けて水温が比較的高いし、それに鳥羽の灣でさえ眞珠の養殖に初發の光明を與えた先例もあるから、大丈夫だろうと考へて、ここに母貝の飼養を開始したのである。いままでもなく多徳島の場員も今はだいたい多くなつていたので、その約半數はこちらに轉住して新養殖場の作業に従事したのであるが、養殖場經營の最初からの體驗者たる幸吉は、卒先來つて自ら陣頭指揮に當らねばならなかつた。幸に多徳と五箇所との間は、陸路はやや遠くかつ難路であるけれど海路は暫時外洋へ出るだけで、大體は灣から灣を傳つて通うことができるので、發動機船で常に往反していた。かくて五箇所養殖場も陸上の新設備は次第に整つてきたが、海中に飼育した眞珠貝の成績は果してどうであろうか。明治四十三年の冬まず試験的に若干採取してみたところ、残念ながら、そのできばえが餘りかばしくない。しかしこれは最初のこと、萬事手配に遺漏もあつたであらうからと、更に研究を加えて今年待ち、翌四十五年の冬に再び試験的採取を行つて吟味したが、やはり結果は面白くない。しかも幸吉は少しもひるまず、ますますその力を兩養殖場に打ち加えた。その頃かれが現場から東京の娘にあてて送つた手紙を見ると、當時の様子が手に取るようにしのばれる。

拙者三度梅干を用い居候。毎日サンマと煮みそ、ミカン是一個も口にできず、菓子少しもなし。但し食事は三回共四杯すつ。間食は一切せず。

午前五時半に起き、海水浴をなし場内一巡。七時朝食をなす。

百州人の海女と場員・大工・土方等合計二百餘人の者共、主人のニコニコ顔を見ては働かすには居れず、日々の仕事の見込など尋ねてやると皆喜ぶ。ユルユルやれと、十二月一日よりは朝も三十分おそく仕事にかかることとし、仲々に人氣よし。

場員の食事は一日に一回は魚類、その他注意をいたし、大勢の者和氣アイアイと働き居申候。

世界の眞珠翁たる者萬事に注意油断なかるべし。場内の改良は一月に池田・齋藤・小林など共に相談の上文明的改良可仕候。一年の三分の一この養殖場に滞在すれば、ザツト見渡しても一年に十萬圓は利益あるべしと存じ候。

廿九日頃五箇所灣に來り、一通り見巡り、種々注意を興えて一寸一服。五箇所灣は廿八日より採取、十二月廿五日限り本年分しめ切り可申候。玉の光もよし。昨年よりは上出來。

この事業は玉の光と玉の大なると、數の多く出來ること大切。眞丸眞珠も澤山出來るは五七年先きの事。今日はまだ半圓眞珠も大切の時期也。拙者の身體の丈夫は何程考へて見ても必要を感じ申候。

これは大正元年十一月二十七日付の手紙であるが、かれは自分では世界の眞珠翁と書いている。さらに翌十二月二日付のものには

ミソとサンマで丈夫、別段申す程の事も無之候。不動様の瀧の水の多くなる様いたし度候。

本年は昨年に比し今日までの試験では上等に有之候。五箇所灣に事業開始以來の安心に有之候。ひと頃は職員一同は不得已五箇所灣を捨るの外無しとまで申したるに、本年は決して左様な言を用いるものなし。英虞灣同様の收穫を見ることが成るべし。前途有望。不動様のお陰もあらんか。

實は拙者も四十三年の赤潮の時に三・四・五・六の數個月滞在、四十四年は十・十一・十二の三個月滞在、随分心配したる處に有之候。然るに本年は當地に來り試験採取をなしたるに、各所共上々の出來。天は幸吉を見離さず、愈々明二年より豫定の收穫を得ること間違無之候。英虞灣同様に御座候間御安心被下度候也。

不動参りの歸りに取りたるもの二三葉送り申候。

十二月二日

御 木 本

とあり、珍らしき草の葉が四五枚同封されてあつて、かれの人間味が現れている。ことに最初の二年や三年は成績が不良で、五箇所灣は捨る外無しとまで進言した職員があつたことは、この手紙で

も判るが、それに屈せず腰をおちつけて進んで行くところに、かれの面目がある。

もつとも、この頃の幸吉は五箇所の経営のみに没頭していたのでなく、五箇所と多徳を掛持にして、向うに十日こちらに二週間と兩養殖場間を往返して、萬事の指揮監督に當つていたのである。五箇所は創始も新しく用事も多いが、多徳もこの頃は名士の來訪觀覽漸く繁く、場員のみならずおおくわけに行かなかつたのである。そしてこうした來賓の歡迎についても、かれはすこぶる力を注ぎ、時には思い切つた豪華を展開させたが、しかしそれが済むと直ぐ勞働着を着た氣持になつて働く。大正二年一月八日に、多徳島で珍らしくも風邪で引こもつてゐる幸吉を訪ねた三重日日新聞の記者は、次の如くその所見を報道している。

風邪に引こまれる翁を強いて煩わすべく室に訪えば、意外の感に打たれるものが多い。周圍十丁の小島とはいへ、冒險的にしてしかも國家的なるこの大事業を遂行せんがために、廣い家屋二十餘棟を建て連ねたる間にありて、翁の起臥せる室は、いわゆる應接室の二階に過ぎなかつた。しかもその二階はガラス戸を閉切りたるのみにて、土壁を裂して風を漏らす有様で、何等耳目を喜ばすべき設備もない。この質素な室に横される風邪の翁やいかにと見るに、粗末なる木綿のフトンにくるまつて、漸く寒をしのぐに過ぎず、傍らに脱ぎ捨ててある翁の衣服はと見れば、これまた綿服僅に一枚に過ぎぬ。

富んでおごるは人の情である。おごるも人が異とせざるは通例である。然らば神明の浦に海上王島を占むる眞珠王は、定めし美姬を擁して敦奇の限りを盡くし、せい澤の極を致し、人をして羨望に耐えざらしむるものあるべしと想像し得ざるでもない。しかも事實は全くこれに反して、かかる室に起臥し、かかる衣服に甘んじ、僅に潮風黒き海女二人を給仕に使つて座右の便を補わしむるに過ぎない。翁の精神は抑も何を以て精神とするのであろうか。

しかも大正二年五月二日に幸吉が五箇所から出した手紙を見ると、どこまでも樂天的・希望的な態度と、あらゆる困難や支障を物ともせず、一難を経るごとに一倍し來る勇氣とを以て縦横無盡に前進する、さつそうたるかれの風姿を想見せしめるものがある。

百姓の春・秋と眞珠屋の五・六・七月とは他の事など顧る暇無し。四十一年九月以來當場は金を入れるのみの處、本年十二月より毎年收穫を見ることとなる。實にこの事業は氣長なものに有之候。兩灣を經營せは、被害あるも今日までの如き心配は無之候。半圓眞珠は一通り手配相付き申候。明大正三年よりいよいよ眞圓眞珠に幸吉が一身を投じ研究可仕候。六十歳までに一通り人間の義務を盡し一と切りと可致候。六十一歳以後は人間餘分の利益に有之候。

海女は當期より毎日四回入水を實行政し候。志摩國の一進歩に有之候。米高の爲生活に困り、拙者も共々麥飯。金次郎（二宮）と同級に進むは一通りの事にあらず。

この七八日來右のひざ頭に痛みを覚え注意を加え居候。店へ箱根カゴ一臺依頼いたし候。このカゴにのり道路の指圖をする事に有之候。この頃は下津浦より五箇所に達する道路の計畫中にて本日神津佐村高等小學校に行き、生徒の農舎の新築費中へ百圓寄附いたし、生徒一同敬禮を表し申候。校長は演説を依頼いたし候へ共、六十一歳まではと斷り申候。

海女には一週一回蓄音器を許可致し候。一回十枚、蓄音器（養殖場に備付けの）もここに至りて始めて功を奏し申候。

海女に演説したる事。四回入り（一日に四回潜水すること）の金錢大切なり。歸村の上は親の前に差出せと、主人より申渡されたと申せといひ渡し、一同満足。

海女は午前四時半起き、六時前出船。午後六時歸場。拙者は海女出船のまぎわに海水浴する。出かける海女も元氣づくならん。毎朝實によい心持ち。一同と共に麥飯もうまし。

麥飯で頭の痛み忘れけり。

宮川以南の金次郎に御座候。

二 日

御 木 本

かくの如くにして御木本眞珠養殖場の根據たる多徳島と五箇所灣とが完成したのである。しかしながら、この頃における世界の情勢を見ると、第一次世界大戦が始まろうとした直前のこととて、

通商の前途に警戒を要する點もあつたので、幸吉は眞珠の養殖の如きも、徒らに多量の生産を圖るよりも優良な品の産出に力を用い、寶玉としてこれを市場に提供するという百年の長計を立てねばならぬと感じ、斷然養殖場の縮小を思い立つた。

しかし昭和七年に第一次世界大戦も休戰條約の締結を見るに及んで、海外貿易の前途にも振興の氣運を認めることができるかと考え、ここに再び徐ろに養殖場の擴張に取掛かつた。ことに五箇所灣における試験によつて、英虞灣以外にもまた眞珠養殖の適處無きにしもあらざるを立證し得たからこれより次第に養殖の手を擴げて、度會郡の迫間灣・古和灣、紀州北牟婁郡の引本灣・九鬼灣、南牟婁郡の賀田灣・田邊灣等に及ぼし、さらに遠く長崎縣の大村灣、石川縣の七尾灣・沖繩縣の石垣島にまで、その翼を延ばし、また南洋委任統治のパラオ群島中のコロールにも養殖場を創めたのである。かくの如く全國諸地に初めて眞珠養殖場を創設したことは、實に他日種々の個人や法人によつてこれら各地に眞珠養殖事業の行われるに至つた先驅をなしたものに外ならない。

他方養殖方法の改良工夫もまた幸吉の絶えず苦心を注いだところであつて、その結果かれはイケカゴを考案し、さらにタンポと稱するものを案出したのであるが、それらの新方法は何れもこの五箇所養殖場で實施せられたものである。イケカゴとは生貝を活けておくカゴであつて、これにヒラカゴとタテカゴとの二種がある。ヒラカゴは上下四方共金網製の平たいカゴであつて、生眞珠貝を

その中に入れてカゴもろとも海中に入れるのであり、タテカゴもまた上下四方共金網製ではあるがその構造が長方形でやや大きく、その中をさらに金網で數段に仕切り、その各段に貝を入れた上、やはりこれを海中に卸ろすのである。卸ろすといつても海底まで沈めるのでなく、海面下適當の位置に吊るしておくのであつて、これを吊るす手段として考案せられたものが即ちタンポである。タンポとは縦横共に一定の間隔をおいて、多くの丸太を組合せて造つた長方形の深いイカダのようなものである。そして眞珠貝を入れてある上述ヒラカゴまたはタテカゴのイケカゴを海中に吊るすには、まずタンポを海に浮べ、次にイケカゴを一々その丸太に引かけ、そして適當の深さにおいて海中に吊るしておくのである。

こうしておけばタコの群が押寄せてきても、金網に妨げられて貝に食付くことができないし、眞珠貝は適當の間隔を以てカゴ中に並べられて海中に置かれてあるのだから、上下左右前後から海水中の飼料を取ることができ、また底に沈んでいるのでないから、ミルメ等の海藻に壓迫せられる虞も少く、栄養不良のため皮かくの脱落を見るが如きことも甚だ少い。そして一旦赤潮または寒潮の發生または襲來があれば、タンポのまま發動機船で引いて、どこへでも運び去ることができ、よほどの程度まで被害を避け得るのである。けだし赤潮が発生しても灣内の全海面が一時におおわれることは、まず無いものであるし、またこれはズツト後の事であるが、大正十五年度の寒潮の如

く、英虞灣一面にみなぎることがあつても、タンポのままこれを他灣の養殖場に移すことが、今はできるよつたのであつたのである。かくてタンポ並びにイケカゴの構造及び實施こそ、眞珠養殖事業經營の上に眞に畫期的の發展をもたらせたものである。けだし従前は貝の飼養も採取もまた移動も、一に海女とその海上唯一の用具たる手桶とによる潜水によつて、辛うじて行われていたのに比し、今やタンポを單位とし、發動機船によつて容易に迅速に行われることになつたからである。

思えば、このイケカゴ・タンポこそ、數度の赤潮を始めとし、タコ・ミルメ・寒潮等あらゆる支障に對する幸吉が三十年間の悪戦苦闘の結果、案出せられたところのものであつて、今日では志摩一圓は言うまでもなく、およそ眞珠養殖の行われている處では、何れも皆踏襲している方法なのである。

## 一 貿易品としての御木本パール

イタリーのマルコ・ポーロが、その著ジバングの島の中にこの島はバラ色の大形真珠を多く産し、死人を火葬する時、必ずその口中に一個の真珠を含ませる風がある。

と書いてから、恐らく日本真珠の名は若干西洋人の口に傳つたようである。また千六百七十年頃インドにきていたフランスの旅行家セー・ペー・タバニールは、日本の真珠に關する話の聞き書をしてゐるし、千七百二十七年に出版されたイー・ケムベルの日本の歴史の中には、真珠を産する貝の種類と、その産地とを記しているが、しかしこれらの人達は日本真珠の優秀性やその産額の大きなこと等について、何等知つてゐたわけでもない。したがつて日本の真珠を實際において直接に西洋に紹介したのは、かのローマ法王廳に使節を送つた江戸時代九州地方の大名が、その贈物の一つとしてかの地へ持つて行かせたのが、初めであつたらしく、その中に立派な真珠のあつたことは、今もバチカン宮裏の博物館に所蔵されている文書の中に記されてあるようで、肥前大村の藩主は法王及びその側近者に一握ずつの立派な真珠を贈つて、かれらを驚かせたという話も傳わつてゐる。

しがしながら、三代將軍家光以來の徳川幕府の鎖國政策は、中國・朝鮮及び和蘭以外の海外交通を斷切つてしまつて、わが國の通商互市に見るべきものがなく、明治時代に入つて貿易が大いに盛んとなつてからでも、それは主として生糸・製茶等に限られ、真珠の如きは問題でなく、それが全國から海外に輸出する總額において僅々四萬圓を算するに過ぎず、それも中國・朝鮮に輸出するに止まり、かつその微々たる産額すら、長きにわたつて維持することが困難だとさえ見られたのである。これを特殊の國産品として弘く販路を歐米に開き、しかも非常な聲價を博して、今や世界各地に日本真珠の名を知らざる者無きに至つたのは、一に擧げて御木本幸吉の努力の結果である。

幸吉が日本真珠の聲價を海外に博したのは、始は主として博覽會への出品によつてである。それは明治三十七八年の頃から絶えず試みられて、しかも毎回必ず異常の好評を博し、審査の結果いつも最高の賞を受けているのであつて、その主な記録だけを擧げて左の如くである。

年 度	開 催 地	受 賞
明治三十七年	米國セント・ルイ萬國博覽會	名譽大賞牌
同 三十八年	ベルギー國リエージュ萬國博覽會	同 上
同 三十九年	イタリー國ミラノ萬國博覽會	同 上
同 四十一年	ロシア國萬國裝飾美術工藝博覽會	金 牌



同 四十二年	米國アラスカ・ユイコン太平洋大博覽會	名譽大賞牌
同 四十三年	英國ロンドン日英大博覽會	同 上
同 年	チリ國萬國博覽會	同 上
同 年	ベルギー國ブラツセル萬國博覽會	同 上
同 四十四年	イタリー國トリノ萬國博覽會	同 上
大正 四年	米國サンフランシスコ萬國博覽會	同 上
同 十二年	南米ブラジル萬國博覽會	同 上
同 十五年	米國フィラデルフィヤ萬國博覽會	同 上
昭和 八年	米國シカゴ萬國博覽會	同 上
同 十四年	米國ニューヨーク萬國大博覽會	同 上

右の中、眞珠の出品陳列が大いに觀覽者の眼を驚かせて、全世界に傳えられた著しい事實について、若干の記述を加えると、明治四十二年シャトルで開かれたアラスカ・ユイコン太平洋大博覽會における御木本パールパールの出品に關し、同年六月十六日のシャトル郵便報知新聞は、日本からの出品を批評紹介した記事中に、次の如く言つてゐる。

多種多様な出品中最も多くの興味をわれらに與えるものは、日本館の中央に配置せられた養殖

眞珠及び金銀その他の珠玉で加工された出品で、その製作は善美を盡して東洋美術の精粹を發揮し、専ら世の嗜好に適する最新流行の製品である。その出品価格は五萬ドルであるが、中にも養殖眞珠こそ、われらが最も深く注意すべきものの第一であろう。その養殖の業は、あたかもわが米國においてキャベジまたはポテトポテトが盛んに栽培せられ收穫せられている如くに、最も確實な結果を以て日本人の手に成功せられたのである。養殖眞珠は人工を以て産出されたもので、植物の發芽成育する如くに眞珠貝に種子を刺植し、培養生産せられたものである。

日本政府はこの業の創始者で、また唯一の經營者たる御木本幸吉氏に、海岸の大面积を供給し、かつこれに專賣權を與えて、その事業を保護している。同氏の眞珠養殖場は、日本の西南海岸五箇所灣内及び英虞灣内にあつて、延長五百海里にわたり、これが培養に従事する人員五百人を使つて、年々多額の眞珠を收穫しつゝあるという。

その翌年ロンドンで開かれた日英大博覽會は、わが國としては、これまでかつて無かつた大規模の外國博覽會であつたに拘らず、所期の成功を収めることができず、むしろ失敗であつたとさえ言われたが、しかしその水産部に出品した眞珠及び眞珠養殖場模型は、褒賞授與式において名譽大賞牌を得たのである。その眞珠製品に關して、同年六月廿六日の神戸又新日報は左の如き報道記事を掲げている。

四十七號館には御木本幸吉氏の出品にかかる有名な十萬圓の眞珠の唐團扇がある。八角みこし形陳列館の正面に安置せられ、自動機によつて絶えず回轉しているのであるが、その右の方には一連六千圓のネックレスをかけ、また左の方には一個二萬圓の大眞珠が陳列せられてある。八角の他の面は日本四季の風物を現している。即ち四季おりおりの花を出して、これに種々の鳥を配し、これら花鳥の適はしき部分にそれぞれ眞珠を充てている。この外、刺しゆうに眞珠をちりばめた二枚折びようぶをも出品したが、刺しゆうに眞珠を應用した製品は、世界において、これが最初である。

大正十五年フィラデルフィアの萬國博覽會で呼び物となつたのは眞珠塔である。これは古代日本の美術をしのぶ大和法隆寺の五重塔をかたどつたもので、塔身の高さ二尺四寸、基部一尺六寸、合せて四尺の高さと、三尺三寸四分の幅とをもち、朱塗の臺上に立つている。塔身はフィリピン産のチョウ貝で造つて、眞珠と白金とをちりばめたもので、これに用いられた眞珠の数は、養殖眞珠二十萬千二百七十個、天然眞珠二萬九千二百七十個、白金五十五匁、その製作に五個月と延べ七百五十人の職工とを要し、塔の時價七十萬圓と稱せられた。でき上がった時にまづ皇后陛下の御覽を仰ぎ、また一般の觀覽に供し、しかる後フィラデルフィアへ發送せられた。

昭和八年やはり米國シカゴの萬國大博覽會に陳列したジョージ・ワシントンの住家の模型も、ま

た異常の好評を博したものである。これより先、故ウイルソン大統領夫人が來朝して多徳に幸吉を訪ねた時に、携へ來つた土産品として、ヴァーノン山下にあるワシントンの住家の模型をかれに贈つたことがある。それで、これを模して造つたのであつて、骨組は南洋産の白チョウ貝で造り、間口一尺六寸、奥行八寸、高さ一尺八寸、原物の六十分一で重量は六貫目、これに大小二萬四千三百二十八個重量三百匁の眞珠をちりばめたもので、時價五十萬ドル、博覽會閉館後は駐米大使出淵勝次を経て、ワシントン市の博物館にこれを寄贈した。

さらに昭和十四年ニューヨークの萬國大博覽會に出した自由の鐘の模型に至つては、さすが英雄壯美をほこる米國人にも、全く驚異の眼を見張らせたものである。これはフィラデルフィアの獨立記念館に保存されてある原物に據つて模造したもので、材料には南洋産白黒二種のチョウ貝を用いて原物の三分一大となし、高さ一尺二寸、口徑一尺三寸、その置臺は高さ三尺の漆塗である。これに使用した眞珠一萬二千二百五十個、ダイヤモンド三百六十個、純銀四貫五百匁、時價一百萬ドルである。同博覽會の日本館内に陳列せられて呼び物となり、多くの新聞・雑誌は皆筆を揃えて稱揚した。

以上は博覽會への出品について著しいものを例擧したのであるが、これと同時に、直接の商取引によつてもまだ販路の擴張は試みられた。最初は外國に店舗を有するわが國の商館及び横濱・神戸

等にある外國商館に委託してなされたが、やがては世界寶石取引の中心たるパリ・ロンドンの寶石業者、及びその代理者または仲買人として、わが國に來往する外人の手を経て行つていたのである。しかし、こうした代理者または仲買人の介在する限り、常に利益をそれに取られるばかりでなく萬事につけて制ちゆうを受けねばならず、とうてい思うままに販路を擴め難き憾みがあつた。その上歐米における博覽會等への毎度の出品によつて、御木本パールの聲價が次第に外國人の間に高まつてきたから、直接海外に取引を開始して十分に販路を擴めることの有利なを感じたのである。それには先ず視察員を派遣して、むこうの商況を取調べる必要があつたので、明治三十八年五月セントルイ萬國博覽會への出品を機會に、店員齋藤信吉を米國に遣わし、約一個年かの地に滞在諸方を巡歴して商況を調査させたのを初めとし、同四十一年四月にはさらに歐米の商況並びに博覽會の事に最も精通せる店員小林力彌を英國に遣わした。その出發に際し、かれは小林に現金二萬圓を授けて曰く、この金の續く限りユツクリと向うに落着き、そして従前通り仲買人を経て眞珠をさばくか、或は支店か代理店を設けて直接に賣るかについて、考えを立ててきてくれ給えと。この一言以外何等の期待もかけず、何等の制約をも與えなかつたのである。小林はロンドンを根據としてヨーロッパの主な都市を巡歴し、またアメリカにも渡り、在外四個年の後明治四十四年九月に一先ず歸朝したのであるが、その報告によれば、歐米における御木本パールの賣れ行きは好成績を示

し、今後ますます需要増加の傾向も歴然たりとのことであつた。ここにおいてか幸吉は意を決してロンドンを始めパリ、ニューヨーク等に支店または代理店を開き、外國人に對する直接販賣の一路に鋭進したのである。

しかも幸吉自らは多徳島や五箇所灣の養殖場にあつて、眞圓眞珠の生産に餘念がなかつた。大正二年十二月九日に五箇所から出した、かれの手紙には左の如く述べられている。

養殖場の空氣溫度實に長命するより外なし。東京にありては鼻の穴黒くなるが、ここでは毎朝海水に入り、食事する時は、何とも言えぬ心持よろしく候。

ロンドン・パリ・ニューヨーク・大阪・東京などの事思ひ出し、仲々樂みの事に御座候。地球の上は全部手を付け候。困難の中に整理せば何とかマトマリ可申候。東西七八種の新聞紙で地球の上の事はヨク分り可申候。書物でも人の讀み方による。普通は新聞を讀めば世界の事は分るはず。あい子も常に新聞雜誌を讀むことオコタル事ナカレ。

十二月九日

御 木 本

前にも述べた如く、毎回異常の好評を博した博覽會において御木本パールが、ますます廣く知れ渡つてきたと同時に、東京の本店を始めロンドン・パリ・ニューヨーク等諸支店の經營もまた日を追つて盛大に赴き、やがて歐米諸國において、眞珠といえは御木本を、また御木本といえは眞珠を

口にせざる者なきに至つた。がしかし、これは決して單なる廣告展示の賜ではなく、實は幸吉が堅い決心を以て良質高級の品のみを販賣し、劣等の品は惜しげもなく皆焼き棄ててしまつた商策の結果なのである。これについては興味深き話がある。當時わが國第一の實業雜誌であつた實業の日本の記者が、次の如く書いてゐる。

御木本氏の店に眞珠を買いにやつてきた外國人に、かれは一應養殖眞珠を説明した後、私共の店では選別に選んだ高級品だけを市場に出し、劣等品は焼捨ててしまひますと、そこにあつた眞珠の下級品を無造作に手につかんで、アレというまにストープに投げ込んだ。御木本の眞珠がますます海外で好評を博し始めたのは、眞珠でストープを煖めてからのことである。

これは事實であつて、この記者は或は多徳の御木本眞珠工場を目撃した人であるかも知れない。あの眞珠工場では、産品に對して嚴密な検査を加え、劣等の品は皆焼却してしまふのである。御木本パールが全世界で信用を得るに至つた因由は、眞珠塔でもまた自由の鐘でもなくて、實は良質の商品は最良の商略であるという、平凡な御木本信條そのものであつたのである。

かくて御木本パールの名は歐米社交界の呼び物となり、わが國の外交官達は、御木本眞珠養殖場を自ら知つておく必要があるに至つたものと見え、かれらは任地に出發する前に、たいていは都合をつけて御木本パールの養殖場を訪ねるのを常としたのであつて、養殖場の來賓芳名録が、いかに

多くの外交大官の自筆を載せているかを見ても判かる。また外國人で派遣・觀光・視察・漫遊等で日本に來た人達は、なんとかして御木本眞珠養殖場を觀覽せんことを切望しない者が、ほとんど無い有様であつて、多徳や五箇所は、かくして實に御木本パールのために、わが日本の名所となつてゐる。

昭和二十二年八月十五日から、わが國の貿易が再開せられたので、これが記念郵券が逓信省から發行せられた。その記念郵券には、わが國の主要貿易品が五種まで圖示されているが、眞珠は實にその先端を飾つてゐるのである。

## 一二 豪快に終始した中國巡遊

貿易によつて國富を増進せんとする幸吉の素志は、眞圓眞珠の完成を一期としていよいよ有力に實現せられ、ロンドン・パリ・ニューヨーク等に支店を常設して、直接に歐米の天地に雄飛せんとしたことは、前節所述の如くであるが、しかしそれよりも手近な東洋こそ、まず活躍すべき世界であると考えて、その商況を視察すべき必要を感じ、大正五年十月十五日自ら中國巡遊の途に上つた。

元來中國に渡航しようとの企圖は、はるか以前の明治十九年かれが二十九歳の時、阪神地方を視察した際上海に赴こうとし、しかも同伴者の不同意のため果し得なかつた時に存したのであるが、今やその專業たる眞珠の販路擴張のために渡華の事は決せられて、壯年時代の希望が達せられたのである。

しかし海岸に生れ海産物を取扱い、自ら大海師だとうそふいて海中の孤島にたてこもり、眞珠の養殖に従事していながら、實は生來船には至つて弱い幸吉であつた。かつてコンブの精製を企ててその生産情況を視察せんがため、北海道に赴いた時、金華山沖で暴風に遭つて船は難破せんばかり

の慘狀を呈し、命カラガラ函館に上陸したことがあり、またボラを東京に運ぶ途中相模なだで暴風に遭い、伊豆の下田にとつて返したこともあり、相當に苦がい試練は積んでいるが、どうしても船ばかりは強くない。それで、こんどの航海でも海路の短いのを選んで、朝鮮經由の線を取つたが、ついに船酔をも感ぜずに元氣で釜山に着いたので、直ぐ兒孫に打電して

船には酔わず、次はアメリカに行く。  
と知らせた。

京城から奉天、それから大連・旅順・天津と、朝鮮から中國の東北諸州に互つて主な諸地を巡歴したが、四度も五度も全世界を股にかけた店員小林力彌が隨行者であつたから、豪快な視察を續けた。最初出發の際幸吉は、珍らしくえん尾服とシルクハットを用意させたのは、その旅行中に明治節や立太子式があるはずであつたからである。そして當時中國の首府であつた北京に滞在中の十一月三日に、同地の日本公使館で開かれた明治節夜會に招待を受けたので、かれは故國の海角で木綿着物と雜木下駄で自然に鍛えた健體をば、今日こそ携え來つたえん尾服に包み、潮風にやけた赤ら顔に新らしきシルクハットを頂き、胸に緑じゆ喪章を飾り、二頭立の馬車を驅つて公使館の表玄関に參着したのは、ヘソの緒切つて初めての事であつた。

しかも、この旅行中かれが膚身離さず持つていたものに、一つの紙入れと三つの品物とがある。

その三つの品物の一つは、古色そう然たる矢立である。これは今の萬年筆にでも當るものであろうか、明治以前わが國の商人が必ず腰にさしていたものであるが、かれは、この矢立こそ商人の杖ともいうべきものだとして、ズボンのかくしに入れていた。その二は小形の算盤で、かれはこれこそ商人の魂たといつて、上着のかくしに藏していた。その三はタヌキの彫刻物で、宇治山田の彫刻家正直といふ人の刻んだものである。幸吉は、昔からタヌキは人を欺くものとされているが、正直という名の人がこれを刻んだのが面白い、商人は、もうけるために人を欺くといわれるが、自分は正直を守つて、しかももうける積りだから、正直の刻んだタヌキがこの主義を象徴しているといつて持つてゐる。そして船の中でも車の上でも、旅館にいても訪問の時でも、これら三つを忘れたことがない。人に面會している際にも往々タヌキを示し、私にはこれが従つてゐるから、まちがいが無いといつて大笑したり、話に興が乗つてくると、ズボンから矢立を取出して振り舞わし、口角沫を飛ばして高談放論することもあるが、世界的發明家にあり勝ちな奇行として許されていた。但し、かの紙入れの中には何が入れてあるかに至つては、たれ一人見た者が無い。由來親孝行のかれたから、亡母の寫眞を抱えているのだからとか、眞珠のすばらしい玉が隠されているのだからとか、近親者の間にも様々のうわさを生んだが、それが伊勢神宮の御符であると判つた時に、いかにも、敬けんなかれたからと、皆がうなずいた。

幾千年の治亂興亡を背景にもつた中國の人文地形には、さすがに興味の深いものがあつた。奉天に清朝の北陵を弔し、八達嶺に萬里の長城をながめ、明の十三陵から北京の宮殿、遼河の平野を見さらに南して黄河は鐵橋で渡り、楊子江は汽船でさかのぼる等、見聞を廣めたところが少くなかつた。楊子江を下る船中で偶然にも、ヤハリ中國漫遊中の有名な佐々木安五郎、早く中國から南洋にまで經りんの手を延ばしていた大谷光瑞の兩氏と會し、いづれ劣らぬ大言壯語家とて、互に長廣舌を弄して大いに船中をにぎわしたものである。

が最も幸吉の興味をひいたものは、中國における眞珠の取引であつた。この國の寶玉商は、東インドや南洋方面の諸地から直接に眞珠を買集め、毎月市場を開いてこれを賣りさばくのであり、その賣買の最も盛んなのは上海で、ここでは毎日三個所で眞珠の市が立つてゐた。この實況を観察した幸吉は、その賣買に外國人が一人も加わつていないのを見て、直に意を決し、この月の十五日を以て、上海南京路に御木本眞珠店の支店を開くこととした。

この支店の開業には、眞珠を取扱う中國の商人百五十人を日本クラブに招待して披露宴を催したが、これに對して中國側もまた、答禮の宴を二日にわたつて開いてくれた。ところが、この宴席に侍した中國の藝者八十餘人が、腕輪でも首輪でも、また頭といわす耳といわす、皆眞珠を以て飾りまとつた衣服にも隨所に眞珠をちりばめてゐるのを見て、さすがのかれも驚かずにはおられなかつ

た。それはいかに安く見積もつても、一人に時價三千圓は下るまいから、總計二十四萬圓の眞珠を見せつけられたわけである。この一事を以てしても、中國婦人の装身に對する嗜好の高尙にして多方面なのを知るに足るべく、機敏なかれは、早くもここに對華商業の一つの捨石を置こうと考へた所以である。二日目の宴に幸吉は、中國銀貨の十錢二十錢のものを澤山ポケットに入れて、招宴に赴いた。そして藝者達があいさつにくる毎に、いと無造作に手づかみにして、それを遣り遣りしたので、これには一同皆驚き、かくては幾らの銀貨でも足らなくなるであろうと隨行者も心配したのである。しかし實は、かれは前日に銀貨の握り工合を試み、およそどれ位あれば大丈夫と、あらかじめ目安を立て、相當量の銀貨をポケットに用意して行つて、この豪華版をくり擴げたのであつた。

開店後まもなく、この上海の店が盜難にかつた。店の金庫が切り開かれて在庫品が全部盜まれてしまつたのであるが、直ぐ千圓の賞を懸けて新聞に廣告を出した。七八日を経て、ぞう品が張園という公園の池の中から發見され、工務局の手で盜賊が一ロシア人であることが判つたが、いち早く國外に逃走してしまつたため捕えることができなかった。御木本眞珠店盜難のことが上海で名高い話題となるや、この地の某金庫店が新聞に廣告を出し、御木本眞珠店の金庫は、庫側が薄かつたため切開かれたが、當店の金庫は、庫側が厚いから切取られる處が無いと書き立てたので、その

金庫がよく賣れたということである。かくて上海の店もまた開店早々有名なものとなつた。

中國の視察を終えて歸朝した際、幸吉が中國服をまとい、中國帽を頂いて、東京驛のブラットホームに降り立つたのには、出迎の人々一驚を喫した。元來衣服には趣味を持ち關心の深いかれのことであるから、中國服がよほど氣に入つたためであろうと思つて、ある人が尋ねたら「イヤよそで商賣するには、その生活習俗に親しまねばならぬことを、店員達に知つてもらおうと思つてネ」と答えた。

### 一三 要領のよかつた米歐視察

「船には酔わず、次はアメリカに行く。」と打電して朝鮮に渡り、中國を視察して歸つた大正五年から、春風秋雨十年の月日を多忙な養殖事業に送つた幸吉は、ヤハリ眞珠の販賣を全世界に擴めるには、米歐の商況を目撃しなければならぬと考え、大正十五年に至つて渡米の旅に立つた。この年の六月からフィラデルフィヤで米國獨立百五十周年記念としての萬國博覽會が開催せられ、そこへ日本御木本眞珠店からは、實に華麗けんらん人目を眩せんばかりの眞珠塔を出品し、しかも、それが世界各地からの陳列品を壓倒して、スベラシイ人氣を博していたが、その評判のさなかに親しく米國商況の實地を視察するのもまた一興と、例の豪壯な意圖からこの度の旅程はくり擴げられて行つた。

來年七十歳という老體を提げて初めての渡米とは、壯圖である快舉であるといつて、日本貿易協會の連中が發起して、十月十四日にその送別會を開き、同會長森村市左衛門や澁澤榮一などの壯行激勵の辭があり、前大藏大臣井上準之助は、かれにこの行を米國に止めず、世界寶石の市場たるロンドン・パリに延ばして、御木本パールの特徴を地球上に發揮せられたいと勧めた。

その翌々十六日午前九時から、東京驛頭には朝野の名士、實業界の巨頭等數百名が見送りに馳せつけたが、かかる間に、霜降ラクダの外とうに山高帽という出立ちの幸吉は、見送の人々とあいさつを交わし、人波を泳ぎ分けつつ石川千代松・宮島幹之助兩博士と共に、九時五十五分の列車で横濱に向つたが、横濱の岸壁にも多くの人々が待つていて、大洋丸に乗込むかれを見送つた。見送の人にかかれは

年は取つても、この通り達者ですから心配はありません。ことに醫學博士も一緒ですから安心なものです。歸朝は來年の半ば頃になりましょうが、歸つたら何か視察談ぐらひは致さねばなりません。ますまい。

など齒切れのよい口調で語り續け

私が死んだ時に、こんなに澤山の見送をして頂けるか知ら。

と冗談を飛ばして見送者を笑わせ、はつらつたる元氣を示していた。同行の石川・宮島兩博士は四五度も歐米に往返した人々である。この日堀越商會長堀越善十郎も同船で渡米したのであつて、船中の食堂では、御木本と堀越とが代るがわる食卓の首座についていた。

航海は極めて平穩であつたとみえ、出航後三日目の十八日に無線電信で

初旅にポテト・トースト波の上



との俳句を送ってきたので、老體を氣づかつていた親族縁者一同も、安どの胸をなげおろした。

やがてサンフランシスコに着いてアメリカ大陸の土を踏んだが、普通の遊覽客なら旅館に着いて一息入れると、市内著名な場所でも見て歩くのであるが、かれの行き方は違つて、先づ訪れたのは大學その他の研究所であつた。もちろんサンフランシスコだけでなく、どこへ行つてもその地方第一流の大學を訪問したのであるが、到る所で著名な學者から眞珠の發明について激賞を受けた。ちようどフィラデルフィアの萬國博覽會に出品した養殖眞珠が、最高賞たる大賞牌を受けた上に、天下晴れて御木本パールという榮稱を冠せられて、好評眞にさくさくたるものがあつた時も時、その御木本パールのヌシがやつてきたというので、行く處泊る處で全く文字通りの歡迎攻めにあい、時には日本人の發明力は驚歎に値するなどと、ヤタラと賞めたたえられて、却つて面食らつたことも一再でなかつた。とにかく三十餘年間の辛苦も立派に花が咲き實を結んだような氣がして、かれ自らもまたすこぶる得意であつた。そして、しばしば催してくれた各地の招待會等にも出席し、こちらからもまた大統領を始めとし學者・實業家・發明家・政治家と、有名な人物の許へは遠慮無く訪ねて回つた。もちろん澁澤榮一等米國に信望厚き人士の紹介があつたからでもあるが、米國の多くの名士が、いかに厚く幸吉を歡待したかは、案内役を勤めてくれた日本人達も驚いたほどであつた。

幸吉が滯米中の活動には二つの着眼點があつた。一つは眞珠についての調査であり、二つは發明に關する見聞であつた。前者から一言すると、さすがに幸吉は、事眞珠に關する話については用意極めて周到で、勉勵で、少しも努力を辭さなかつた。當時米國では早くも御木本パールのことを聞き、これに倣つて眞珠の養殖をしようと企てる者もあれば、直接かれに協力を申し出る者もあり、中には竊にこれを模倣しようとする者さえも現れ、またインド人とフランス人との合同に成れる一商店の如きは、天然眞珠の中に故意に御木本パールを混じて賣つて、約一千万ドルをもうけたこともあつた。しかし眞摯に養殖を圖り、或は合資協力を申し出た等の向きに對しては、かれは決して指導を惜まなかつたのである。一例を挙げると、北米合衆國水産局の技師で特にカキの専門家たるガイドソフと會見した時、眞珠貝の養殖に適する海水の水深・水溫・比重及び養分等に關して種々の質問を受けたが、幸吉は極めて明快な解答を與え、自分は詳細は總て技師に命じて調査させるのであるが、大體の見込は多年の體驗に基づく直覺によつて見當がつくと答えた。どうして判るかと思ねるから、かれは、例えば水溫は飛込んでみれば判るし、比重はなめてみれば判るし、養分は暫時見つけていると大抵は判ると言つたので、ガイドソフはなる程とうなずき「長い間の體驗というものはいらぬものだ。」と言つた。かくて南方フロリダ州の海岸マイアミ地方や、メキシコ灣に臨んだタンパ地方にまで行つて自ら調査し、またミシシッピ河に産するミヅ貝についても研究を加え

たが、おおむね水質が清きに過ぎて栄養分に乏しく、真珠稚貝の産卵には適しないことが判つた。しかし日本から母貝を持つてきて養殖するだけなら、あながち不可能ではないと考えられたから、歸朝の上さらに熟考することにした。

次に發明に關する見聞についてもまた、かれ一流の活動的態度が遺憾なく發揚せられた。世界的細菌學者野口英世が當時ニューヨークにいたが、幸吉はこれと一見舊知の如く、しばしば將ぎを戦わせて互に勝敗があつた。有名な鋼鐵王ゲリーから食事に招待せられた時のことである。ビーフステーキが出た際主人が

これは米國で最も軟い肉ですから、七十歳の御老人でも召上がれるでしょう。  
と言つてくれたところ、幸吉は直ぐに

イヤこれは肉が軟いばかりか、ナイフの質が米國で一番良いからですよ。  
と答えたので、さすが製鋼界の第一人者たる主人も大いに喜び、かつ深く敬服した。かれが當意即妙、名句が口を衝いて出るのは、おおむねこの類である。

世界における百貨店の創始者ワナメーカーは、黒真珠を五十個も集めてネクレスを造り、百萬ドルの價格を付してこれを店頭飾つてある。その五十個の黒真珠は粒毎に多少色彩を異にし、これを集めるのに二十個年を要し、これをネクレスに完成する細工にも數年を費したといわれるほど

精巧なものである。ワナメーカーはそれほど濫い趣味を真珠にもつている人であるが、御木本パールに對しては、その支配人が反對したに拘らず、その店に置いて販賣方を手傳つてくれたのである。また盲腸炎手術の達人で、その手術で千萬ドルをもうけたといわれているパツカードに、真珠貝に加える手術について研究を委嘱したのも一奇であるが、最も人の興味をひくものは幸吉と發明王エジソンとの會見である。

それは昭和二年二月十六日イーストオレンジのエジソンの事務所において行われた。この日齋藤總領事と田島三井物産會社支店長とが幸吉に同伴し、幸吉からエジソン翁には御木本パールのネクタイピンを、同夫人には金銀を象徴する黄白二粒の御木本パールを贈呈した。すると翁はこれを受けてジツト視入りながら

オオこれが養殖真珠か。どうしてどうして、これは養殖ではなく、眞の眞珠だ。  
と首を傾けて感歎する。そして

私の研究所で試みて、どうしてもできなかつたものが二つあります。一つはダイヤモンドで今一つは眞珠です。貴君が今、動物學上からは不可能視されていた眞珠を發明完成されたことは、世界の驚異です。

と賞めるので、幸吉は

イヤ貴君こそ發明界の月であられるとすれば、私は星の一つに過ぎません。

といえ、翁はいすから立上がり、手で顔をおおいながら

いな、いな。

と叫んだ。幸吉は日本から持ってきた澁澤榮一の紹介状を出して

澁澤さんは八十四歳で、貴君より四つも上ですが元氣なものです。貴君も澁澤さんのように、どうか、いつまでも御元氣で御研究をお続け下さい。

というと翁は

大丈夫。

と胸を一つたたいて

澁澤さんには、いつかお目にかかったが、なかなかえらい方ですネ。ボロ洋服を着ておられて見たところ五ドルの値打しか無いが、どうしてどうして大きいところがある。

と冗談をまぜて大いに賞めちぎる。三十分間も二人は楽しく話し合つて別れたのである。この會見後の幸吉を、ニューヨーク第五街の御木本眞珠店支店に訪ねたニューヨーク新報の記者は「機智に富んだ眞珠王」と題して、その談話を次の如く掲げている。

エジソン氏はわが發明界の王様ですから、この偉人の養殖眞珠に對する感想を聴取するのは、

大いに有意義のことと考へて訪問したのです。そして第一に私の敬服したのは、あれだけの大きな施設を、あの比較的少數の人で切り回しておられることです。わが國などでも、使用人を多勢使いながら、能率の上らぬ弊になやまされてゐる所も多いのに比べると、大變な違いで、すこぶる参考になると思ひました。次に八十歳の高齡に拘らず、事務所のある木製のイスに端然と腰をおろしておられる姿も、えらいものだと思ひました。白髮童顏のエジソン氏は、澁澤氏の紹介狀を讀み終つてから、私自身も先年拾收した貝がらを砕いて粉末となし、化學的作用によつて眞珠を製出しようと思へたこともある。と物語られ、君の名前と養殖眞珠の事業とに關しては、つとに承知していた。誠に驚くべき發明であり發見であると賞めて下さいました。しかし天然眞珠で無いから、必ず競争者の出現することを覺悟しなければならぬと、發明家に似合わしからず商業家のような着眼點をさえ話して下さいました。私はエジソン氏に向ひ、貴君が亡くなられたらワシントン・リンカーンと並べて、米國の三傑として世界の寶と仰がれましょう。私の生がいの中でも、初めて養殖眞珠の方法を見出した時と、初めてその眞珠を賣出した時と、そしてこんど貴君にお目にかかつた時と、この三つを以て永久に記念すべき愉快至極かつ最も意味深い歴史的事實と心得ますと語つたら、翁も感慨無量の表情で、イスから立上がつて喜んで下さいました。

と記し、最後に幸吉の話し振りに對し、東西の二傑はエジソンと吾輩であるという調子で、御木本氏は會見的一幕を語つたと結んでゐる。がとにかく世界の發明王と世界の眞珠王との會見こそ、極めて興味あるものでなければならぬ。

幸吉がエジソン翁の研究所を離れんとした時、翁は秘書に命じて自分の寫眞を持來たらせ、自らしよ名して記念にと贈られたので、かれはそれを持歸つて多徳の家の居間に掲げてゐる。昭和四年に米國の前大統領ウイルソンの未亡人が多徳に來た時、この寫眞を觀て尋ねたので、幸吉はイースト・オレンジの會見當時の話をした。未亡人が歸米の後この事を覚えていたとみえ、或日エジソンに會つたので多徳の話をしたところが、エジソンもイースト・オレンジに幸吉の來訪を受けた昔日の思い出などを語り、御木本を話題にして愉快に話し合つたと、同未亡人からの詳しい書信があつた。

ついでに今一つ後日談を附加しておく、昭和五年暮に、その年に採取した養殖眞珠中の逸品をかれはエジソン翁及び夫人に郵送したのであるが、時を経て翁の秘書から、それがまだ着かないかどうかと尋ねてきた。そこで幸吉は直に知人たるニューヨーク自然科學研究所長モリス・ホーランドに依頼して、ニューヨークの郵便局について調べてもらい、こちらは發送局たる東京中央郵便局の方も調査したところ、眞珠入り書留郵便物は確に先方に届いてゐるはずだと判

つたので、その旨先方へ申送つたら、やがて翁の秘書からてい重なわび狀がきて、翁への贈物の眞珠は研究所に届いてゐたのに、翁の自宅に配達せられなかつたため、このまちがいが生じたことが判明した。翁の病氣が重いと聞いた時も、幸吉は心を込めた見舞の電報を打つたのであるが、遂に再び起たなかつたのである。

米國における幸吉の滞在は七個月に過ぎなかつたけれども、この間かれは實に要領よき視察を遂げた。そしてその發明に對する眞の理會者を見出したのもアメリカであるし、ひろく實業人として企業家として、ほんとうによき友人を得たのもアメリカであつて、アメリカの視察旅行こそ、かれに取つて最も收穫の多いものであつたのである。

それから幸吉は太平洋を渡つて英國に向つた。日本を出發する時受けた井上前藏相の勸告もあり、旅のついでに戦後のヨーロッパをも一渡り見ておこうと思つたからである。七個月も米國に滞在しながらナイヤガラもランドキヤニオンも見物せず、眞珠の調査と發明の見聞とに忙がしき日を送つた幸吉のことである。ヨーロッパに渡つても、やはりその通りであつた。もつともロンドンやパリの目抜き場所だけは、見物といへば見物したが、それは寶石商店の有様を目撃せんがためであつた。博物館や研究所も訪ねはしたが、それも有名な眞珠を觀たり眞珠に關する研究を知らんがために外ならなかつた。しかし、あの大戰争のヤット濟んだ直後であり、その戰場であつたヨー

ロツバであつてみれば、實業上の見聞としてはアメリカで得たようなよい收穫の得られようはずがない。かえつてバカバカしいような事柄にも出會つたものである。ベルギーのブラツセルのフイリツプ會社で發明せられた器械は、天然眞珠と養殖眞珠とを實驗的に鑑別するのに百發百中だと聽かされたので、直ぐそこへ行つて、折柄持参した五個の眞珠を提出して實驗に供し、もし當れば二萬五千フランでその器械を即座に買おうと約束して、毎日行つてみたのであるが、試験に供した眞珠の中の一つが當つただけで、他は全部まちがつたから、當つた一つも全く、まぐれ當りであらうと大笑であつた。

パリでは後に述べるが養殖眞珠に關する爭議が、すでに四年の歲月を経て、大勢はもはや決してゐるのに、枝葉の問題でなほ繫争を續けていたのであるが、大局を見て取つた幸吉は、そんな細かいイザコザは一切パリの代理店員ポールに任せて自分は眞珠の調査に努めていた。オランダからドイツに入つたが、戦後疲弊のどん底にあえいでいたドイツでは、何ら得るところのあらうはずがない。スイスを経てイタリーに行つたが、ここは世界中でも日本のサンゴと共に御木本の半圓眞珠を初めて取扱つた店もある國だから、そうした店を訪ねて舊交を温めたり、サンゴに施す美術的加工を教える有名な學校を參觀したりした。

イタリーのナポリから日本郵船會社のはる名丸に乗つて歸朝の途にいたが、この航海もまた幸

吉に取つては最も興味の深いものであつた。というのは紅海からベルシャ灣・インド洋、それからベンガル灣にかけては、前にも述べておいた通り、古來眞珠の産地として名高い水域であり、現に世界の貝類を悉く調べてみても、眞珠の母貝たるアコヤ貝の産する處は、日本を除いてはインドとマダガスカルとだけであることは、かれが滯米中研究の結果明かにし得たところであつたからである。ベルシャ灣については、この旅行では日時の関係上よく調べることができなかつたけれども、紅海・インド洋・ベンガル灣等の情況は詳わしく研究することができた。そして貿易風の吹く水域の海岸では、一年中の或期間は風が強烈に吹きすさんで波が餘りに荒く、貝類を洗い去つてしまうため、眞珠貝の養殖などは絶対に不可能だということが判つただけでも、事業上には参考となるところがあつた。

インド洋航海中のことである。一日多くの船客が談話室に集まり、競馬に模した遊戯をしているのを見て、幸吉は自分は生きた競馬を演じようと、白い衣服をまといつて白馬に擬し、馬が驅けるように躍りながら、手を巧みに動かしてヒヅメの音を出したのであるが、その所作の巧妙なる、その氣合の壯快なる、どうしても七十の老人とは思われないと船中皆驚歎の眼を張つたといわれる。かくて昭和二年七月五日はる名丸は神戸に安着し、極めて要領のよかつた米歐視察を終えた幸吉は再び祖國の土を踏んだのである。滿一年にわたる長途の旅行中、一日も病臥したことがなく、神戸に

上陸後、新大阪ホテルの階段で足をすべらして怪我をなし、外科醫に二針縫ってもらつたのが、横濱を出てから鳥羽に歸着するまでの間に受けた唯だ一つの病氣といえは病氣であつた。

#### 一四 養殖眞珠世界的爭議の眞相

商賣がたきというものは、どこの國にもあるもので、しかも事業が競争によつて進歩するのは、世の常である。幸吉の發明した半圓眞珠の特許についても、これに反對してその無効を出願した者があり、終局の勝利を得るまでに、これが繫争は、かなり長きに涉つたものである。しかし半圓眞珠は、完全な眞珠ではなく、またその價格も安く、米歐の市場においても一種特別の商品として取扱われたから、取引に何等の問題をも起さなかつた。しかるに眞圓眞珠が養殖によつて完成せられて、天然眞珠と少しも異ならざる品として輝かしくも華々しく、世界の寶石界に打つて出るに及んで、それは寶石界を侵犯するのとして、ヨーロッパの天地に一大センセーションを巻き起したのである。大正八年に五箇所養殖場で採取した眞圓眞珠をば初めてロンドン支店に送り、天然眞珠より二割五分安い値段でこれを賣出した。これが、そもその起りで、ヨーロッパの寶石界や學術界は元より、そうした事に無關係な者までも好奇の耳をそばだてると、新聞紙は報道價値の最も大きなものとして、この世界的發明を書立てたのである。ことにかの地の眞珠販賣業者は、形状・色澤かゝり比重・硬度及び成分等の諸點に至るまで、天然眞珠と少しも異ならない養殖眞珠の出現には、驚

きの眼を張らざるを得なかつたのである。かれらは、この侵入者を目して自分等の營業を根底からゆり動かすものとして、反抗の火の手を擧げ、次第に種々の畫策をなすに至つた。ここに記憶せらるべきは、ヨーロッパにおける社交や流行の中心はロンドンとパリとであつて、寶石業者の如きも、その最も多くがここに居たこと、これである。

その上事情の悪いことには、昔ドイツのヘスリングが、半圓形の眞珠は養殖で造ることができるとけれど、眞圓眞珠に至つては、人爲では造り得ないと断定して、その意見を著書として發表してゐるし、事實また世界中だれ一人、眞圓眞珠を養殖して市場に送り出した者は無かつたのだから、一般からかかる反抗を受けたのは、凡俗の世界には已むを得ないことであらう。

何事にせよ一事を創始する者の等しく被むる受難であると言えよう。しかも天然眞珠でないのだから競争者が出ることは覺悟しなければならぬまいとエジソンも言つてくれた通り、こうした立場におかれて少しもひるむことなく、よくこれを耐え忍んで、先驅者の眞價を發揮し得る幸吉であつたのである。

この反抗運動の導火線は、ロンドンにおいて點ぜられて、それが當時世界流行の中心たりしパリの方へ移つて行つたのであるが、まず大正十年の五月四日のことである。午後三時版のロンドン発行のスター紙が

某商人が日本産の養殖眞珠をば天然眞珠として發賣し、それが驚くべき精巧な品物であるので切斷してみなければ見分けがつかない。このにせ物様の眞珠の出現のため市場は大恐慌を來しつゝあり。これぞ當地の寶石界をかく亂するものである。

といつた記事を掲げ、新聞賣子に大きな廣告板を下げさせて、夕刻ラッシュアワーのロンドンの町をば大いににぎわせたものである。スター紙はこれを詐欺事件とまで曲筆したのであるから、その日のロンドン、御木本眞珠店には、六七人の新聞記者が詰めかけてきて、右に關して種々の質問をなしたのであるが、サアこれからが大變で、事は一日と擴がつて行くばかりであつた。即ち翌五日から十五日頃まで、ロンドンだけでなく、全英國の各新聞紙は競つてこの記事を掲載し、是々非非の所論を掲げて、正にけんけんごうごうの有様であつた。

新聞紙の中でもタイムズやデーリー・メトル等は、さすがに事實を正確に傳え、眞圓眞珠は天然眞珠と性質上全く差異無きことを記し、したがつて天然眞珠と區別をつける必要も無きことを述べたのみならず、進んで御木本氏の偉大なる發明に對して、祝意を表したのであるが、他の二三の新聞紙の如きは事實を曲げ、養殖眞珠は偽眞珠であると傳えたのもあり、とにかく、この事が當時英國人の視聽をいかにさらつたかは、次の一事でも判る。それは、チョウド五月十日にわが國の皇太子殿下即ち後の今上陛下がロンドンに御到着遊ばされ、新聞・雜誌は競つて特別號を發刊したので

あるが、その特別號の中に三四ページの多きに涉つて、この眞珠事件を記載していたのである。

この問題は單なる一時の報道に止らずして、學者の間に眞しな研究の課題を投げた。オックスフォード大學のリスター・ジェームソン博士を始め、この方面の權威者達がおのその所見を新聞紙または學術雜誌の上に發表し、學問上においては、眞珠を造る刺激物が天然に生じたか人為的にさし入れられたかの相違を除いては、御木本パールは天然産のパールと少しも差異なきことを述べたのである。こうなると、これら兩者を識別し得べき何等かの方法が発見せられない限り、在來の天然眞珠の價值が下向し、その價格が低落して行くのは、火を見るよりも明かであるから、眞珠の販賣を業としている寶石商達は、自己擁護のために狂奔して、策謀施爲を至らざるなき有様に迫られて行つた。その結果かどうかは判らないけれども、ロンドン商業會議所では養殖眞珠をにせ物扱ひにし、養殖眞珠の出現によつて天然眞珠はその價值に何等の變化をも起すものにあらすとの決議をなし、かくして貴金屬商・裝身具商・及び寶石商等を保護するの途を計つた。しかし、これは事實を曲げて一時をこ塗しようとするものであつたから、かえつて識者の笑を買うに過ぎなかつた。そして天然産の眞珠と養殖のそれとの識別法に關して、種々の實驗が、或はX光線により或は偏光により、學術上しばしば試みられたが、いづれも失敗に歸したのである。その中において、直前に一言したジェームソン博士は實驗の結果、養殖または天然の如何に拘らず、不完全ながらも、眞珠

の生産地の識別に役立て得る一つの方法を公けにしたのであつて、これを日光紫外線検査という。しかし、これとても眞珠の天然と養殖との本質的差異を鑑別し得るものではない。かかる情況の下に事態は推移して行つたが、結局この兩者即ち天然と養殖との間には何等本質的區別の無いことが判つたので、この論争は終りを告げ、商人達もまた次第に鳴りを靜めてしまつたかに見えたが、餘波は海を越してパリへ移つて行つたのである。かかる間にあつて眞圓眞珠の價值を逆用し、かつ世上一部に、それを偽物とする宣傳のなお潜行しているのに乘じ、全然偽物たるいわゆる模造眞珠なるものをば、御木本眞珠だといつて販賣する者が現れたので、御木本眞珠店ではその一人を告發しその結果、今後かかる詐欺行爲をなす者は嚴罰に處せらるべき旨の判決を得たのである。かくて英國においては、幸吉發明の眞圓眞珠は、ようやくその價值を認められるに至り、そしてそれが世上にはやされた評判の大きかつただけに、御木本パールの名は發明者の名聲と共に廣く知れ渡つて行つたのである。

御木本パールの報道が當時世界流行の中心たりしパリの街上市をケタタマシク飛んだ最初は、ロンドンより一日後れの五月五日のことであり、そして諸新聞紙上において、穩健適正な記事と事實を曲げた報道とが相半ばしていたことも、ロンドンの場合と同じい。元來佛國にはダイヤモンド・眞珠その他の寶石を取扱う業務組合があり、巨資を擁して業界に君臨していたが、この組合の連中は



あるが、その特別號の中に三四ページの多きに涉つて、この眞珠事件を記載していたのである。

この問題は單なる一時の報道に止らずして、學者の間に眞しな研究の課題を投げた。オックスフォード大學のリスター・ジェームソン博士を始め、この方面の權威者達がおのその所見を新聞紙または學術雜誌の上に發表し、學問上においては、眞珠を造る刺激物が天然に生じたか人為的にさし入れられたかの相違を除いては、御木本パールは天然産のパールと少しも差異なきことを述べたのである。こうなると、これら兩者を識別し得べき何等かの方法が発見せられない限り、在來の天然眞珠の價値が下向し、その價格が低落して行くのは、火を見るよりも明かであるから、眞珠の販賣を業としている寶石商達は、自己擁護のために狂奔して、策謀施爲を至らざるなき有様に追込まれて行つた。その結果かどうかは判らないけれども、ロンドン商業會議所では養殖眞珠をにせ物扱ひにし、養殖眞珠の出現によつて天然眞珠はその價値に何等の變化をも起すものにあらずとの決議をなし、かくして貴金屬商・裝身具商・及び寶石商等を保護するの途を計つた。しかし、これは事實を曲げて一時をこ塗しようとするものであつたから、かえつて識者の笑を買うに過ぎなかつた。そして天然産の眞珠と養殖のそれとの識別法に關して、種々の實驗が、或はX光線により或は偏光により、學術上しばしば試みられたが、いづれも失敗に歸したのである。その中において、直前に一言したジェームソン博士は實驗の結果、養殖または天然の如何に拘らず、不完全ながらも、眞珠

の生産地の識別に役立て得る一つの方法を公けにしたのであつて、これを日光紫外線検査という。しかし、これとても眞珠の天然と養殖との本質的差異を鑑別し得るものではない。かかる情況の下に事態は推移して行つたが、結局この兩者即ち天然と養殖との間には何等本質的區別の無いことが判つたので、この論争は終りを告げ、商人達もまた次第に鳴りを靜めてしまつたかに見えたが、餘波は海を越してパリへ移つて行つたのである。かかる間にあつて眞圓眞珠の價値を逆用し、かつ世上一部に、それを偽物とする宣傳のお潜行しているのに乘じ、全然偽物たるいわゆる模造眞珠なるものをば、御木本眞珠だといつて販賣する者が現れたので、御木本眞珠店ではその一人を告發しその結果、今後かかる詐欺行爲をなす者は嚴罰に處せらるべき旨の判決を得たのである。かくて英國においては、幸吉發明の眞圓眞珠は、ようやくその價値を認められるに至り、そしてそれが世上にはやされた評判の大きかつただけに、御木本パールの名は發明者の名聲と共に廣く知れ渡つて行つたのである。

御木本パールの報道が當時世界流行の中心たりしパリの街をケタタマシク飛んだ最初は、ロンドンより一日後れの五月五日のことであり、そして諸新聞紙上において、穩健適正な記事と事實を曲げた報道とが相半ばしていたことも、ロンドンの場合と同じい。元來佛國にはダイヤモンド・眞珠その他の寶石を取扱う業務組合があり、巨資を擁して業界に君臨していたが、この組合の連中は

御木本パールの出現に一大脅威を感じ、これが對策に腐心した末、もし御木本氏にしてこの新發明を放棄するならば、巨萬の報償を呈するにやぶさかでない暗示してきたのであつた。が、その策の成らざるを知るや、かれらは一意専心自衛の衝に立つて種々の迫害運動を試みるに至つた。この組合の迫害運動はこれを三段に分けて述べることができる。即ちまず第一に、かれらは眞圓眞珠を模造眞珠として宣傳した。當時佛國は第一次世界大戰で受けた痛手がなほ深刻で、對外爲替は慘落に次ぐに慘落を以てする情勢にあつたから、これを防止する一手段として、しやし品の輸入を嚴禁し、したがつて眞珠の如きも再輸出の條件の下に、しかも國內の輸出入に均衡を生じた場合にのみ輸入を許可するという有様であつた。そしてこの統制權及び輸入許可の權能は便宜上この組合に委託されていたのである。そこで、かれらは最初は偽物呼ばわりをなし、たとい規定によつて無税輸入を許しても、世人のこれを顧みざらんことを欲して、こんな畫策をしたのである。しかし模造品でないものを模造品呼ばわりされては、聴き捨てにできない御木本眞珠店は、直に抗議を發し、佛國税關もまた天然眞珠と同様の物であるから、これに輸入税を課すべしとの斷定を下したため、この第一の手段は不首尾に終つたのである。

そこで第二の方法として、かれらは前記の輸入許可權を濫用して眞圓眞珠の輸入を阻止せんとした。ここにおいて御木本眞珠店は佛國國務省にその不當なるを訴え、その結果、輸入許可權はかれ

らの手から離れて、税關が直接にこれを管理することとなつた。他方御木本眞珠店のパリ代理者ポールは、かの組合側の不當な輸入阻止を民事裁判所に訴え、再三審理の結果、千九百二十四年五月以後、眞圓眞珠はその養殖なることを記述するに及ばない、單に眞珠として輸入してよろしいとの判決を受けたのである。かくて法律上、眞圓眞珠は本來の天然眞珠と全く同一の取扱を受けるようになったのである。

他方學者の方からも、ボルドウ大學の教授ブータン博士の如き篤學の士が現れ出て、極めて公正な見解の下に眞圓眞珠が天然産のものと同一なることを確認し、その所説が學會論文として、また著書において廣く世に公表された。即ち英國におけると同様、佛國でもまた學問上からは御木本パールは立派に天然産と同様の資格を與えられたのである。かのジェームソン博士といい、このブータン教授といい、何れも適正な論説を發表して、世間一部の抱いていた御木本パールについての偏見や危怖感に對して、痛烈にその誤を正したのであつて、これらは全く眞理に對する熱愛のあふれたものではあるが、幸吉に取つては、正に百萬イナ千萬の味方を得たような心強さを感じたところであつた。

しかし上述二段の運動に敗れた組合の一味は、さらに眞圓眞珠をば、天然眞珠と模造眞珠との中間物として認容し、そして天然産のものと同じの價格を附けることを拒否せんとするのろう舉に出

てきた。即ちかれらの運動は、積極的攻撃から消極的中傷へと轉向せざるを得なくなつたが、眞圓眞珠の価格を下げようとする點に至つては、どこまでも根強いものであつた。かれらは眞圓眞珠が眞圓眞珠とのみ記載して賣却し得られるように、民事裁判所で判決せられたのに對し、或商人の手單に賣られたネクレスに養殖眞珠と明記してないから詐欺であるなどと言つて、そのネクレスを押えて戻さなかつた事さえあつた。御木本眞珠店の側では再び民事裁判所に訴訟を提起して勝利を得たが、やがて同一の徑路を取つた訴訟が、先方から商事裁判所に提起せられた。ここでは判事が眞珠商人であることを先方が利用して、この度はこちらの敗訴となり、日本産なる名稱を冠すべしと判決せられた。これは不當の判決であるのは言うまでもなく、他の諸國産何れも記入しないのに、獨り日本産のみがこんな制限を受ける理由が無いから、これに對して直に上告したのである。また組合側は眞圓眞珠を模造眞珠と見なすことに失敗したので、さらに眞圓眞珠が中央に貝がらの核を含むとの理由を以て、天然産同様に重量を尺度とする販賣法をこれに適用することを不當とする旨の訴訟が次から次へと起り、しかも問題の要點を逸して、枝葉に捕はれた揚げ足取りの係争となつて果てしなく續いた。

それに拘らず、御木本パールの販路は英佛二國においても歳を追つて擴張せられ、商取引としても最後の勝利を占めたのである。またドイツでは、御木本眞珠は天然眞珠と少しも異なるどころ無

しとの判断をなし、幸吉の世界的發明は驚歎の聲を以て迎えられた。但し商取引における價格については、最初養殖の際、核としてさし入れた部分の重量は、これを控除して計算するということがなつた。例えば、もし核が十分の二を占めるならば、それだけを除いて十分の八とし、また十分の三を占めるならば、それだけを除いて十分の七として計算して價格を定めるのである。

## 一五 發明家としての御木本幸吉

發明家としての御木本幸吉の行實は、その獲得した多くの特許権によつて證明せられる。大正十四年十一月日本發明協會は、御木本養殖眞珠事業に關し委員を設け、實地について詳細な調査をなされしめ、翌十五年四月に至り同協會長法學博士阪谷芳郎の名を以てその結果を社會に報告してゐる。その委員は東大名譽教授理學博士佐々木忠次郎・東大理學部長理學博士五島清太郎・東大教授理學博士岸上謙吉・北里研究所技師衆議院議員醫學博士理學士宮島幹之助・農林技師水産講習所技師理學士妹尾秀實の五氏で、何れも當代におけるこうした面の權威者であるから、その報告は最も權威あるものと考えられる。

これによると幸吉の發明で、養殖眞珠の生成並びに眞珠貝の養殖に關し特許を得た件数は非常に多く、枚舉に暇が無いけれど、當時なお存続して有效なものを分類すると、養殖眞珠に關するもの九件、イケカゴに關するもの四件、子虫附着に關するもの二件、色澤補整に關するもの二件である。これらは何れも、眞珠の養殖に關して連續發展的に進められた研究の過程において、きつもので、なにかんづく特筆せらるべきものは眞珠素質被着法と眞珠貝子虫附着法との二つであり、この二

つこそ幸吉の連續發展的發明道程において、その最高峰をなすものといつてよい。

その第一たる眞珠素質被着法については、この報告書は次の如く述べている。

眞珠素質被着法ハ御木本氏ノ曩ニ得タル特許第二九四〇九號ヲ改良シタルモノニシテ適當ノ核ヲ貝ノ眞珠素質分泌細胞組織ノ皮膜ニテ被包シ其口ヲ結紮シタル儘他ノ貝ノ表皮ヲ傷ケ其ノ下層ニ外科的植皮術様ニ壓着シ海中ニ放養シテ眞珠素質ヲ被着セシムル方法ニシテ頗ル精緻ナル技工ヲ要シ、極メテ熟練セル選抜職工ニアラザレバ之ヲ行ヒ得ザルモノノ如シ。

此方法ノ特許公報ニテ發表サレタル當時、結紮條ニテ薄キ皮膜ヲ被包シ其口ヲ結紮云々ノ作業ノ餘リニ精緻ニ過ギテ實際ニハ行ハレ難カルベシト想像セルモノアリ、又歐洲ノ學者間ニモ此點ニツキ同様ノ意見ヲ述べタルモノアリ。

今回實際ニツキ調査セルニ總テノ技術者皆一樣ニ細少ナル結紮條ニテ結紮スル作業ヲ行フヲ見、其精緻ナル技術ヲ驚歎セリ。次ニ此方法ニヨリテ海中ニ放養シ、數年間眞珠素質ヲ被着セシメタル母貝五拾箇ノ内、拾參箇ヨリ眞圓眞珠ヲ摘出スルコトヲ得、之ヲ検査シタルニ色彩及形狀ノ諸點ニ於テ間然スル所ナク眞ニ天然眞珠ニ比較シ何等ノ遜色ヲ認ムルコト能ハザリキ。カカル優良品ヲ得ルニ至リタルハ是レ全ク學理應用ノ極致ニ達セルモノニシテ世界的發明トシテ中外ニ稱揚スベキ價値アリト認ム。

眞珠ノ成因ハ往昔ヨリ多數ノ學者ニヨリテ研究セラレ砂粒核説ヲ始メトシ、内部病的原因説、

140

又ハ寄生虫原因説等甲論乙駁種々ノ論争アリタルモ最近多クノ學者ノ認容スル學説ハ「眞珠囊」説ナリトス。(Reinur 1717, Jameson 1901 and 1912, Boutan 1913, Rubbel 1911, Alverdes 1913)

天然眞珠ノ核ハ決シテ一定固有ナルモノニアラズシテ、泥塊又ハ寄生虫タル條虫、吸虫等ノ虫仔タル事アリ時ニ又小甲殻類ヲ認ムルコトアリ、或ハ又全ク無核ナル場合アリ。故ニ眞珠生成ニ不可缺ノ要素ハ核ノ性質又ハ其存否ニアラズシテ全ク貝類ノ皮膜組織中ニ眞珠物質ヲ分泌スル眞珠囊ナリ。而シテ此眞珠囊ハ外皮層ヨリ成レルモノニシテ決シテ他ヨリ來リタルモノニ非ズ、貝ノ外套膜ノ外皮圓狀細胞ノ一部ガ何等カノ動機ニヨリテ外套膜ヨリ分離シ、其結組織中ニ陥落シテ形成セラレタルモノナリ。

眞珠生成ノ刺戟ガ外來性タルト、將タ固有性タルトヲ問ハズ、總ベテノ天然眞珠ハ既述セシ如ク眞珠囊ヲ以テ被包サレ常ニ眞珠ハ此眞珠囊ノ圓柱狀單層細胞ヨリ分泌、加層サルルモノニシテ其ノ役目ハ恰カモ外套膜ノ外皮細胞ガ貝ノ眞珠層ヲ分泌スルト同様ナリ。

故ニ純正ナル天然眞珠ニ對シ其ノ核ガ砂粒ヨリナルカ將タ貝殻ヨリナルカ、或ハ動物性ヨリナルカニツキ其ノ品質ノ良否及ビ眞偽ヲ鑑別スル基準ト爲ス能ハザルナリ、又實際ノ商取引ニ於テモ天然眞珠ノ中心ガ有核ナルヤ將タ無核ナルヤニヨリテ評價上甲乙ニ區別スルモノアルヲ聞カズ。

ズ。

單ニ其外面及表層ノ性質ニヨリテ價值ヲ定メ、例令無核ノ眞圓眞珠ト雖モ一旦其表面ノ優良ナル特性ヲ失ハンカ何人モ之ヲ顧ルモノナク唯ダ球狀石灰質ノ一塊ニ過ギザルノミ。

前記特許ノ方法ニヨリテ得タル養殖眞圓眞珠ハ天然眞圓眞珠ト同一ナル特性ヲ全部具備セルモノナルガ故ニ商事上ノ取扱ヒ並ニ價格ノ算出法等ニツキテモ又同一ナル待遇ヲ受クル特權アルハ當然ナリト認ム。只茲ニ最モ注意スベキハ世界ノ眞珠價格ヲ維持スルタメ養殖眞珠ノ投賣及粗品濫賣ヲ嚴重ニ禁止スルコトナリトス。

以上陳述セル御木本氏ノ眞圓眞珠養殖ノ學理的解説ハ歐洲ニ於ケル著名ナル動物學者モ同様ナル意見ヲ有シ殊ニ眞珠ニ關スル權威者タル英國ノ Jameson 博士、佛國ボルドウ大學 Bourdieu 教授ノ如キハ屢々長文ノ論文ヲ發表シ、世間一部ノ御木本眞珠ニ對スル偏見及危懼ヲ抱ケル人々ノ爲メ蒙リ啓キ痛論セラレタリ、是レ畢竟眞理ヲ熱愛スル純潔ナル理想ニ立脚シテ自然ニ發セル學者ノ聲ニ外ナラザルナリ。

これぞ幸吉の養殖眞圓眞珠の發明に對して、學界の權威者達が附けた立派な折紙でなくして何であらう。

次に第二たる眞珠貝子虫附着法に關して、この報告書が眞珠貝養殖と題した項中に左の如く述べ

141

ている。

事業ノ發展スルニ伴ヒ、自然ニ産スル眞珠ノ稚貝ノミニテハ其用ヲ充タスニ足ラズ、逐年稚貝供給ノ困難ヲ來スニ至レルヲ以テ御木本氏ハコノ稚貝ノ養殖ニ着眼シ、十數年間研究ト實驗ヲ重ネ遂ニ海中ニ浮遊スル眞珠貝仔虫附着ノ方法ヲ發明シ之レヲ大規模ニ行ヒ實效ヲ奏スルニ至レリ。

從來人カヲ加ヘテ眞珠貝ノ稚貝ヲ收穫スルタメ種々ノ實驗報告及新規考案ノ發表アリシモ未ダ事業トシテ成功スルニ至ラザリキ。然ルニ此方法ニヨリテ所要數量ノ稚貝ヲ容易ニ收穫シ既ニ實效ヲ擧グルニ至リシハ、恰カモ野生蠶ノ應用ガ今日ノ養蠶業ニ發展セルニ比スベク、増殖上頗ル有益ナル發明トシテ稱揚スベキモノト認ム。尙御木本氏ハ此ノ方法ヲ獨リ自己ノ海面ニテ應用スルノミナラズ普ク本邦各地ノ當業者ニ推奨シテ稚貝ヲ増殖セシメント企圖セルハ斯業開發上重大ナル效果ヲ齎ラスモノタルヲ疑ハザリナリ。

ソノ要具ハ即チ特許第六〇三二號(大正十三年四月一日)ヲ以テ許可サレタル「眞珠貝仔虫附着器」ナリ。灰ヲ塗抹セル山形狀ノ附着手ヲ設備シ且仔虫ノ反趨光性ヲ考慮シ四周壁及底部ニ遮阻板ヲ施シタルモノニシテ之ヲ海中仔虫ノ最多ナル水層ニ吊リ下グルモノナリ。而シテ大正十四年七月ニ没入シタル此器ヲ同年十一月ニ引キ揚ゲ検査シタルニ其ノ效果顯著ニシテ一個ノ籠ニ最

多一萬六千個、最少一千個ノ稚貝ノ附着セルヲ見タリ。

近來眞珠稚貝ノ供給頗ル缺乏セルヲ以テ全國ノ當業者ハ母貝ヲ求メンガ爲メ稚貝發生地タル三重縣英虞灣ニ來集シ競賣ノ方法ニヨリテ價格ヲ定メ商事ヲ營ミ居ルモ需給ノ不平均ナルヨリ逐年高價トナリ甚ダシキハ一個ノ母貝金五拾錢以上ニ昇リ、尙今年ハ益々高昇ノ氣配ナリト云ヘリ。斯カル實狀ナルニ拘ラズ御木本氏ハ右ノ方法ニヨリテ既ニ數年前ヨリ確實ニ巨萬ノ稚貝ヲ收穫スルニ至レリ。

これもまた、この發明の價值を十分に宣明している。とにかく幸吉の創始した眞珠養殖事業は、この二大發明を柱石として樹立せられ、御木本パールの販売は、何等の懸念なく全地球上に行わなければならないから、これ正に、わが國の産業に一生面を打開したものに外ならない。のみならず魚介の種類と自然の風土・海灣等の關係からして、この産業こそは、わが國獨特のもので、他國の追従を許さないところである。國家や公共團體が、その功績を認めて大いに賞揚しているのも、まことに故あることである。

これより先、半圓眞珠の發明ができて眞珠養殖の事業が着々と進んでいる明治三十九年に、幸吉は實業に勵精し衆民の模範たるものとして、内閣賞勳局から綠じゆほう章を下賜せられたが、さらに眞圓眞珠の發明が完成を告げて、天然眞珠に劣らざる良品を産出して、海外に輸出するに至つた

大正八年九月には、該ほう章に附する飾版を授與せられたのである。また別に毎度の寄附行爲によつて、紺じゆほう章及びこれに附する飾版を授けられること實に七回の多きに達している。

日本發明協會では、優秀な發明に對して表彰授賞の規定を立てているが、大正十五年九月には幸吉の眞珠素質着法及び眞珠貝仔虫附着法の發明に對して、この規定最高の賞たる恩賜記念賞を初めて授與してこれを表彰したし、ついで昭和二年十月には發明界に貢献した勳功により、幸吉は勳四等に叙せられ瑞寶章を下賜せられた。翌三年一月日本發明協會は、さらに會員たる幸吉に對し會長の名を以て、しよう功辭を贈つて、これまた前例の無い表彰をなしたのである。

昭和五年十二月十一日、天皇陛下には發明家優遇の思召を以て、優秀な發明家十名に對し、特に賜餐の御沙汰があり、幸吉は鈴木梅太郎・本多光太郎・山本忠興・密田良太郎・丹波保次郎・島津源藏・杉本京太・蠣崎千晴・田熊常吉の九氏と共にこの光榮に浴した。この光榮に浴した十人は聖恩の深きに感激して、永久にこれを記念すべく、十人會なるものを組織したが、その第三回の會合が昭和八年八月の五日から三日間にわたり、かれが誕生地鳥羽町及びその養殖事業發祥の地たる多徳島において行われた。その開會の辭において幸吉は、來年は七十七歳に達するから、俗にいわゆる喜壽の祝をする代りに、綜合的眞珠研究所をこの養殖場内に設ける計畫を持つてゐる旨を發表したので、來會者一同深くかれの老いてますます壯なるに驚き、特にその研究心のし烈なのに感歎

した。

この年の十一月マルコニーが來朝し、同月二十二日の朝幸吉は、奈良ホテルにおいてマルコニー及びその夫人と會見した。幸吉は當時鳥羽にいたが、マルコニーの奈良に來たのを聞くや、生きて眞珠貝を携えて奈良ホテルに至り、自らこれを開き、光輝さん然たる眞珠を摘出してこれを夫妻に呈した。元來マルコニーは寡言沈黙の人で、この旅行中も靜に沈思している時が多かつたのであるが、この時ばかりは非常の好意を以て幸吉を迎え

私は眞珠には深い興味を持つてゐる者であり、貴君の芳名は、よほど以前から伺つていたが、今日何の幸か親しくお目にかかる好機を得、かつまのあたり自ら摘出された眞珠を拜見して、眞に驚喜の至に耐えない。

と述べた。夫人の如きは生きた貝の中から、きらめく眞珠のはさみ出されることに、驚きの聲を上げて喜んだのである。前に述べたエジソンとの會見と共に、世界的發明家の會見談として興味をそそるものである。昭和十二年六月マルコニーが死んだ時には、ロンドン御木本眞珠店を通して花輪を贈つて弔慰し、その後同夫人からも亡夫記念の寫眞を送つてきた。昭和十五年七月幸吉の孫に當る山岸重孝がイタリーに出張したので、故マルコニーの墓前に花輪を供せしめて弔禮を盡し、また同未亡人を訪問して託言を傳えさせたところ、未亡人も非常に喜び、前に送つて來た亡夫の記念寫

眞と同型の自己の寫眞にしよ名して託したのである。

發明家としての幸吉の盡きざる興味と努力とは、しかしながら眞珠素質被着法と眞珠貝子虫附着法との發明に終りを告げたのでない。その後もドシドシ研究を進めて絶えず加工養殖の方法を改良している。核を他の貝の外とう膜を切つた小片で包み、しばつてさし入れる代りに、核をさし入れて同時に他の外とう膜の小片でこれを包むようにして、その手續を簡單にし、また一個の母貝に二個の核をさし入れて、二つの眞珠を同時に得る途をも考え、養殖の期間の如きも四年を待たずこれを三年内外に短縮することができるようにしたのである。さらに昭和十八年六月十日に至り、過去二個年にわたる研究の結果として、ケシ眞珠からコンキオリンたん白質を含有するコロイド性リン酸カルシウムの製法を發明した。そして、これによつて結核病者・妊産婦・虚弱兒等に特效あるカルシウムざいコンキオリンを創造したのである。それが特許局で認定せられ、特許品として發賣することになつた。これ幸吉が高齡八十六歳における發明で、やはり眞珠に關するものであり、かれを社長とする御木本製薬會社はかくして起つたものである。かくて昔から、およそ眞珠に關して企圖せられたあらゆる懸案は、ことごとく、かれの努力によつて解決せられたのであつて、御木本幸吉こそは眞珠と終始し同時に發明と終始した人といつてよい。

およそ大きな發明家に二つの型がある。一つは、あらゆる面にその鬼才を働かせて、到るところ

に前人未發の境地を開くもので、例えばエジソンの如く、その力が音響に向えば蓄音機を創め、光線に向えば活動寫眞を造り、電氣に向えば白熱電燈や電車を考え出すといつたように、行くところとして新に發明せざるなき發明家である。二つは、その對象がある特殊の面、時としては極めて狭い事相に限られるが、しかしその事相の關する限り、あらゆる問題が、その卓拔な才能の働きを受けて、從來の疑團が氷解せられて新しい工夫が案出せられるのである。わが御木本の如きはそれでおよそ眞珠に關する限り一つとして、その腦裏に考案せられ、その手腕に創造せられないものは無いのである。人間の力を少しも割引せずには評價するアメリカ人が、エジソンを發明王と稱して尊敬すると同時に、わが御木本を眞珠王と名づけて敬慕するのは、おのづからにこの意味を示唆しているようである。



## 一六 實業人としての御木本幸吉

實業人としての御木本幸吉は一人一業を主義とし、終始一貫その一業に専念没頭する。世の多くの實業家は、最初はその實業に専心するけれど、事業が大きくなると次第に他の面にも手を延ばし、或は銀行に或は會社に或は運輸に或は鑛山にと段々關係を擴げて、いわゆる多角經營に移り行く人が多い。これ一方には危険の分散となり、他方には資本の収集ともなり、兩々相待つてますます事業の、従つてまた勢力の擴大強化を見るのであり、わが國で財閥とかコンツエルンとかいつたのは、こうした行き方のできたものが多く、世間もまた、そうした實業人を紳商と呼んで尊敬する風さえあつた。しかるに幸吉は早くから、こうした行き方を取らない。青春の頃からこれえと轉業した時から、それでも既に一人一業主義の信奉者であつた。従つてまた借金はせず株式は持たず、どこまでも自力による一人一業の専心没頭に一貫してきた。

そしてその一業が眞珠業であることは言うまでもなく、それは最初行商的の活動から起つて、生がいを通じて眞珠の販賣養殖に終始したのである。しかし一般の眼からすれば、眞珠のような高貴な貴い寶玉をば、人工養殖で産み出そうなどは非常な冒險的な仕事である。水産の知識の無い人に

は、おそらく雲をつかむような話としか思われなかつたであらう。世人が深くその價値を認めてくれなかつたのも無理のないことである。したがつて初頃は、ただ産業の監督官廳や水産の當事者達が、わずかにこれを賞讃して激勵を興えてくれるに過ぎなかつた。しかも眞珠養殖の可能性に確乎たる自信を抱いて、その實績を握つていたかれにしてみれば、先人未到の境地なればこそ、一生の思出によし登つてもみないのである。さきにかれが北海道に旅行した時、アイヌ人が熊狩をする話を聞いたが、その後毎日新聞に載つている熊狩の圖を見たことがある。土人が毒矢を弓につがえて熊に近づいて行く。今一步で熊が飛掛かろうとする瞬間よつびいた矢をヒョーと土人が放つ。うまく當れば熊を仕留めるが、外すれたら最後、飛掛かる爪に土人は倒れねばならない。倒すか倒されるか、食うか食われるかである。思えば全身の力と總ての資金とを海中に注ぎ込んで、赤潮と戦いタクと闘いつつ、四年の歳月を待つわが身である。待ちに待つた四年の隣、貝を上げて開いて見た結果、美しい眞珠が出てくれば一かく千金だが、鉛色の玉しか出てこなければ、四個年間の辛苦も水の泡である。全くのところ取つたか見たかの勝負で、正にこの熊狩である。弓をば満月の如くに引しづつて熊の月の輪を狙う土人の地位こそ、わが心境である。かく感じた幸吉は、當時まだ油繪の初めて流行しだした頃ではあつたが、知名の洋畫家に頼んで熊狩の圖を描いてもらつて、鳥羽の家

かれの心事は、乗るかそるか、成功すれば出世だが、失敗すればのたれ死にの覚悟であつた。そこで事業遂行上の安全弁として、かれの打立てたものは、二段構えの陣立と漸進主義とであつた。二段構えとは、一段で失敗しても二段で食い留めようという段取りであり、漸次主義とは、長く待たねばならぬこの事業の性質上、漸を以て經營を擴大して行くことである。かように用意や準備は十二分にすけれど、それ以上は擧げて神佛の加護に待つのである。

これと同時に、かれは樂天的であつて、いつも新しき希望をかけて、前へ前へと突進むことを考へている人である。もつともその事業の性質上、最初占われた豫想が裏切られることも随分あつたが、しかし次の瞬間には、直ぐそれを取返す方途に工夫をこらしているのであつて、少しも過ぎ去つた失敗に執着するということは無く、思い切りのよいことは全く無類である。その心境を尋ねると、かれは即座に答えていたのである。人間萬事さい翁が馬というが、全くその通りで、禍福は眞によれ合つたなわの如きものだ。禍を歎いたり失敗を悔いたりするよりは、禍を轉じて福となす工夫をする方がいい。私の處世の標語は、この「禍を轉じて福となす。」の一語にある。短い人生において、生きがいのある仕事をするには、ためらいは禁物であると。漸進主義であると同時にどこまでも進歩的である幸吉の面目は、この述懐に躍如としてゐる。養殖眞珠を以て初めて大々的に打つて出た大阪の第五回内國勸業博覽會の出品全部が盜難にかかつた、あの事件について、その直後に人から尋ねられた時、かれは次の如く言つてゐる。

僕は實に運の好い男です。學問も何もありませんが、とにかく今日マア一人前となつたのは全く運です。あの博覽會の時の騒ぎも、つまり運というより外ありません。大學總長の渡邊洪基さんが、僕を勵まして、次の如く言つて下さつたことがある。それは君の養殖眞珠は、全世界にさきがけて造つたわが日本の特産品なのだ。文明の先進國たる歐米人にもこれを愛用させるのはまことに愉快なことではないかということです。僕もそう思いますから、大いに海外貿易に努めましょう。運は元より天にあり、われは人力の限りを盡すのみ、これが僕の開運のカギですよ。

ことに眞圓眞珠の發明が完成してからは、ますますこの意氣を鼓して、一方には五箇所灣を始め全國諸地に御木本眞珠養殖場を増設して、盛んに眞圓眞珠の増産に努め、他方にはロンドン・パリ・ニューヨーク等世界の大都市に御木本眞珠店を開設して、その販路を全地球上に擴めようとしたのである。かくて大正十一年十二月現在における御木本眞珠養殖場の所在地及び所屬海域は、左の如くであつた。

養殖場名

所在地名

所屬海域面積

多 德 島

三重縣志摩郡英虞灣

八十四萬七千坪

五箇所灣

同 縣度會郡五箇所灣

百八十七萬坪

神前灣	三重縣度會郡吉津村神前浦	五萬三千坪
古和灣	同 縣同 郡島津村古和浦	三十五萬千坪
方坐灣	同 縣同 郡同村方坐浦	三萬八千坪
引本灣	同 縣北牟婁郡引本町矢口浦	八千坪
賀田灣	同 縣南牟婁郡北輪内村三木浦	七萬七千坪
田邊灣	和歌山縣西牟婁郡西富田村	不詳
大村灣	長崎縣西彼杵郡龜岳村龜ノ浦	不詳
七尾灣	石川縣鳳至郡穴水町青島	十一萬八千坪
石垣島	沖繩縣八重山郡石垣島	三十四萬坪
合計	九箇所	三百七十萬二千坪

その後昭和六年に至つて、南洋委任統治のパラオ群島中のコロールにも、養殖場を創始したのであつた。また御木本眞珠店の方を見ると、同じく大正十一年には實に左の如く六つを數えている。

- |          |          |
|----------|----------|
| 店 舗 名    | 所 在 地    |
| 東京御木本眞珠店 | 東京都銀座四丁目 |
| 大阪御木本眞珠店 | 大阪市淡路町堺筋 |

神戸御木本眞珠店 神戸市元町通四丁目

上海御木本眞珠店 上海南京路

ロンドン御木本眞珠店 ロンドン・リーゼント街一一九番

パリ御木本眞珠店 パリ・シャトードン街七番

ニウヨーク御木本眞珠店 ニウヨーク第五街六三〇番

その後米國にはニウヨークの外シカゴ・ロサンゼルス及びサンフランシスコに、またインドのボンベイ、中國の北京及び南京等にも、出張所を設けたのである。

こうした發展が一時に巨額の費用を要したのは元より言うまでもない。しかも自力獨營を標ぼうして一人一業に徹し、二段構えと漸進主義を信條としている上に、社會公共事業への寄附には喜捨を惜まないかれにあつては、その莫大な支出に融通すべき財力の餘裕とは無い。これが當時のかれに取つては頭を悩ました問題であつた。あたかも第二次桂内閣の時であつたが、かねてから幸吉の事業に心からの同情と支援とを持つていた桂首相は、外債を起して擴張費に充てたらどうかと勧めた。この頃外資輸入ということが流行し、わが國の事業會社や事業家でこれに頼つて擴張を圖つた向きも随分あつたのである。幸吉もこの好意の勧誘に對して二晩も三晩も熟慮を重ねたが、遂に辭退して折角の好意にも従わなかつた。自立獨營の精神が、どこまでもかれを支配していたのであ

つた。

なおも幸吉がいかに極端に一人一業の主義に徹していたかを見るに足る次の事實がある。元來かれは、政治家として終始した栗原亮一を竹馬の友として持つていたり、二十三歳から町會議員に選ばれたりした關係から、青年時代には政治に相當興味をもつていたが、實業人となつてからは、ほとんど政治には關係しなかつたのである。大正十三年に三重縣選出の貴族院多額納税議員伊藤傳七が卒去したその補缺選挙に、勧められて候補に立ち、有資格者五選投票の結果當選して、貴族院議員となつたのである。そしてその年の末から開かれた議會の會期中、かれは一日も缺席したことなく、委員でなくても議事のある日は必ず登院して議席に就き、他の議員の言説に耳を傾けていた。これは異數とせられるところで、かれはここにも特色を發揮したのであるが、しかしこうした生活は自分の事業の遂行とは、とうてい兩立し難いと感じ、翌年改選期のくるのを待つて直に候補を辭退し、國産増進の一職にたてこもることとなつた。

この一事によつても判る如く、かれは種々の點で特色を持つてゐる。イナ種々の著しい特色を持つてゐることこそ、實業人としての御木本の特色であつて、少くとも、かれこそ日本實業人の變り種である。試みにその特色の若干を指摘すれば、第一にかれは、模範的人になりたい、小學校の教科書に載るような人物になりたいというのが本來の素志であつて、必ずしも大きな實業家を理想

としないことである。金の一億より名譽の千萬が欲しいとは、その始終口にした言葉であつて、絶えず自分を警める不文の座右銘でもある。もち論かれも實業人であるから、金もうけを考えないわけではない。中國巡遊中にも算盤を離さなかつた逸事が示している通り、決して打算を度外視した人ではない。けれども、その活動は單に致富をのみ狙つたものではない。かれはその事業を始めた頃から、鳥羽で第三位の金持に成りたいと思つたのに、大正十一年には鳥羽はおろか三重縣における多額納税者の筆頭に進出し、昭和二十二年には財産税額千萬餘圓を納めることになつてゐるのを見ると、かれもまた、いわゆる分限者の一人に相違ない。しかるに、かれ自身には少しも満足してゐる姿は見出されない。もしかれにして致富が目的なら、ひたすら蓄財にうき身をやつすべきで、それにはまた、それに適わしい行き方が無いでもない。ところが幸吉の行き方はすこぶる方向を異にし、養殖の研究や事業の擴張に力を込め、寄附行爲や公共事業に絶えず喜捨して、常に資金が足りない勝ちである。こうした行き方・在り方を見ると、かれは實業人には相違無いが、江戸時代に養成せられた、いわゆる町人の風は帯びず、また明治時代に輩出した、いわゆる紳商連ともその選を異にし、むしろ事業も一代、財産も一代といつた米國實業人の風格を具えているように思われる。

半圓眞珠を生成し得ても、その初穂はまず皇室にこれが傳獻を請うのであるし、死闘の收穫であ

つた眞圓眞珠を發明しても、天皇に献納した後でなければ市場には出さなかつたのである。商品として盛んに内外にさばかれる頃になつても、優良品のみをひさぐであつて、下等の品は焼却してしまつたのである。けだし幸吉を支配するものは、寶玉の觀念であつて致富の觀念ではないからである。かくて眞珠養殖のことも眞珠販賣のことも、いつまでも自己一人の專業として私する獨占欲はなく、自分に模倣し追従して仕遂げ得る人があれば、それはその人に仕せて、己れは進路を新たな方向に擴げるのであつて、ここにかれの模範欲が強烈に働く。その結果業務はますます殷盛となり、聲價はいよいよ高まるのであつて、それは決して不利でないことを、かれはよく知つてゐる。かくして眞珠の養殖・生産ということが、海國日本の新たな産業の一となつたのである。そしてかれは押しも押されぬ日本の模範人物となり、その行實は少年文學的に取扱われて、現に國定教科書を飾つてゐるのである。

次に擧ぐべきは、幸吉の營業の企圖が、國內の商賣よりも外國への貿易輸出を主としたことである。これもまた、江戸時代から承けついで商人の概念からすれば型破りに屬し、明治以後の實業人としても、最も進歩的行き方のしかも先端を切つたものである。それは資本も無く仕事も小さく、かつまた世に知られざる新しい面において世界的にたい頭しようとしたのだから、最初は雲をつかむような話であつたに相違無い。しかも六十年にわたる涙と汗の苦闘を戦い抜いて、ついに御木本

といえは日本眞珠の代名詞となり、それがわが身に反映して御木本即眞珠となり、わが國の他の貿易業者も、眞珠を賣る場合には御木本眞珠として出すようにさへなつてゐる。まだそれ程にならぬ明治四十一年四月、多徳島養殖場で故小松宮彰仁親王追弔法會を催し、終つて眞珠員供養會を開いた時、かれは來賓一同に島内を案内して述べたあいさつの中に

御覽の通り島内の建物も僅かながら一渡りできましたが、しかし一枚の瓦も一本の柱も國內の金を仰がず、ことごとく外國からもらつた金で致しましたので、これが幸吉二十年の辛苦がいささか報いられたものと、私心窃かに慰めてゐるところであります。

と言つてゐるが、これは全く幸吉一生の活動を貫ぬいてゐる主義である。今や再開せられたわが世界貿易の新舞臺に時代の脚光を浴びて登場し、やがては數億の金をかせぐ日本養殖眞珠、その産出並に販賣が實に、かれの創始し開拓したものであることを考える時、たれか幸吉の着眼の高きに滿腔の敬意を注がざるものがあるか。

第三として擧げねばならぬのは、養殖眞珠に對する國家管理論である。元來幸吉は眞圓眞珠の販賣によつて輸出貿易の一翼を張ろうとしただけでなく、實に天然眞珠よりもつと良質の眞珠をこの世に造り出して、世界の眞珠界を支配しようとする雄大な理想を抱いてゐる。古稀のたい齡に及んで、なお総合的眞珠研究所を多徳島に立てようと企てたのも、この理想からであつたが、如何せ

ん世界は戦亂のちまたとなり、祖國は軍隊の陣營となつていた當時にあつては、そんなことは一場の夢として葬り去られるより外なかつたのであるが、さて振返つてわが足許を見つめると、大正から昭和にかけて、わが國における眞珠養殖の實際の經營並びに養殖眞珠販賣取引の實情には、大いに先覺者の考慮を促すものがあつたのである。眞圓眞珠の發明によつて得た幸吉の特許は大正十年にその期間を満了し、今やその養殖方法は全く公知公用のものとなつて隨時隨處に追隨模倣せられ英虞灣沿岸の諸村落の如きは家々競つてこれに従事し、さながら一種の家庭工業の如き觀を呈している。かれから見ればその興した新しい産業が擴まり行くのであるから、いかにも喜ぶべきことであるが、事實はそう行かないばかりか、かえつて捨てておけない悲しむべき情況を現出した。というのは、かれら従事者の多くは収益を追うこと急なる餘り、粗製濫造の弊が甚だしく、いかがわしい安價の品が市場にはん溢して、かれがこれまで苦心を重ねて信用を高めてきた日本眞珠の聲價をば、あたらしめてしまおうとさえしている。こんな有様で十年二十年と過ぎ行くならば、今までの折角の努力も辛苦も水の泡となつてしまふであらうことは、わが國における諸多の事業に徴して、火を見るよりも明かである。これを食留めるには、非常の決心を以て百年の大計を定め、二等品以下は惜しげもなく焼捨ててしまつて、決してこれを市場には出さず、天然眞珠と選ぶところなき眞の優良品のみを全世界に提供することにし、それがためには検査所を設けて品質を吟味檢定するこ

と、生糸や製茶におけるが如くにし、しかも三十年五十年はおろか、どこまでもこれを繼續敢行するのでなければ、とうてい十分の信用と確實な利益とを収めることができない。それには先づ強力な統制を斷行し、不變の國策としてこれを遂行すべきであつて、かの鹽專賣や葉煙草專賣における如く、國家の仕事として營むのが最も良い。もしそれができないなら、せめて國家で管理することにだけは、しなければならぬ。これが斷行のためには幸吉は、自己の利益の如きは擧げてこれを國家に提供するにちゆうちよしないというのである。この考想は、もとかれの考案に出たものであるが、阪谷芳郎の如きは大いにこれに共鳴し、やがて兩氏の合作として世に傳つてゐる。

昭和年度に入つてからは、内外の情勢は激變して不景氣風が全世界の經濟界を吹卷くり、ことに裝身具に對する需要の如きは、日に月に低下の一路をたどるばかりで、通商の前途は悲觀の外無き情態であつたに拘らず、粗製品の養殖眞珠、それは年數がたたないため眞珠素質の卷きの不十分なものを、仲買外人の手を経てヤタラニ外國に賣出し、仲買外人もまた、跡は野となれ山となれの氣で目前の収益を計る者が多く、かくては外國市場における日本眞珠の聲價は地に墜ちて、將來の貿易上に回復し難き不振を來すに相違無いとの豫感がヒシヒシと身に迫るのを覺えた。そして、そうした取引の最も多く行われるのは神戸であつたから、この際どうしてもここで警鐘を亂打して反省をうながさなければならぬと考へた幸吉は、昭和八年七月十日の午後四時を以て、神戸市の目ぬき

の場處たる京橋口商業會議所前の廣場で、養殖眞珠粗製品の焼却を敢行して一般に公示したのである。翌十一日の大阪毎日新聞は「眞珠の火葬」と題して次の如く報じている。

焼きもやいたり三十六貫の眞珠……この價が何と時價にして四萬八千圓……焼いた本人は眞珠王で有名な御木本老人、十日午後四時から神戸商業會議所前の砂利場に燒窯をすえて、薪と石炭の火の中へ惜し氣もなく、どんどん投げ入れたのだから、見物人もアツト驚いた。

だがこれは御心配あるな、過去四年間の養殖眞珠のローズものばかりで、九月八日農林大臣認可の養殖水産組合ができての眞珠の品質統一のためとある。それにしても大粒な眞珠をスコップでさらさらとすくい上げて火の中へ投げ入れるあまりの光景に、見物人の中から「もつたいない」と飛び出した珍風景もあつた。

當の眞珠王は山高帽に紋服姿で、自分の子供を見殺しにするような愛情を顔に漂わせながら「恐らく世界一の風景ですよ。がどうも最近悪い眞珠を輸出する者が出て、本當のいい眞珠がツバリ聲價を下げるので、やむを得ず、外國人も見ている前で、こうやつて焼くのです。このために悪い眞珠や、まやかしものが出なくなれば、三年も経てば年額一千萬にも上つて、全世界の婦人のどの首をも、日本國産の眞珠で飾ることができましよう。」となかなかの元氣。

港の夕暮は眞珠の焦げるにおいと、あかあかと飛び上るパールの炎が話題をふりまいて、暮れ

て行つた。

第四に擧げたいのは、どんな打撃や壓迫に會つても少しも屈しない特性である。直前にも述べた通り、大正の半ば頃から全世界の不景氣は年々募るばかりで、少しも好轉の見込はなく、經濟界は不安の雲に閉ざされて、爲替の關係もますます悪化するのみであつて、眞珠の値段の如きも舊時の半分はおろか實に三分の一をも割るほどの程度にまで低落してしまつた。これでは眞珠養殖業者は立行かない。今も言つた如く、この頃はかれの例に倣つて眞珠養殖を営む者の數が、三重縣だけでも既に二百三十餘名に達し、中には、もと御木本眞珠養殖場員たりし者も少くない。かれらは大抵英虞灣や的矢灣に沿つた地域の人々で、おおむね小さな資本を以て狭い海面を借り、家庭工業的にこれを行つて、ひたすら利益を得ようとするのであるから、若干の優良品もできるにはできるけれども、二流品・三流品がますます多くなり、安價な生産品として市場にはん溢し、いよいよ以て眞珠値段の下落に拍車をかけるばかりであるから、こうした情勢の續く限り、やがて多くの同業者の失脚破産を見るは必定である。しかし、それも生産であり營業である以上は濫りに干渉するわけに行かない。さればといつて、そのままにしておけば養殖眞珠の前途はやみである。それを見送つているのも心外千萬である。この業の開拓者であり、かれらの先覺者たる幸吉の苦心は實にそこにあつた。

この困難を深く掘り下げて行くと、結局一つの問題につき當るので、それは眞珠を寶玉として取扱うべきか、または單に一水産物として取扱うべきかの一點であつて、その何れかによつて、その生産に對する經營の仕方管理の方針も全く變つてくる。寶玉として取扱う以上は、幸吉が豫ねての持説の如く生産統制を斷行し検査を嚴重にし、その代り全世界高級人士の嗜好を目標として優良な品を供給し、どこまでもその整價を維持しなければならない。また單なる一水産物として取扱うのならば、なるべく多産多賣主義に立ち、したがつて安價で大衆向きに賣りさばくべきである。官憲の方でも最初は幸吉の持説を容れて、寶玉として進んで行こうとするように見えたが、後には大衆向きという言葉が強い響きを與えて、單なる一水産物として取扱う方針に變わり、粗製濫造を苦にしないようになった。

幸吉はこれを深く遺憾とした。一方には止まるところを知らざる眞珠價格の暴落に直面し、他方には歎わしきこの粗製濫造を見せつけられ、熱慮に熱慮を重ねた結果、どうしても自分の持説が正しいと考へたのである。いつも自他を直結して考へる幸吉ではあるが、事態がこうなつては仕方が無い。已むを得ないから自分は思ひ切つて養殖事業を縮小し、狭い範圍に全力を集中して良質の眞珠を精製することに決心を定めた。即ち養殖事業發祥の地たる多徳島と、これに次で由緒の深い五箇所灣とだけを残して、他は全部閉鎖してしまつたのである。かくて所屬海域の約三分の二をやめ

て、ただ三分の一を残すのみとなつた。海を舞臺としてゐる養殖場の閉鎖は、陸上における工場や倉庫のそれの如く簡單には行かない。放養してある貝の移動も容易なことではなかつたが、年が寄つても頭はさえてゐるかれは、例の「禍を轉じて福となす」の座右銘に物を言わせて、何のためらも無く平氣でこれをやつてのけた。

世の中の形勢は眞珠の養殖及び販賣には、ますます不利となるばかりであつた。日華事變の勃發と共に日本の國情は全く戰時情態に入り、七々禁令が發せられて高價な裝身具は、寶玉たる眞珠そのものと共に販賣が禁止せられ、御木本眞珠店の商賣は忽ちあがつたりとなつて、店は火の消えたようになつた。これこそ確に大きな打撃であつたのは元より言うまでもなく、世間では御木本は御破算だろうとうわさしてゐた。けれども二段構え陣立の實行者たるかれは、少しも屈する色なく、多徳と五箇所とにおける養殖にその力を注いでいた。七々禁令に最も困つたものは、かれの養殖場ではなくして、却つて多數の養殖業者に眞珠母貝を供給してゐた英虞灣沿岸一帯の漁業組合であつたのである。

眞珠養殖事業の資源が眞珠母貝であることは上來しばしば述べた通りであるが、この母貝の主たる生産地は英虞灣で、英虞灣に臨んだ處は瀨島町を始め十數個村が漁業組合を造つてその生産に努めて、これを眞珠養殖業者に賣りさばくのであり、養殖業者はこの母貝を買取つて養殖を營むので



ぬる。この母貝の子虫附着收穫の方法も、もとは幸吉の發明に係り、御木本の特許であつたことは前にも述べた通りであるが、特許期限の満了と共に公知公用のものとなり、今は他の漁業組合でもこれによつてゐる。この母貝は年々一定の時期において入札の方法を以て賣買せられ、その價格もまた養殖眞珠の市價に應じて高低するのであるが、大正の中期頃において、その量は五十萬個内外に達し、英虞灣一帶の漁村はこれによつて、すこぶる潤うていたのである。しかるに近年海外貿易の著しき不振と眞珠の粗製濫造に基づく販路の縮小とに禍せられて、母貝の價格は低落に次々に低落を以てし、今や七々禁令の發布に會つては、全く立行かない苦境に追込まれてしまつたのである。かくて濱島町外十個村漁業組合の關係者一同は相集まり、母貝販賣の將來に關して幸吉の援助を懇請するに至つた。

さらに昭和十五年になつては、眞に致命的ともいうべき壓迫が眞珠養殖業者の頭上に加えられたのであつて、それは向う三年間眞珠の養殖は全然禁止せられ、その上既に所藏せる眞珠も全部封鎖せられてしまつたのである。こうなつては手も足も出ないから、さすがの御木本も、つぶれるよりはあゝあるまいとは、世上一般の評判であつた。がさきに英斷一舉養殖場を縮小し、思ひ切つて經費を節約しておいたかれは、心靜に鳥羽に安居し、世間の評判をよそに泰然自若として終戦の日を待つていた。聯合軍の空襲が日ごとに熾烈となるにつれ、安危を氣すかう人々は、かれに深山幽谷の

地えの疎開を勧めたけれども、幸吉は、自分が事業發祥の地は多徳であるから、死ぬるなら多徳の土にならうと言つて、鳥羽から移つて多徳の養殖場を守つていたため、終戦と同時に即日再び養殖開始の準備を進めることができたのである。

## 一七 寄附行爲に特異な心境

幸吉は、自ら得た富は社會公共のために散することを忘れてはならぬという信念を持つてゐる。したがつて或は郷土の公共事業に或は諸他の社會的施設に、率先して淨財を投じてその達成を圖り或は單獨に寄附行爲をなした事實は非常に多く、ほとんど枚擧に暇が無い。最初の頃は、多徳島の如き偏地に事業を創始した關係からでもあろうか、その地方の學校や道路や漁業組合等に對する喜捨が最も多いが、やがてその對象が一般にまで展開されている。

しかもその寄附行爲についても、かれにはかれ獨特の識見があるのであつて、かつて次の如く語つてゐる。

わが國の人は、死んでから學校を建てたり慈善事業に金を投じたりして、死後の花を咲かすよ  
うだが、あれはどうかと思う。寄附は元より結構だが、その金を活用することをしないと死金と  
なる。私は死後百萬圓寄附するものなら存命中に十萬圓寄附しよう。そうすると自分の存命中に  
その金が働いて、死後の百萬圓よりも多くの利益を生むと思う。また寄附は率先するに限る。後  
れて一萬圓出すより眞先に千圓出す方が目に立つというわけである。

かれが寄附行爲の皮切りは、明治十五年一月二十五日に、二十五歳になつた内祝として、金三圓を鳥羽小學校へ寄附したことである。わが國では昔から男性が二十五歳になると、自立の喜として親類縁者を招くとか内祝品を贈るとかしたもので、これが當時の習俗であつたが、かれは招待や贈物は意味無きことであるが、さりとて習俗に従わないのも心苦しいからといつて、實業人としてはまだ駆け出しの當時、不如意な財布の底をはたいて小學校への寄附をしたのであつた。明治三十二年四十二歳になつた時にも、やはり鳥羽小學校へ金十圓を寄附したものである。

明治四十一年十一月に、津市寺町にあつた、三重育児院という孤兒院が丸の内へ移轉することになつたため、院主が津に來た幸吉を旅宿に訪ねて寄附金を頼んだ。するとかれは

孤兒院のことであるから寄附は辭さないが、一時にまとまつた金額を出すのは私にも豫算外の支出であり、院でも費用の要るのは一時だけでもあるまいから、私は自分の儉約した金額をば永きにわたつて喜捨することにしたい。それで私は今後縣地から東京への往復は、止むを得ない場合を除いて、汽車の二等をやめて三等となし、また津驛から私のこの定宿たる國分屋までの人力車賃は二十四錢であるが、これも急ぐ場合の外は人力車を廢して徒歩とし、こうして節約した金額を永きにわたつて院の育児費の中にさし上げることにしましょう。

と言つた。これを聞いた院主は幸吉の誠心誠意に深く感動して感謝の意を述べ、幸吉もまた満足し

た。それ以來幸吉は汽車の二等をやめて常に三等に乗り、また津驛と旅宿との間を徒歩すること實に二十餘年に及んでいる。そして忙しき身を一年に必ず數回は、自ら三重育兒院を訪ねて若干の金を贈呈するを常例としていた。そして人が汽車を三等にしている儉約を褒めると、かれは二等でも三等でも時間に違はないからと、事も無げに答えるだけであつたから、その節せられた金額が育兒院への喜捨になつてゐることは、長い間知る者が絶えて無かつた。

寄附率先のことも、幸吉が常に行つてゐるところである。明治四十三年に日本發明協會に皇室から御内帑金百萬圓下賜されたとのことを、鳥羽の自宅で新聞紙によつて知つたかれは、即座に阪谷同協會長にあて電報をうち、發明家の養成及び發明の獎勵助成のための費用として、毎年一千圓ずつ向う十個年間寄附する旨を申込んだのである。そして大正八年に至つてそれを完納した。また翌四十四年に濟生會という大規模な救濟事業財團法人ができた時のことである。かれは鳥羽でこの會の創立を耳にするや、まだ何人から勧誘も相談も受けないのに、直ぐ津市に有田三重縣知事を訪ひ百圓札を十枚並べて寄附の旨を申出たので、知事はその餘りに早いのに驚いた。それから暫くたつていよいよ寄附金の募集となつた時、首相であり濟生會の筆頭發起人であつた桂太郎を中心とする或會合の席上、太郎からこの募集のことが話されたので、幸吉は、私は既に一千圓寄附しましたという、首相は十萬圓もしたのかと思つたらたつた千圓かと言う。すると幸吉は、私のは餘人のよ

うに年賦じやなしに現金です、現金は何でも安いにきまつてると言つて、例の通りハハハと大きく笑つたので、首相も笑ひ一座爆笑となつた。

かように幸吉の寄附行爲は、その事と品とによつて、少しのしゆん巡もなく直ぐ決行するのであつて、決して懐工合と相談するのではない。だからかれの支配人は時に甚だ迷惑することがある。そうした場合には、かれはあたかも借金でもするが如く、しきりに懇頼して支出してもらつてゐるのは、はたの見る目もおかしい程である。それでも場合によると、積極的に自ら喜び進んでこれをなすのである。明治四十二年になされた二宮尊徳生誕地の回復の如き、その一である。幸吉は前に述べた通り、少年の頃日光に赴く途中、今市の近くで二宮尊徳の遺跡を見て深く感ずるところがあり、それから二宮翁夜話を讀んで翁の尊敬者となつたのであるが、明治四十二年六月中央報徳會の服部北溪から、神奈川縣足柄上郡櫻井村柏山にある尊徳の舊跡が、他人の有となつて久しく菜畝のままに委せられてゐるということと、今一つ近來報徳の教が盛んとなつたにつれて、遠近の篤志家が翁の生誕地を訪づれる者も多くなつたが、人は小田原在の柏山を知つて、東海道線松田驛在の柏山を知らないため道路を回する人が多い。そこで松田驛構内にでも道標一基を建設したならば一つは訪問者の便利となり、一つは鐵道旅行者に報徳の因縁を結ぶ動機ともなるうという話を聞いた。幸吉はかねて尊敬するこの偉人のために、その生誕地の回復とそこへの道標の建設との二事

をなし遂げんことを即座に決意し、直に實行に取掛つた。即ち尊徳生誕の地二百五十九坪を買収し、工事を起して適當の設備を加え、この年の十一月十五日を以て一切の工をおえ、その地積を擧げて中央報徳會に寄附し、なお同地の清掃料として同村役場に五分利公債證書若干を提供し、その利子を以てこれに充てることにした。しかも幸吉はこの美舉を専私するを快しとせず、足柄上下二郡内の小學校兒童にも零碎なきよ金を勧め、そしてかれと二郡兒童との共同事業たせたとのである。松田驛構内の道標もまた、同時にでき上がったのであるが、箱根地方震災の時その地盤が崩れたので今は驛外に移されて立つている。

二宮翁生誕地回復の舉は、その端を服部北溟との會談に發し、若干他動的であつたとも見られ得るが、全然幸吉の發意で、しかも似た仕事をなしたものは、郷縣の先賢河村瑞軒の遺跡の顯彰である。瑞軒生誕の地は三重縣度會郡鶴倉村字東宮であるが、その子孫は久しき以前から行衛不明となり、その屋敷跡も畠と變つて他人の所有となつてしまつてゐる。このままにしておけば恐らく他日は全く判らなくなるであろう。徳の人として尊徳を崇敬した如くに、智の人として瑞軒を欣慕していた幸吉は、深くこれを遺憾とし、大正五年三月に自ら東宮に行つてその舊跡を買収し、新に土工を起して修理を加え、かつ碑を建ててこれを彰かにしたのである。東宮の地たる、南海に面した極めて邊鄙な漁村であるが、瑞軒の遺趾を顯彰するに熱心な幸吉は、特に時の樞密院副議長清浦奎吾

の臨席を請うてその起工式を擧げ、これに因んでその碑文をも奎吾に頼み、そのできるを待ち、曹洞宗永平寺派管長日置默仙をへいして除幕式を行い、併せて追弔會をも執行したのである。この地に名士名僧の足跡を印したのは初めての事である。そしてその遺跡はこれを鶴倉村に寄附して永久に保存されてある。

これより先、明治四十四年河村瑞軒に正五位を追贈せられたのであるが、残念なことにその子孫の存否さえ明かでなかつた。幸吉は深くこれを遺憾とし、苦心慘憺百方探索の末ヤツトその八代の孫義濟が今は東京にゐることが判つたので、これにその恩命を拜受させることができたのである。大正八年に至つて義濟はその五男重男を遣わし、御木本眞珠養殖場に就職を請うた。外ならぬ先賢の後裔であるから悦んで採用したが、尋常小學校を了えたばかりの兒童であつたから、せめて高等小學校を修了させてやり度いと幸吉の親心から、まずこれを遠祖瑞軒生誕の地たる東宮に送つてその小學校長に託し、月々の教養費を支給して修學させ、卒業を待つて最初の希望通り養殖場員となし、今は二人の子供の親となつてゐる。一代の智慧者とうたわれて、土木に海運に、盛名を元祿の昔に馳せた河村瑞軒であるが、その機略縦才が劇的に世に傳えられている外には、後圖全く遺逸に歸し、わずかにその墓碑が鎌倉の圓覺寺に在ることだけが、或範圍の人達に知られているばかりであつて、その生誕地の如きは、生誕地においてさえ知られてゐなかつたのに、幸吉の先賢顯彰

の熱意によつて、今や伊勢の邊鄙な海村に、かくも立派に保存せられていることを筆者もまた更めて世に告げんとするものである。

その翌大正九年には幸吉は靜岡縣原驛に近き松陰寺にある白隠禪師の墓所のために立派な石標を建てた。これについては、同年九月十三日の國民新聞が閑話休題として次の如く述べている。

白隠和尚塔所の木標は、鐵道線路に沿うた寺背の空所に立てられて、ペンキ塗の見すばらしい物であつたが、頃日になつて一丈餘の立派な石標に代つた。

これには眞に殊勝な因縁がある。この石標の施主は臨濟宗の居士ではない。實にそうとう宗の信徒で、故の永平寺森田悟由老師に篤く歸依した人で、即ち眞珠店で名高い銀座の御木本幸吉氏であるのだ。(中略)

氏は常に東海道を上下することに、汽車の窓から例の木標を見て、臨濟宗を振興して五百年間不出の大宗師と仰がるる白隠和尚御塔所としては、眞に見苦しいことに思われたるその結果は、宗演・宗海二老師に親しやせる或老居士を通じて、石標の施主たらむことを申込まれた。

現兼務の山本玄峰和尚は非常に悦び、早速に地形にかかり、良き石材を漁り、大徳寺管長見性宗般老師の染筆を乞うて、今春に入つて竣工したのである。

とにかく、先賢古哲の顯彰に努めて、一般公共のために盡すことを厭わない幸吉であるから、まして直接の恩人や先輩に對する感恩謝德に至つては、誠に深厚篤實とうてい常人の企て及ばざるものがある。これにも色々の佳話があるが、ここにその著しい一つを挙げると、昭和五年五月二十九日の東京朝日新聞に「日本橋の商店の店先きに、まさまじ物語る名家の末」と題して次の記事が掲げられてあつた。

外務・司法・農商務・逓信・大藏の五大臣を勤めあげ、樞密顧問官・馬政局長官ともなり、伊藤博文公の歿後は、そのあとを承けて朝鮮總督ともなつて、世に時めいた故會禰荒助子爵の銀の胸像が賣物となつて、この程日本橋區北島町一ノ二四田中金屬商の店先にさらされて、道行く人の眼をうばつていたが、店頭さらしものは餘りひどいとあつて、二十七日から店の奥に仕舞い込まれた。像は重量八貫、丈三尺五寸、威風堂々と統監服をつけた會禰子を寫したものだ。云々これを讀んで驚いたのは、ちようど東京滯留中の幸吉であつた。直ぐ飛んで行つて即座にこれを買取つてしまつた。それが判つたとみえ翌日の同新聞は、またこれを傳え報じて、その後次にく附記したものである。

話は少し古いが、明治三十六年故子爵が農商務大臣時代、三重縣下多徳島の御木本眞珠養殖場を視察し、その場で明珠萬石と記念に書き残した。その書は今以て同所に飾られてあるという因縁から、この像を買取つたもので、御木本さんは、これを同所へ持つて行つて書と共に飾り、永

く記念するそだ。云々

これは事實である。しかし、かれが曾禰荒助から受けた恩顧は四字の揮毫だけでない。前にも述べておいた通り、荒助こそは、幸吉の養殖事業に絶えざる激勵と支援とを興えた恩人の一人である。しかし荒助は當路の大官であり、幸吉もまた名を惜む紳商である。徒らにその邸に出入して他の嫌疑を受くるが如きことは、かれの厭うところであつた。しかるに荒助他界の後には、家庭に不幸が續いて曾禰家は段々落ち目になり、遂に未亡人等は生活にすら窮するという誠に氣の毒な運命をたどつたのである。それを聞いた幸吉は、舊恩には報いなければならぬと言つて、その子隆三の名を以て私かに曾禰家に生活費を送つていたのであるが、それを知つていたのは、かれら父子だけであつた。そこへ、この度の銀像買取の事が新聞に出たので、世間は佳話としてこれを傳え、曾禰家もまたこれを知り、未亡人から感謝の書状を寄せている。

ところが昭和十一年二月七日未亡人が七十九歳で中目黒の長屋で逝去した時の如きも、遺族たる二人の寶子がしよう然として遺がいに侍していた外、萬事の世話をしているのは御木本眞珠店から手傳にきていた數名の店員だけであつた。大臣夫人・統監夫人とあがめられた華やかな生活から、不幸にも血で血を洗うようなお家騒動をくりかえして、遂に落魄の臨終へと轉歸した數奇を極めた未亡人の最後を弔うため、この長屋を訪ねた新聞記者に、この二人の遺族が話した物語によつて、

初めてこれまで世間が全然知らなかつた幸吉十數年にわたる謝恩の仕送りが、ゆくり無くも明るみに出され、現時に珍らしき陰徳として東京、大阪の大新聞に掲げられ、地方新聞にも轉載せられて「十年謝恩の仕送り」とか「情けの眞珠王」とか色々の讃辭を以て全國にけん傳せられた。粗放の一面に極めて律義なところがあつた、豪壯を悦ぶ反面に、床しい人情味をたたえている幸吉の風格はここにもしのばれるではないか。

幸吉の寄附行爲は、ただ金錢の提供だけでなく、いつも精神を添えてこれを致しているのであつて、これも確に注目せらるべき特異の心境である。ことに郷土愛の精神に強い幸吉のこととて、郷土に關係ある寄附行爲には、身を以てこれに加わり、眞先に立つてこれを指導している場合さえさぶる多い。かかる場合には、いつでも施策の指導や計畫の是正や實施の盡力等、とにかくそれに關する精神的寄與が主であり先に立つのであつて、金錢物資の供出は、むしろこれに伴うこと、あたかもサンミに添えられたツマの如き姿である。こうした寄附行爲は非常に多いのであつて、試みに明治四十一年一月から昭和十二年十二月に至る三十年間の記録を計しても、實に百八十六件の多きに及んでいる。それらを通覽すると、土木的事業に關する寄附が多いのであるが、さてその土木的事業に關して目につくのは、幸吉が同時にその地方人民に勤勞を授けていることこれである。即ちかれは、自ら金錢を供出すると共に大抵の場合、關係地區の村民、ことに青年團員等を勧誘し

これを總動員してその勞働に従事させているのであつて、それは正にかれらに勤勞を授けるのであり、しかも、この種の勤勞授與こそ非常に意味深いものである。というのは道路の改修にせよ、橋梁の架設にせよ、はたまた堤防の補強にせよ、その路を歩みその橋を渡りその堤を踏む主たる者はその地區の村民自らであるから、自分に直結せる公共物として、常にかつどこまでも、これを愛護し保全し大切にす精神と態度とを、かれらに長養することこそ、極めて重要な事柄だと、幸吉には考えられたからである。世には随分大きな寄附行爲でありながら、ただ口を利いて腹を肥やすだけで、そのできばえ如何に十分の關心をさえ拂わない人々の介在する場合も往々あるが、幸吉はこうした弊を知つて、ワザト世間普通の寄附行爲とは違つた行き方をしてゐる。

従つてかれの寄附行爲の中には實に異彩を放つたものがある。大正十一年三月のことである。武藤島羽警察署長は、四月一日から實施せられる未成年者禁酒法は何分初めての事ゆえ、これを周知させるには十分な宣傳を要することを語つたので、幸吉は署長の熱心な感じ、喜んでその宣傳費全部を寄附するから、君の希望する通り極力努力してみ給えと勵ましたものである。そこで署長も大いに喜んで直に「酒の注意」と題して、未成年者禁酒法の要點を一うち書きに、極めて平易に書きおろしたものを数千枚を印刷させ、これを全管内衆人集合の場所、即ち湯屋・理髮店・飲食店・喫茶店等から藝ぎ置屋・貸座敷等に至るまで、ありとあらゆるそうした場處に、全部配布し揭示し

て、これが徹底に努めたのである。幸吉自らが禁酒家であり、その配下の眞珠店員も、養殖場員もすべて禁酒を勵行している人々の主人であるだけに、一入すがすがしい美事として響く。

## 一八 郷土の改進めざす一貫の盡力

178

幸吉は郷國志摩の風景に對する心酔者であり、その明びな風光こそ、生きた名畫であると現に信じている。牧野伸顯が初めて鳥羽の御木本邸にきた時、時候のあいさつが済むやいなや、幸吉は昔から私が愛蔵している光琳のびようぶがありますが、御覽になりませんか。と言つた。

ホホウそれは拜見しましょう。

と伸顯が答えると幸吉はツト立つて部屋の障子を明け放ち、眼下に展開する鳥羽灣内の島々を指し私のびようぶは、あの島々の一帯の景色です。どうです。光琳の畫いたのよりも美しい枝ぶりの松があるじやありませんか。

と至極マジメに説明するので、なる程と伸顯もうなすいた。やがて幸吉は案内して、有名な日和山から錦浦・主水山等附近の勝地を見せ、そして

私は書畫や骨とうを買う代りに、景色のよい處や由緒の深い處を手に入れて、これを保護することをやつて居ります。

と言うと伸顯は

いかにも、これでは偽物をつかむ心配もなく、ナフタリンも要らず、最も結構な書畫ですね。

と言つて、互に顔見合せて大笑したのであつて、これは全くの實話なのである。

志摩一圓をば繰り擴げられる繪卷物とすれば、その第一ページは鳥羽である。鳥羽の小學校の校

歌は

波靜かなる錦浦　　行きこう船のろかいにも

努める人の力あり。

ながめは廣き日和山　　飛立つ鳥の行く手にも

わが志す目あてあり。

昔を語る鳥羽の城　　ふるき教を身にしめて

新しき世に進まなん。

というのであつて、筆者の作であるが、この校歌のうたう通り、錦浦といい日和山といい、また鳥羽の城跡といい、數々の名所に富んでいる鳥羽こそは、確に風光明びである。その勝景をば極彩色の扇面だとすれば、かなめの處に立つているのが日和山で、昔はこの邊一帶の船頭衆や漁師達が日和を見定めるには、この山に登つたところから、その名が起つたといわれるが、ここに登つて四方

179

Sataged



を望めば鳥羽の大観が得られる。先づ前方を見渡すと、錦浦の青波の中に、坂手や桃取の島々がさながら墨繪のような姿を横たえ、その向ふに神島がまゆすみのように浮かんでいる。その先には灰色の知多半島が雲かかすみの間に隠見し、秋晴れの空には渥美半島の伊良子崎までが微かに表われる。かように海上の風景が遠近濃淡の色を漂わせているのを、ながめた眼をば右から後ろの方に移すと、これはまた眞珠が島、鳥羽の城跡から種<sup>くさ</sup>の山、さらに朝熊山が指呼の間に見え、遠くは紀伊から伊勢、大和から伊賀あたりの連山が肩をそば立てて、雄大な山景を繰り擡げている。いかにも鳥羽こそは、山海の風光を併せ収めた勝景の地である。

貨物輸送の良港としての鳥羽の名は、昔から世に知られていたが、その勝景が観光の客を招致するようになったのは、鐵道が宇治山田から鳥羽まで延長されたからのものであり、この鐵道の延長には幸吉が大いに盡力したものである。もつとも鳥羽に鐵道慾のきざした歴史は古いもので、既に二十六年に參宮鐵道が山田まできた時に、鳥羽町の先進者達はその延長を要望したが、參鐵會社は採算上これを容れなかつた。そのうちに鐵道國有法により、參鐵それ自體が國家に買収せられることになり、しかも若干年の猶豫期間を存したので、その期間において鳥羽町と會社との間に交渉が調い、會社は測量を進め鳥羽町は土地の買収をあつせんし、そして政府に引繼がれたのであるが、幸吉は鳥羽町長須藤富八郎・二見町代表辻喜代藏の兩氏と共に終始一貫力を致したのである。かれ

は先ず、自分は當分の中は鳥羽の土地は買わないと宣言してけん疑を避け、そしてひたすら鐵道敷地の買収あつせんに奔走した。しかし幸吉の郷土開發心は、鳥羽線の開通で満足するものでなく、さらに交通網を志摩一圓に張らせて、その勝れた天與の風光を天下に知らせようとするにあつた。大正九年七月二十日鳥羽町では鐵道開通十周年の記念式を舉げたが、その前日に、かれは次の如き談話を伊勢新聞紙上に發表している。

鳥羽鐵道の開通によつて直接の影響を受けるのは鳥羽町であるが、私は、この開通の利益を志摩全國に均てんさせたいと念願する。そもそも志摩が勝景の地たるは世に定評がある。從來交通の不便が名所舊跡を空しく田園に埋没せしめて、廣く知らしめなかつたのは遺憾に耐えない。磯部は南志摩の要地で、鳥羽へ來るにも宇治へ出るにも、ここで分れる處であるから、鳥羽鐵道の開通によつて繁榮を加えるであろう。見給え、昨年縣會を通過した五知峠の開さくも、四年の後には完成するから、その曉には、鳥羽まできた遊覽客は南志摩にも行くであろうし、磯部・宇治を一周してその沿道にある天の岩戸だのオーム石だのと稱する處を見物することもできる。殊に鳥羽磯部の中途にある青峰山勝福寺の如きは絶勝の地で、その頂上から太平洋を望観する雄大なながめは、學徒青年等の登山の域として最も推賞に値する。とにかく私はこの鐵道の開通に關連して、一には、志摩一圓の人達に交通運輸の利便を與え、二には、まだ十分に知れ渡つていなか

つた志摩の風光を廣く天下に紹介することによつて、自他共に利益を受けて全地方の繁榮を將來すべき好個の機會をここに見出すものとして、衷心より祝福するものである。

しかも、當時における鳥羽以南郡村落の有様を見ると、道路は險惡で、それを通る數臺の馬車と十數臺の人力車とが、交通機關の全部であつた。これでは産業の開發も文化の進展も、これ以上に望み得ない。そこで幸吉は進んで郡村の有力者達を説き、先づ鳥羽から磯部を通つて鶴方つるかたに至る志摩縱貫輕便鐵道を敷設すべく勸誘し、これが實現には調査設計が先決問題だからとして、その費用を寄附した。かくて有志の人も段々出てきてその計畫が熟し、遂に今日の志摩電鐵の成立を見るに至つた。

しかし鳥羽町全體の盛衰及び町民の生活を直接に支配したものは、造船場鐵工所の消長である。けだし山と海とに迫られて、耕地というほどの耕地を持つていない鳥羽町の住民は、眞珠が島に對する海沿い一帯の地にあるこの設營から、直接間接にその生活を得たからである。この設營の沿革も實に明治八年の昔にまでさかのぼるので、即ちこの年ここに鳥羽造船場が創立せられたのであるが、以後その經營者がしばしば變わり、變わることに或は鐵工所となり或は造船場にもどりなどしたけれど、とにかく狭い港町の心臓部にあつて多數の工人を使つたから、鳥羽町及び近在の人達は職をここに得て働くことができ、またその人達の需要を充たすことによつて、各商店が繁昌したの

である。もしそこに煙が上がらず、機械の音がそこから聴こえなくなつたら、鳥羽の町も立行かない。ちよつと心臓が弱ると身體が衰えるようなものである。しかも一般の景氣ことに經濟界の變動によつて、この設營にも消長があり、時には擴張を見たけれども、また縮小もあり、閉鎖も起り代替りも行われる。それが五年目七年目に起つて、その度ごとに全町の問題となる。鳥羽に生れ鳥羽に長じた幸吉は、つとにこの關係を熟知していたから、問題の起ることに頼まれるままに、いつも快く引受けて、あたかも自分の事の如くに努力を惜まず、これに善處したものである。

鳥羽町が持つ大きな設營としては、海岸にある造船場に對して、後方堅神の山懐に抱かれながら横に入江に臨んだ商船學校がある。明治十四年に鳥羽の先輩で維新の先覺たりし近藤眞琴の創めたもので、わが國この種學校中最古のものの一つであるが、これも、もと私立の小さなものから町立のものとなり、規模のやや整つた縣立のものにまで成長し、ついに國立の立派なものにまで躍進したその容易ならざる發達には、これまた幸吉が終始一貫せる多年の努力が働いている。けだしこれは、この學校への支援後見が鳥羽町繁榮の途たるはもちろん、近藤先輩の遺志を全うする所以だと考えたからである。

總じて學校の設備の完遂を計ることは、かれにあつては一つの大きな道樂であつたとさえいえる。したがつて鳥羽小學校の改築、その新校舎は現にぎ然として鳥羽城跡の上に立つているが、こ

の築造の如きも、かれがその費額の大部を寄附したものである。思えば生れて最初の寄附が二十五歳の祝にここに捧げた三圓の金であり、また四十二歳の初老の祝にも金十圓をヤハリここに贈つたかれであるから、總じて小學校の事と聞けば、萬事を投げうつて奔走し、できるように成つてからは、いつも身分不相應の奮發を敢てして一向悔いなかつたのである。そしてそれは鳥羽の小學校だけでなく、郡内諸地の小學校についても、そうであつた。

いうまでもなく、鳥羽における幸吉が盡力の對象は教育事象に限られたわけではなく、あらゆる面に行渡つてゐる。その二三を挙げると、火葬場の新設と墓地の改修の如き、その一である。由來鳥羽の墓地は狭くかつ不整備で、風紀衛生上からも儀禮體裁上からも共に不十分であり、早晚その改善を必要としたのであるが、何分まだその機運に達しなかつた。火葬の制を採用するならば、幾分かこの墓地不備の缺點を緩和することができようという考から、幸吉は町當局に對し火葬場の設置を進言した。しかしその設置には相當の費額を要するのに、町財政に餘裕が無かつたので、かれは大正六年にこれが新設費の全部を寄附したのである。またこの邊の寺院の多くで、墓所への參道の石段には、いわゆる無縁墓即ち縁故者無き墓の碑石を用いることが多く、墓參者が往復の都度これを踏んで通るのは、死者に對しても非禮であり、思想上の影響もよくないと考えた幸吉は、同じ大正六年にまず自家の墓所たる濟生寺に費用を喜捨して、その參道を補修せしめ、無縁墓碑石の用い

てあつたのを全部取除かせ、かつ以後は、參道の改修には墓碑を一切使用せざることに定めた。これが漸次他の寺院の倣うところとなり、火葬場の新設と相待つて、鳥羽の墓地が面目を改めたのである。

火災の損害に對する寄附の如き、その二である。大正六年十二月二十日午前十一時鳥羽町宇錦町に失火があり、折あしくこの日は西北の風烈しく、火の手はこれにあおられて忽ち中之郷町に延び見る見る中に百十六戸を類焼させたのである。小さな港町のことでとて百戸に餘る焼失は仲々の混雜を來し、灰じんの收拾も直後には容易でなかつた。當時幸吉は大阪にいたが、鳥羽ことにわが錦町の火事と聞き、寒中に焼け出された人達にまず要るものはフトンであろうと、直ぐ買集めてフトン千枚を調べて鳥羽に急送し、その荷物と同じ列車に自分も乗つて鳥羽に歸り、他方多徳島養殖場へ打電して操業中の壯者十數名を鳥羽に呼寄せ、り災區域の整理に當らせること十日に及び、焼跡の灰じんは、おおむねこの人達の手によつて片づけられたのである。この時かれは進言して、従來幅二間しか無かつた道路を四間幅の道路になわ張りさせ、その民有に屬した部分は言い値のままにこれを買取り、道路として町に寄附したので、この邊の街路はかくして四間道路となつた。同時にり災を免れた町々の有力者をも光岳寺に招集して會議を開き、今後も機會あるごとに力を加えて全町の道路を四間道路たらせる方針を樹立させた。

志摩一圓に對して幸吉が力を致した公共事業の中にも特に著しいのは道路の改修である。これについても目ぼしいもの三四を擧げると、その一は和具道路の開通である。鵜方村地内波切港道から分れて和具海岸に達する便があつたならば、船によつて前島半島の各地に渡ることができるのであるが、干潮を待つて船着場から海岸を徒渉し、その上高低の小徑を経て行かねばならず、したがつて貨物の如きは、ことごとく肩擔による外に運搬の術がなく、不便至極であつた。幸吉はつとにその不便を除いてやろうと志し、村當局に勸めて先ず橋を葛西川に架けて干潮時徒渉の不便を除き、次に車馬をも通じ得べき最短距離の新道路を設計し、それは和具村海岸から前島街道に接続するものであるから、和具道路の名を附け、そして郡費の補助を受くべき線路へのこれが編入を當局に請わせた。この建策が功を奏して明治四十四年には架橋の事が完了し、大正二年に至つて和具道路ができ上つた。かくて和具海岸から英虞灣内の要所に交通する營業巡航船は七隻の多きを計え、南志摩交通上の重要なものとなつてゐる。しかもこの土木工事に對して幸吉が支出寄附した金額は驚くなかれ、架橋費中への一百圓と道路費中への三百圓と合せて僅々四百圓に過ぎずして、他はかれが得意の精神的の盡力で、この實益多き事業を完成し得たのである。

これに次で企てられたものは、鵜方・下津浦間道路の開通である。これは上述和具道路の終點たる鵜方村海岸から、濱島町・迫子・鹽屋・檜山路村を貫いて度會郡神原村下津浦に達する道路で、

これができる、志摩の英虞灣と伊勢の五箇所灣とが陸路直結せられて、かれの兩養殖場の便益だけでなく、地方公共の利便も極めて大きいものがある。幸吉はこれを考え率先して關係地方當局に勧めたところ、その熱誠は地域人民の共鳴を受けて協議會で實行が決せられたが、經費の負擔について各地域にそれぞれ難點があつて、足並みがそろわない。かれは經費に關しては豫め十分の援助を約し、ことに檜山路下津浦間に横わる分水嶺は險阻はなはだしく開削容易ならざるべきを看取したから、ここはかれが獨力これに當らんことを誓ひ、かくていよいよ實行に入ることができ、そして大正二年一月に起工して同十二月にしゅん工し、その道路の延長二里二十三町、その幅員は五尺乃至六尺、全工費の七割は幸吉が負擔したのである。しかも、こうした工事をば身を以て指導し監督することが、かれには無二の道樂であつて、かれは好んでこれに没頭したのである。同月十日附の書狀の一節に

度會郡下津浦と志摩の鵜方とを結ぶ道路を新設に付毎日多忙罷在候。明日は確定可致候。毎日二三里の急坂を徒歩するに付昨夜は小便濁り申候。本日一日休養いたし候。鳥羽より磯部・鵜方それより迫子・鹽屋・檜山路を経て下津浦に自動車を通ずる目的。また鵜方と迫子村の間より支線設くること二十丁、第二養殖場(多徳島の對岸、今の多徳)他日御木本村と申す處に至り申し候。今回の道路は三里三十丁、此附近の百姓の田畑通いと學校通いの生徒のためになる。志摩